

松江市文化財調査報告書 第206集

# 史跡出雲国分寺跡発掘調査報告書

第19次～第22次発掘調査

令和4(2022)年3月

松江市

松江市文化財調査報告書 第206集

# 史跡出雲国分寺跡発掘調査報告書

第19次～第22次発掘調査

令和4（2022）年3月

松江市



# 序

出雲国分寺跡は、松江市竹矢町字寺領に所在します。奈良時代に発生した天然痘の流行などを契機に、聖武天皇が仏教の功德による国の平和を願って造らせた寺院です。大正 10（1921）年 3 月 3 日に国史跡に指定を受けました。

出雲国分寺跡は、令和 3（2021）年に史跡指定を受けてから 100 年を迎えました。大正 10 年の史跡指定は、我が国で行われた最初の指定にあたります。全国の国分寺の中で、出雲国分寺はその歴史的価値がいち早く認知され、現在に至るまで守り伝えられてきています。

本書は、平成 29（2017）年度～令和元（2019）年度に実施された発掘調査成果をまとめたものです。これまで長きにわたり蓄積されてきた出雲国分寺の研究成果に新たな調査成果を付加し、未来にわたって出雲国分寺跡が松江市民に郷土への愛着と誇りを育む文化財となることを願います。

最後になりましたが、本報告書の刊行にあたって、史跡出雲国分寺跡発掘調査指導委員会の諸先生方、地元住民のみなさま、島根県教育委員会並びに関係者のみなさまには多大なご支援とご協力を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

令和 4（2022）年 3 月

松江市

市長 上定 昭仁

# 例 言

1. 本書は平成 29 年度から令和元年度にかけて松江市埋蔵文化財調査室で実施した出雲国分寺跡発掘調査(国庫補助事業)の成果をとりまとめたものである。

2. 遺跡の名称・所在地は以下のとおりである。

名称/所在地 出雲国分寺跡(県遺跡番号 D229)/松江市竹矢町字寺領 103-2、500-2

3. 本報告書の発掘調査事業年度、調査回数、調査期間、調査面積は下記のとおりである。

平成 29(2017)年度 第 19 次調査 平成 29 年 8 月 17 日～23 日、16.53㎡(T46)

平成 30(2018)年度 第 20 次調査 平成 30 年 12 月 13 日～25 日、9.44㎡(T47)

令和元(2019)年度 第 21 次調査 令和元年 5 月 13 日～23 日、9.8㎡(T48)

令和元年 6 月 17 日、19 日、7 月 2 日、17.6㎡(T49、50)

第 22 次調査 令和 2 年 2 月 25 日～28 日、2.99㎡(T51～T54)

4. 調査組織

## 【平成 29 年度・第 19 次発掘調査】

調査主体

松江市教育委員会

教育長 清水 伸夫

事務局

歴史まちづくり部まちづくり文化財課

〃

埋蔵文化財調査室

室長 飯塚 康行

〃

〃 調査係

係長 赤澤 秀則

〃

〃

主幹 川上 昭一(担当者)

〃

〃

主任 青山 賢

〃

〃

主任 落合 智之

〃

〃

主任 徳永 隆

〃

〃

学芸員 三宅 和子

〃

〃

嘱託 金森みのり

〃

〃

嘱託 小川真由美

〃

〃

嘱託 高尾万里子

## 【平成 30 年度・第 20 次発掘調査】

調査主体

松江市教育委員会

教育長 清水 伸夫

事務局

歴史まちづくり部まちづくり文化財課

〃

埋蔵文化財調査室

室長 宮本 英樹

〃	〃	調査係	係長	川上 昭一
〃	〃		主幹	川西 学
〃	〃		主任	青山 賢
〃	〃		主任	落合 智之
〃	〃		主任	徳永 隆
〃	〃		主任	佐々木紀明
〃	〃		学芸員	三宅 和子 (担当者)
〃	〃		嘱託	金森みのり
〃	〃		嘱託	小川真由美
〃	〃		嘱託	高尾万里子

【平成 31 年・令和元年度・第 21・22 次発掘調査】

調査主体

松江市

市長 松浦 正敬

事務局

歴史まちづくり部まちづくり文化財課

〃	埋蔵文化財調査室	室長	宮本 英樹
〃	〃	調査係	係長 川上 昭一
〃	〃		主幹 川西 学
〃	〃		主任 落合 智之
〃	〃		主任 徳永 隆
〃	〃		主任 原 貴志 (10月1日～)
〃	〃		主任 佐々木紀明 (~9月30日)
〃	〃	副主任	野村 豪士
〃	〃	学芸員	三宅 和子 (担当者)
〃	〃	嘱託	小川真由美
〃	〃	嘱託	高尾万里子
〃	〃	嘱託	坪倉ひとみ

【令和 3 年度・報告書作成】

調査主体

松江市

市長 上定 昭仁

事務局

歴史まちづくり部まちづくり文化財課

〃	埋蔵文化財調査室	室長	川上 昭一
〃	文化財総合コーディネーター		丹羽野 裕
〃	〃	調査係	係長 川西 学

〃	〃	主 幹 古藤 博昭
〃	〃	主 任 原 貴志
〃	〃	主 任 徳永 隆
〃	〃	副主任 野村 豪士
〃	〃	学芸員 三宅 和子 (担当者)
〃	〃	主任主事 灘 友佳
〃	〃	学芸員 永野 智朗
〃	〃	会計年度任用職員 小川真由美
〃	〃	会計年度任用職員 高尾万里子
〃	〃	会計年度任用職員 坪倉ひとみ
〃	〃	会計年度任用職員 関 あかり

5. 出雲国分寺跡発掘調査指導委員会 (敬称略、所属・職名は委嘱当時)

委員長 蓮岡 法暲 松江市文化財保護審議会会長

委 員 勝部 昭 元島根県教育庁教育次長 (～令和2年8月31日)

委 員 花谷 浩 出雲市立出雲弥生の森博物館館長

委 員 大橋 泰夫 島根大学法文学部教授

委 員 高屋 茂男 島根県立八雲立つ風土記の丘副所長 (令和2年9月1日～)

6. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、レベルは海拔標高を示す。ただし、T49、T50 平面図の方位は磁北を示している。

7. 発掘調査、報告書作成に際して以下の方々、関係機関から御協力、御助言を頂いた (五十音順、敬称略)。

赤澤秀則、池淵俊一、今井智恵、勝部智明、木村由紀江、小山泰生、仁木聡、丹羽野輝子、平郡達哉、廣江耕史、松宮加奈、松本岩雄、守岡正司、山本京子

8. 本書で用いた土器の分類・編年及び器種名については以下の文献に準拠した。

島根県教育委員会 2013 『史跡出雲国府跡 9—総括編—』

9. 本書に掲載する土層名は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に従って表記した。

10. 調査に携わった発掘作業員は下記のとおりである (五十音順)。

岩成博美、大津進、加藤恵治、桑垣貴之、高野朋之、土江伸明、原英誉

11. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は川上、三宅、永野が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成、浄書は、金森、小川、高尾、坪倉、永野、三宅が行った。

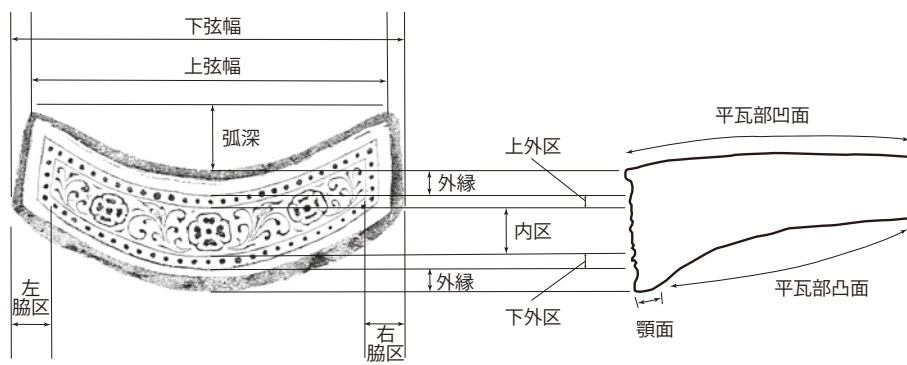
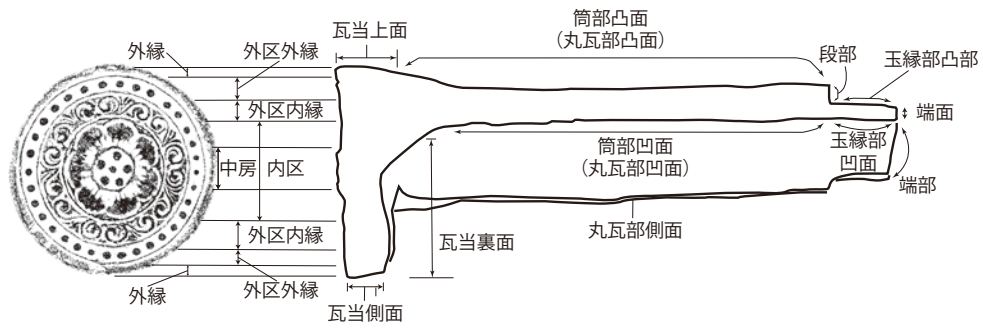
12. 本書の作成にあたり、奈良文化財研究所 田村朋美氏に玉稿を賜り付論に掲載した。

13. 本書の執筆は全体の編集を三宅が行い、第1章、第2章第1・3節、第3章、第4章第1・3節を三宅、第3章瓦事実記載、第4章第2節を永野が担当した。

14. 註、参考文献は各章末にまとめて掲載した。

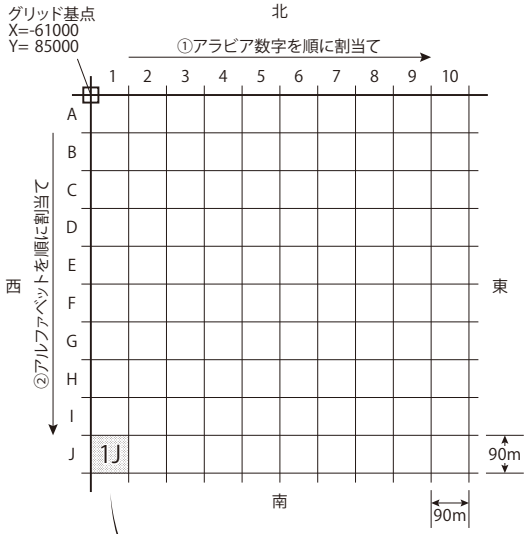
15. 掲載した遺構図の縮尺は、各図に縮率とスケールを配した。遺物実測図の縮率は原則、土器は 1/3、瓦は 1/4、玉は 1/1 とした。
16. 土師器の断面は白ヌキ、須恵器の断面は黒塗り、磁器・瓦の断面は網掛けで示した。
17. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真等の資料は、松江市埋蔵文化財調査室にて保管している。
18. 本書における遺構記号は以下のとおりである。  
SK：土坑 SP：柱穴・ピット SX：性格不明遺構
19. 遺構番号は『総括報告』の設定を踏襲し、各調査区の番号を冒頭に振り、遺構番号を連番とし後ろに配した。(例：T47 の SK01 → SK4701)
20. 国分寺に関する過去の刊行物に関しては、以下の略号とした。  
『周辺報告』…松江市教育委員会 2004 『出雲国分寺跡発掘調査報告書』  
『総括報告』…松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興財団 2015 『史跡出雲国分寺跡発掘調査報告書—総括編—』  
『山本報告 I』…松江市教育委員会 1958 『出雲国分寺址第二次発掘調査報告書』  
『石田報告』…地方史研究所 1963 『出雲国分寺址・国府址調査報告』  
『近藤報告』…島根県教育委員会 1968 「寺跡」『島根県文化財調査報告』第 5 集  
『前島報告』…島根県教育委員会 1975 「古代寺院跡」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』  
『山本報告 II』…山本清 1991 「第五出雲」『新修国分寺の研究第 4 巻—山陰道と山陽道—』
21. 瓦の分類名については、『総括報告』の第 6 章第 3 節を参照とされたい。
22. 伽藍中軸線と金堂中心線の考え方は次のとおりである。  
伽藍中軸線…現在、主要伽藍の本来の位置がどこにあたるのかは分からない。このため国分寺の正確な中軸線を出すことはできないが、整備基壇が本来の遺構上に正確に復元されていると仮定し、整備基壇の金堂と僧房の建物中心点を結んだ線を便宜的に「伽藍中軸線」と呼称することとした。この中軸線の設定方法は『石田報告』や『山本報告 I』で設定した「金堂僧房心々連結線」に対応させるためである。  
金堂中心線…金堂の建物心々を通り、金堂建物桁行に並行する東西線を「金堂中心線」とした。この金堂中心線と伽藍中軸線は直交するものである。



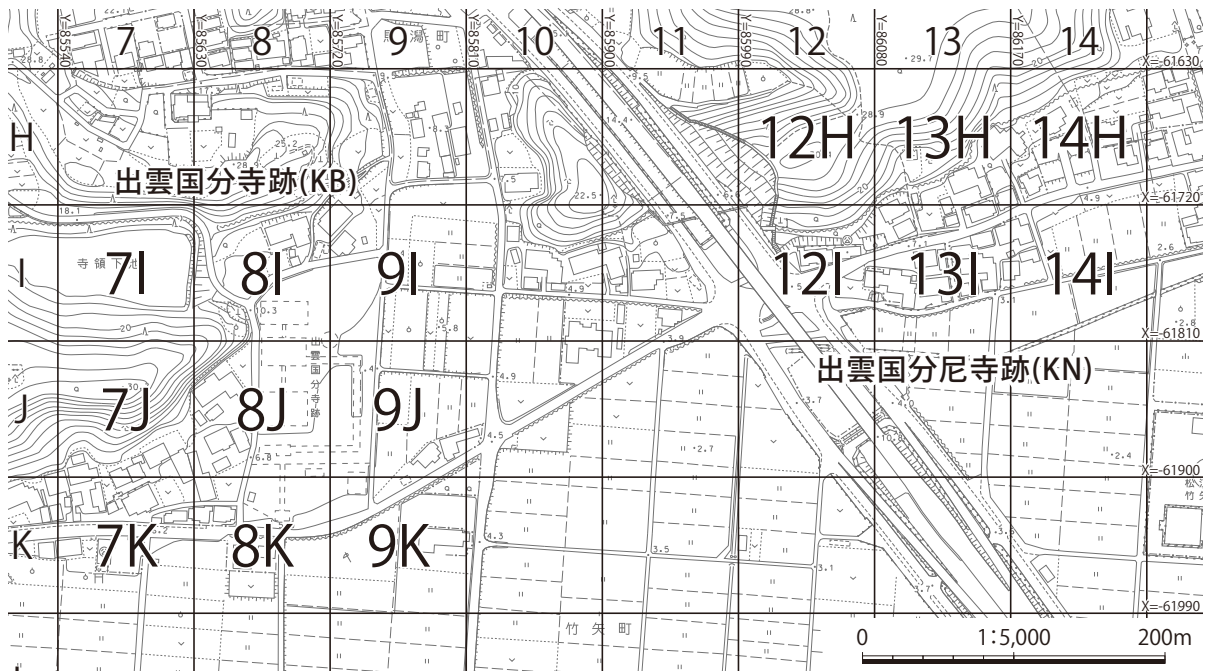
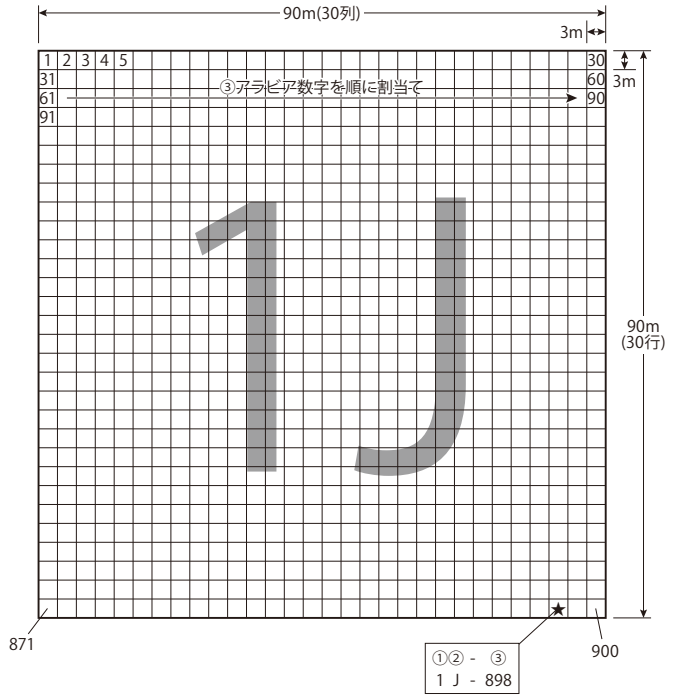


軒瓦の名称

大グリッド(90x90m)の設定



小グリッド(3x3m)の設定



グリッド設定図

# 目次

例言

目次

## 第1章 序章…………… 1

第1節 調査に至る経緯と経過 …………… 1

第2節 報告書の作成 …………… 4

## 第2章 位置と環境…………… 5

第1節 出雲国分寺跡の位置 …………… 5

第2節 地理的環境 …………… 7

第3節 歴史的環境 …………… 8

## 第3章 発掘調査…………… 13

第1節 調査の方法 …………… 13

第2節 伽藍地北東部の調査（第19次調査・T46）…………… 15

第3節 講堂西側の調査（第20～22次調査・T47～T54）…………… 18

## 第4章 総括…………… 41

第1節 遺構の検討 …………… 41

第2節 出土瓦について …………… 46

第3節 調査成果のまとめと今後の課題 …………… 49

付論 出雲国分寺 T47 出土ガラス玉の分析 ……………（奈良文化財研究所 田村朋美研究員） 51

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

# 挿図目次

図 1	出雲国分寺跡の史跡指定地	1
図 2	既往の調査	2
図 3	出雲国分寺跡の位置	5
図 4	意宇平野周辺の地質	7
図 5	意宇平野周辺の主な遺跡	9
図 6	出雲国分寺と出雲国分尼寺の位置関係	11
図 7	T47～T54 調査区グリッド図	14
図 8	T46 位置図	15
図 9	T46 平面・土層図	15
図 10	T46 出土遺物実測図 (1)	16
図 11	T46 出土遺物実測図 (2)	16
図 12	出雲国分寺の伽藍地外周溝	17
図 13	T47～T54 位置図	18
図 14	T47 平面・土層図	18
図 15	T47 上層出土遺物実測図 (1)	20
図 16	T47 上層出土遺物実測図 (2)	21
図 17	T47 下層出土遺物実測図 (1)	21
図 18	T47 下層出土遺物実測図 (2)	22
図 19	T47 下層出土遺物実測図 (3)	23
図 20	T47 下層出土遺物実測図 (4)	24
図 21	T47 下層出土遺物実測図 (5)	25
図 22	T47 下層出土遺物実測図 (6)	26
図 23	T47 下層出土遺物実測図 (7)	27
図 24	T47 下層出土遺物実測図 (8)	28
図 25	T47 下層出土遺物実測図 (9)	29
図 26	T47 下層出土遺物実測図 (10)	30
図 27	T47 下層出土遺物実測図 (11)	31
図 28	T47 下層出土遺物実測図 (12)	32
図 29	T48 平面・土層図	34
図 30	T48 上層出土遺物実測図	35
図 31	T49 平面・土層図	35
図 32	T50 平面・土層図	36
図 33	T51・T52・T53 平面・土層図	37
図 34	T54 平面・土層図	38
図 35	T54 下層出土遺物実測図	39
図 36	講堂西側の地山の標高	40
図 37	T47、T43、T41 土層状況	42
図 38	国分寺建設時の地形想定図	43
図 39	軒平瓦 1 型式の細分	47
図 40	軒瓦のセット関係	47
図 41	出雲国分寺瓦窯跡出土 軒丸瓦 2 型式	48
図 42	出雲国分寺 T47 出土ガラス玉の顕微鏡写真	51
図 43	カリ鉛ガラスの材質的特性	52

# 表目次

表 1	講堂西側の調査に関する事務手続き	4
表 2	各調査区の概要	4
表 3	T48 検出ピット等一覧	34
表 4	出土瓦集計表	46
表 5	蛍光 X 線分析結果	52

# 写真図版目次

写真 1	調査指導 (T46)	4
写真 2	調査指導 (T47)	4
写真 3	炭化物層 (図 14 - ②層) 検出状況	19
写真 4	合わせ口の土師器皿出土状況	33
写真 5	土師器皿の内容物検出状況	33
写真 6	T49 地山の落ち込み検出状況 (西から)	35

図版 1	上	講堂西側調査地 (T47 ~ T54) 遠景 (北東から)	図版 16	出土遺物
	下	T47 瓦出土状況 (南から)	図版 17	出土遺物
図版 2	上	T47 瓦出土状況 (南西から)	図版 18	出土遺物
	下	T47 西壁土層状況	図版 19	出土遺物
図版 3	上	T47 完掘状況 (南東から)		
	下	T47 北壁土層状況		
図版 4	上	T47 北西角の地山検出状況		
	下	T47SK4701 (南西から)		
図版 5	上	T47SK4701 瓦出土状況近景		
	下	T47SK4701 上面瓦出土状況		
図版 6	上	T47 有段式丸瓦 (図 20 - 1) 出土状況		
	下	T47 平瓦格子 3 (図 24 - 2) 出土状況		
図版 7	上	T47 須恵器坏 (図 17 - 6) 出土状況		
	下	T47 炭化物層土層状況		
図版 8	上	T46 調査後 (南東から)		
	下	T46 北壁 (9I - 28 区) 土層状況		
図版 9	上	T48 加工段 SX4814 検出状況 (北から)		
	下	T48 包含層土層状況 (図 29A - A' 断面)		
図版 10	上	T54 調査後 (東から)		
	下	T54 南壁土層状況		
図版 11		出土遺物		
図版 12		出土遺物		
図版 13		出土遺物		
図版 14		出土遺物		
図版 15		出土遺物		

# 第1章 序 章

## 第1節 調査に至る経緯と経過

出雲国分寺跡は松江市竹矢町字寺領に所在する。大正10（1921）年3月3日に最初の史跡指定を受けた。出雲国分寺の発掘調査は昭和30（1955）年に始まり、これまで大きく第Ⅰ期～第Ⅲ期に区分される調査が行われている。出雲国分寺跡の史跡指定、整備、既往の調査については『総括報告』に詳しいので参照されたい。

本報告の第19次調査は、平成29（2017）年度に実施された整備を目的とした発掘調査であり、20～22次調査は平成30（2018）年～令和元（2019）年度にかけて行った個人住宅新築計画に伴う



図1 出雲国分寺跡の史跡指定地

試掘・立会調査及び本発掘調査である。ここでは既往の調査の概要、本報告の調査に至る経緯、経過について述べる。

### 1. 既往の調査 (図2)

出雲国分寺跡における第I期調査(1、2次調査)は、昭和30(1955)年、32(1957)年に松江市教育委員会が主体となり地方史研究所に委託して実施した調査である。1次調査(昭和30年)は石田茂作氏によって実施された調査であり、国分寺の発掘調査で最も古い段階のものである(『石田報告』)。これ以前は出雲国分寺の研究はもっぱら文献と現地の地表観察によるものであったが、初めての発掘調査により主要堂宇の確認が行われた。続く2次調査(昭和32年)は石田茂作氏、山本清氏により

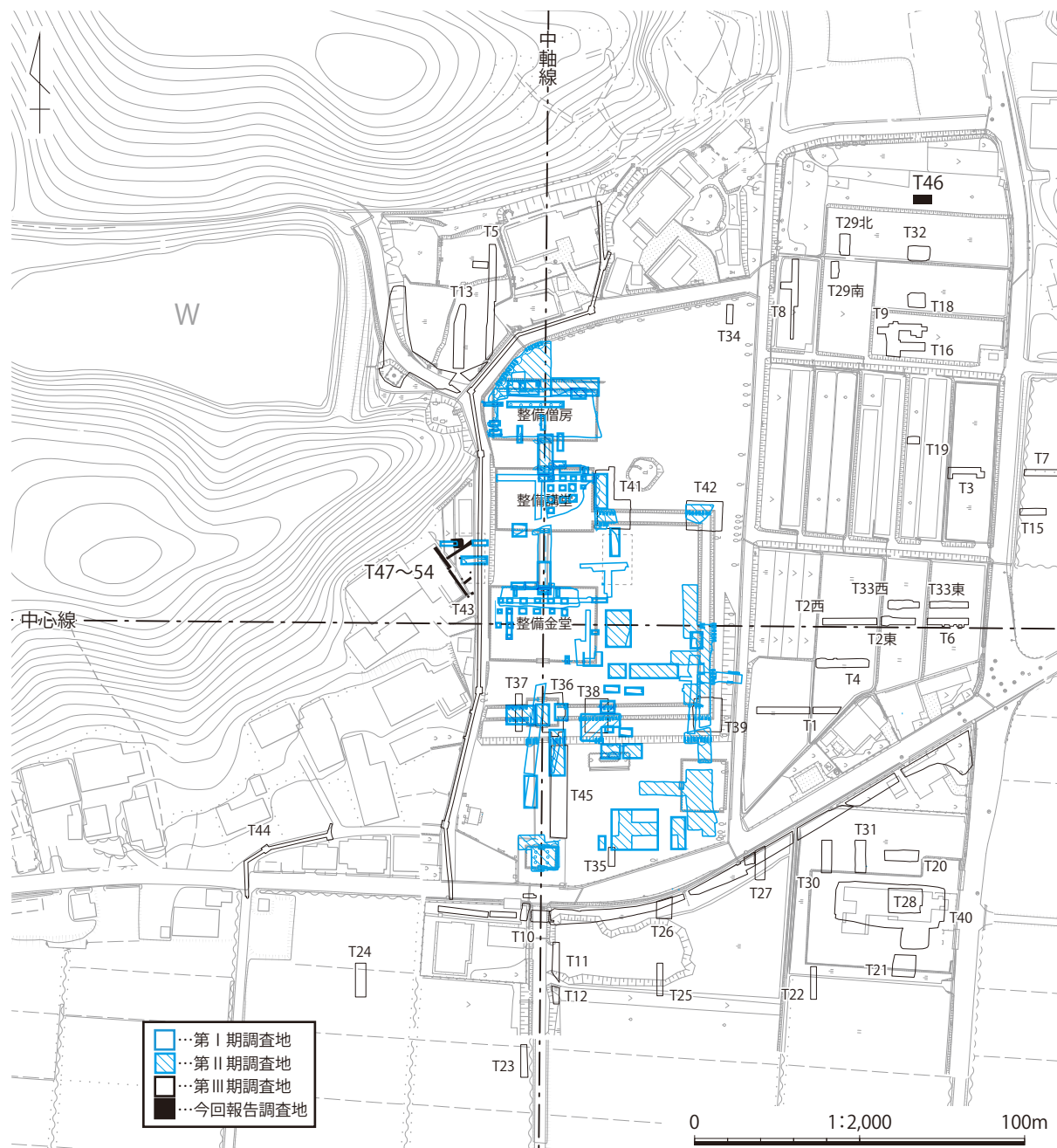


図2 既往の調査(第I期、第II期調査地の位置は推定)

実施された調査である（『山本報告Ⅰ』）。1次調査の成果を踏まえさらに細部の解明を目的とされた調査であった。これらの調査により石田氏は金堂をはじめとする堂塔基壇が一定の規格により構築されており、寺域が条里の区画に沿った2町四方の規模であることを提唱した。

第Ⅱ期調査は島根県教育委員会が風土記の丘整備事業に伴って実施した調査である（3、4、4'次調査）。3次調査では金堂と講堂間、講堂と僧房間で瓦敷通路が検出され、4次調査では新たに中門と回廊が確認された。塔跡は1次調査で想定した位置よりも大きく南へずれた地点に想定した（『前島報告』）。

第Ⅲ期調査は、当市が平成9（1997）年度に策定した「史蹟出雲国分寺跡整備基本構想」に基づき、平成10（1998）年度～平成22（2010）年度にかけて実施した確認調査、及び開発に伴う発掘調査である（5次～18次調査）。中門、回廊跡の再調査、及び伽藍地周辺の調査が行われ、寺域を区画すると思われる溝が伽藍地外に方形に巡ることが明らかとなった（『周辺報告』）。

## 2. 第19次調査（伽藍地北東部の調査）

松江市竹矢町字寺領500-2にて実施した調査である。伽藍地外周溝北東角部の北隣に位置する。当該地では過去に民間工事計画が発生していたが、いずれも計画にとどまり調査の実施には至っていなかった。当地には国分寺に関わる付属施設の存在がこれまで指摘されており、施設の有無を確認することが必要であるとされた。平成29（2017）年度に土地所有者の同意が得られたため調査を実施した。調査中、史蹟出雲国分寺跡発掘調査指導委員会を開催し、委員及び島根県文化財課職員の現地指導を受けた。

## 3. 第20～22次調査（講堂西側の調査）

松江市竹矢町字寺領103-2にて実施した調査である。講堂の西側に位置する。平成30（2018）年に個人住宅の新築計画が持ち上がり、史蹟指定地の隣接地であったため事前の試掘調査を実施した（第20次調査・T47）。調査の結果、古代末～中世前半の包含層と、瓦を大量に含む古代の包含層を検出した。また、調査区の西際にて地山が伽藍地内に段状に落ち込んでいる様子が確認された。

その後、個人住宅新築計画は、調査地の西側に隣接する既設納屋のリフォームに変更され、納屋改築工事に伴う本発掘調査、立会調査を実施した（第21次調査・T48～T50）。

納屋改築工事完了後、当該地にて駐車場新設工事が発生し、カーポート支柱の設置箇所について試掘調査を実施した。また、この試掘にあたっては第20次調査で検出していた段状の落ち込みの動向を確認するため、南に1箇所トレンチを設定し調査を実施した（第22次調査・T51～T54）。調査完了後、カーポート支柱設置による掘削深度を、遺構面に影響が及ばない範囲で施工することで合意し、工事が実施された。講堂西側の調査に関する一連の事務手続きは表1のとおり。



## 第2節 報告書の作成

平成30（2018）年度からT47出土瓦の整理作業、分析作業を開始し、令和3（2021）年度に遺物の実測作業を実施した。掲載遺物の選別は遺構内及び包含層出土遺物の中から実測可能で時期を示すもの、特殊品を抽出した。瓦については、トレンチ毎の破片数をカウントし、重量を計測した。さらに隅部が残存するものの点数も併せて表2に記載している。掲載遺物は、軒瓦と隅部が残存している丸・平瓦を中心に選別し、記録を作成した。遺物は小片で図化できないものは本文中で補うこととした。整理・実測作業の後、遺構・遺物のトレースと遺物の写真撮影を行った。



写真1 調査指導 (T46)



写真2 調査指導 (T47)

表1 講堂西側の調査に関する事務手続き

年	月日	概要
平成30年	11月20日	事業者から市へ埋蔵文化財の分布・試掘・確認調査依頼書提出。
	12月11日	市から島根県教育委員会へ文化財保護法99条の通知提出。
	12月13日～25日	第20次調査 (T47) 実施
平成31年	3月15日	納屋リフォーム工事に係る文化財保護法93条の届け出が事業者より提出。
	3月27日	下水道管、玄関ポーチ新設範囲についての本発掘調査指示が島根県より通知。
	4月26日	市から島根県教育委員会へ文化財保護法99条の通知提出。
令和元年	5月13日～23日	第21次調査 (T48) 実施
	6月17日、19日	立会調査 (T49、T50) 実施
令和2年	2月21日	市から島根県教育委員会へ文化財保護法99条の通知を提出
	2月25日～28日	第22次調査 (T51～T54) 実施

表2 各調査区の概要

調査回数	調査区	調査面積	調査原因	調査の概要	備考
19次	T46	16.53㎡	保存目的調査	包含層を検出	—
20次	T47	9.44㎡	個人住宅新築計画に伴う試掘調査	2時期の包含層と地山の段状の落ち込みを検出	—
21次	T48	9.8㎡	個人住宅改築工事に伴う本発掘調査	〃	—
	T49	9.26㎡	個人住宅改築工事に伴う立会調査	包含層と地山の段状の落ち込みを検出	地山未検出
	T50	8.34㎡	〃	包含層を検出	〃
22次	T51	0.25㎡	駐車場カーポート新築工事に伴う試掘調査	〃	〃
	T52	0.25㎡	〃	〃	〃
	T53	0.25㎡	〃	〃	—
	T54	2.24㎡	保存目的調査	2時期の包含層を検出	—

## 第2章 位置と環境

### 第1節 出雲国分寺跡の位置

出雲国分寺跡は松江市竹矢町字寺領に所在し、奈良時代には出雲国意宇郡に属している（図3）。中海に注ぐ意宇川下流域に形成された、いわゆる意宇平野の北辺に位置し、ここは天平5（733）年勘造の『出雲国風土記』（以下『風土記』）に「神名樋野」として登場する茶臼山の東麓にあたる。

現在史跡内は整備され公園として活用されているが、東側隣接地は水田部であり現在も耕作が営まれている。西側隣接地については宅地である。南には国分寺の南門から天平古道が続き、一帯には水田地帯が広がる。

出雲国分寺は天平13（741）年の「国分寺建立の詔」を契機に茶臼山の東麓の緩斜面地に建設された。国分寺から東0.9kmの斜面地に出雲国分尼寺が建設され、これらの場所は南に広がる水田面よりも

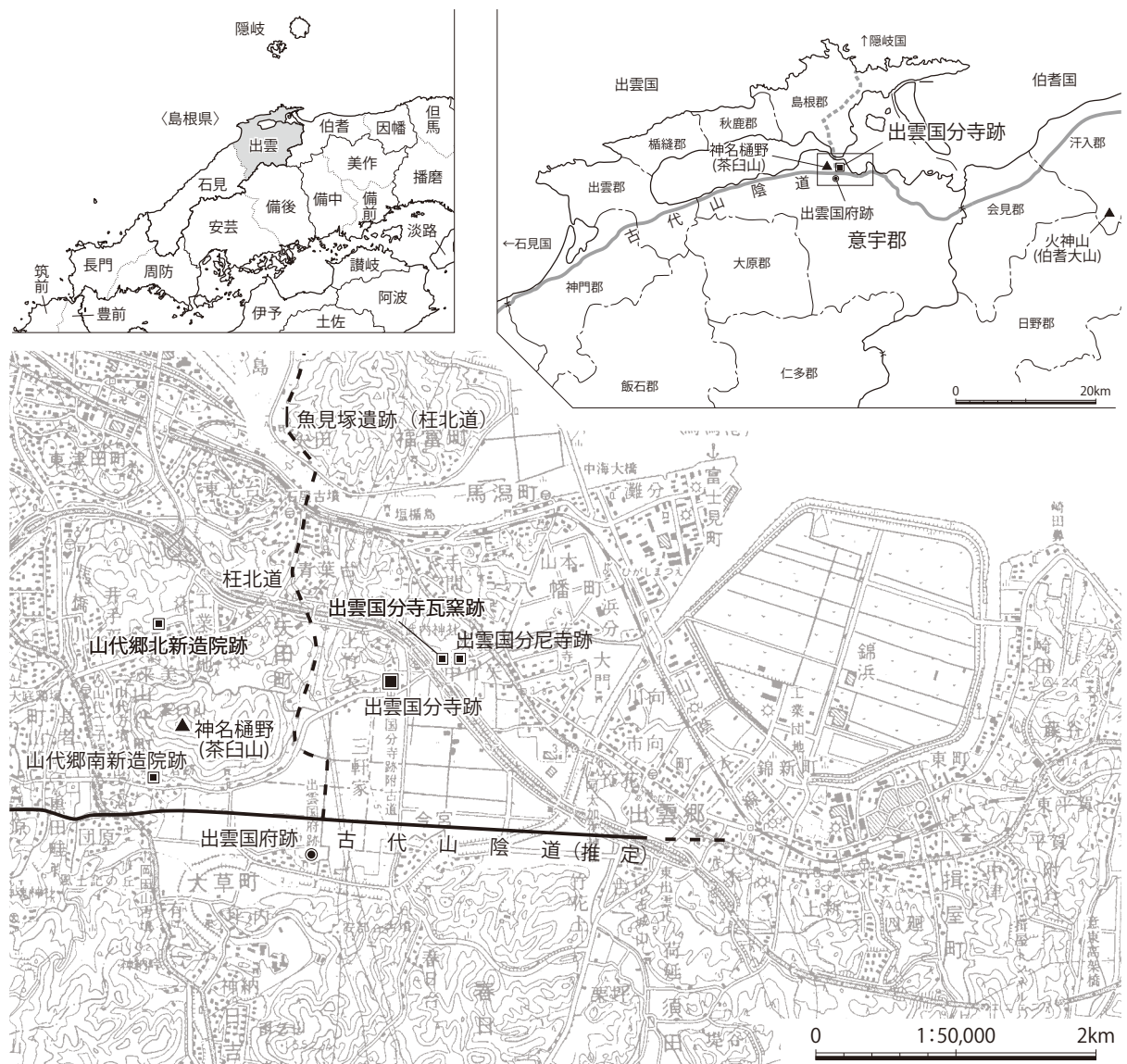


図3 出雲国分寺跡の位置

3～4 mほど高い土地である。平野の全域を見渡すことができ、東に中国地方最高峰の大山(1,729 m)を眺望することもできる。国分寺建立の詔では、寺の選地に関して人家に近すぎてもいけず、人が集まるのに不便であってもいけないとし、好処を選ぶよう命じており、眺望に優れた当地が選ばれたことが窺える。

周辺の主要官衙としては出雲国府跡が南西約 1.3km の位置にある。寺院は『風土記』に登場する山代郷北新造院跡(来美廢寺跡)、山代郷南新造院跡(四王寺跡)が茶臼山を挟んで南北に位置する。出雲国分寺跡と出雲国分尼寺跡に挟まれた傾斜地には出雲国分寺瓦窯跡があり、瓦は国分寺、尼寺、国府へ供給されていたことが発掘調査によって明らかとなっている。

近年発掘調査によって古代道の発見が続いており、出雲国府跡の北東にある十字路を分岐とし、隱岐国まで続く枉北道が発見されている(魚見塚遺跡)。

## 第2節 地理的環境

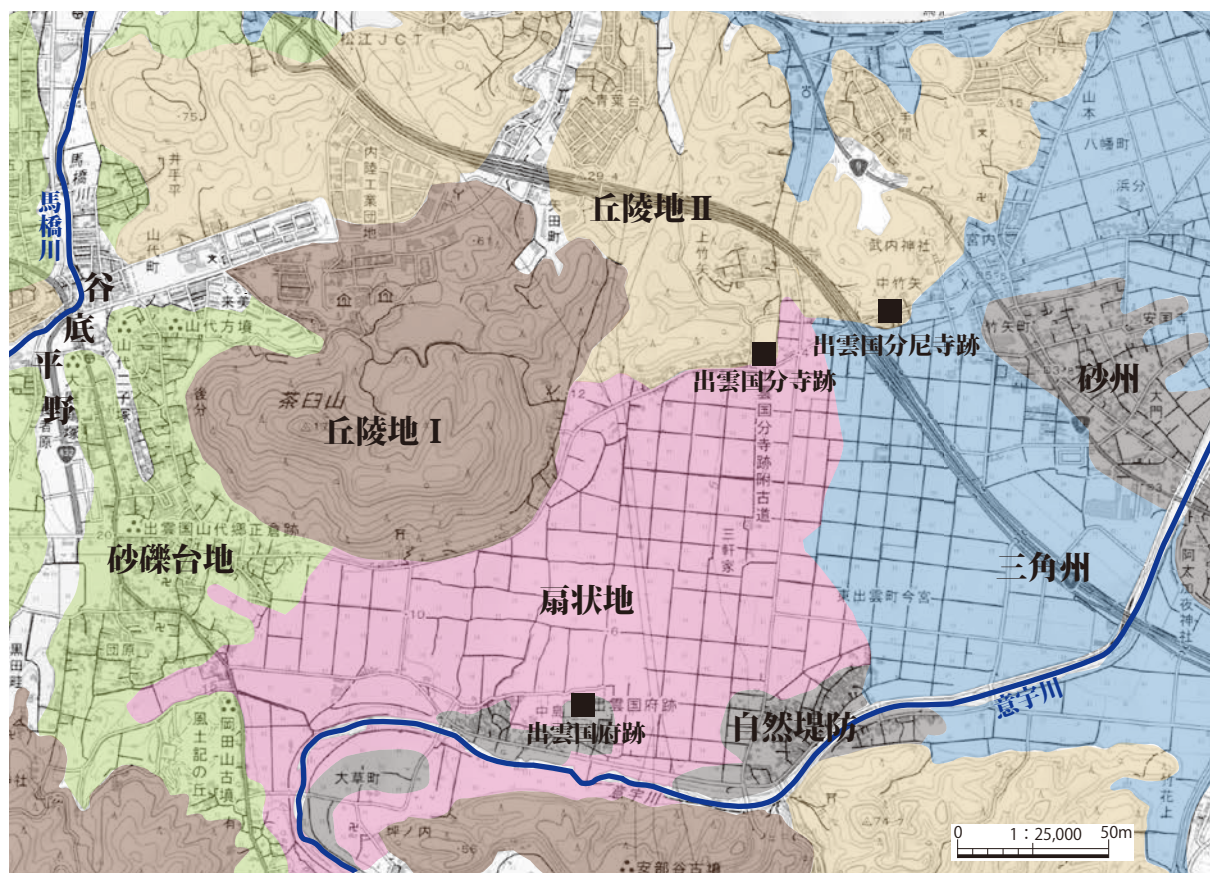
出雲国分寺跡は標高 141m の茶臼山から東に連なる低丘陵の先端部分に位置している。伽藍地は南が低い緩やかな傾斜地になっており、この南にはかつて条里制が敷かれていた意宇平野が展開する。

意宇平野は、ここを東流する意宇川の沖積作用によって形成された沖積平野であり、その規模は東西約 5km、南北約 3km と小規模である。

意宇川は松江市八雲町熊野に源を発して中海に注ぐ一級河川であり、古くは意宇平野の中でさまざまに流路を変えながら流れていたようで、少なくとも 3つの旧河道が認められている。この沖積作用によって、平野西寄りには低い扇状地地形が広がり、中ほどには三角州、下流域には沿岸砂州として形成された砂堆が微高地を形成している。

現在の意宇川は、北流して意宇平野に入るとすぐに直角に近く流路を曲げ、平野南辺丘陵に沿うように東流して中海へ注ぐ。この流路は 7 世紀末には定まっていたようで、平野南側の左岸扇状地には、出雲国府が設置されている。しかし、この後も意宇川は何度も氾濫を繰り返しており、その痕跡は条理の乱れや出雲国府跡の発掘調査の成果である厚い砂礫層にみることができる。

意宇平野の北には低丘陵があり、さらにその北には宍道湖と中海を結ぶ大橋川が流れている。出雲国分寺と国分尼寺は、この低丘陵の南斜面に位置しており、平野を挟んで国府と対峙する位置関係にある。国分寺の寺院選定にあたっては、意宇川氾濫の影響を受けることのない小高い安全な場所という点も考慮されたのかもしれない。



※島根県 1973「松江」『5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査（地形分類図）』をもとに作成。

図 4 意宇平野周辺の地質

### 第3節 歴史的環境

【旧石器・縄文時代】意宇平野の中で旧石器時代の遺跡は確認されていない。西側丘陵上にある下黒田遺跡(46)では、石器素材を剥離していく状況の分かる玉髓ブロックが検出されている。この他、南西の丘陵に位置する上立遺跡(54)からは、後期旧石器時代後半期の頁岩製搔器が水田造成の際に単体で出土している。

縄文時代になると、意宇平野の北に流れる大橋川沿岸部や鹿島町講武<sup>こうぶ</sup>地域にて遺跡が多く出現するが、意宇平野周辺では引き続き遺跡の数は少ない。平野の北側縁辺部の法華寺前遺跡(69)、竹矢小学校校庭遺跡(27)、さっぺい遺跡(24)、才塚遺跡(62)で少量の遺物が出土する。

【弥生時代】松江市における弥生時代前期前葉の遺跡は、大橋川より北の朝酌川沿岸部、鹿島町講武・古浦地域に多い。意宇平野で遺跡が出現するのは前期末から中期初頭頃である。代表的な遺跡として布田<sup>ぬのてん</sup>遺跡(70)があり、意宇平野東側の砂堆によって形成される微高地に位置し前期末～中期後葉まで存続する。土器、農工具、木器未成品、玉未成品などが出土しており拠点集落として位置づけられる。この他上小紋<sup>かみこもん</sup>遺跡(63)、向小紋<sup>むかいこもん</sup>遺跡(64)で水田跡が検出されており、布田遺跡を母村とした集団による開発地であった可能性が指摘されている(島根県教育委員会2017)。遺跡の分布が平野の北辺に限られることから弥生時代における意宇平野の開発は未だ十分なものではなかったとされる(池淵2017)。

後期には大坪遺跡(50)で竪穴建物が検出され、平所遺跡(22)では玉作関連遺構が検出されている。また、夫敷<sup>ふしき</sup>遺跡(71)では後期前葉の水田跡が検出されている。

周辺の墳墓としては的場遺跡(26)、間内越<sup>まないごし</sup>1号墓(20)、来美<sup>くるみ</sup>1号墓(36)、東百塚山20号墓(59)、東城の前1～3号墓(西津田・地図外)といった四隅突出型墳丘墓が弥生後期後葉～末に築造されている。

【古墳時代】古墳時代に入ると、平野の南で遺跡数が増加する。集落遺跡は中期に数が急増し、出雲国府跡(下層)(60)が代表的である。渡来系遺物が多数出土した特異な集落跡で、集落内が溝で区画され中に建物跡がある程度整然と並ぶ様子が検出されている。中核的な集落で豪族居館であった可能性も指摘されている。また、山代郷南新造院跡(四王寺跡)(47)では掘立柱建物群が寺院に伴う遺構の下層から検出されており、居館の可能性が考えられる。居館を奈良時代に入り寺院に転用した可能性が示唆される。

周辺古墳について、前期古墳としては社日1号墳(30)(全長19m)といった小型の古墳が築造されている。この頃の大型古墳は松江市の東約10kmにある安来市荒島丘陵周辺で連続的に造られており、大成古墳(長辺約60m)や造山1号墳(長辺約60m)があげられる。このことから、前期には安来市荒島丘陵周辺が中心地域であった。意宇平野周辺での最初の大型古墳は、茶白山東麓の廻田1号墳(34)であり、前期後葉に築造される。全長58mの前方後円墳で、この築造以降、意宇平野周辺で連続して大型古墳が造られるようになる。また、国分寺の西側丘陵上には出雲地域第3位の規模を有する前方後円墳である上竹矢古墳群7号墳(33)(全長63.9m)が築かれている。

中期に入ると大型古墳の築造は大橋川南北両岸に集中して認められる。石屋古墳(16)(全長42m)や廟所<sup>びょうじょ</sup>古墳(西尾町・地図外)(全長82m)といった方墳があり、中期末になると竹矢岩舟古墳(12)(全

長50m)のような前方後方墳、井ノ奥4号墳(14)(全長57m)のような前方後円墳へと墳形を変化させる傾向にある。

後期に入ると大型古墳の分布は大橋川南北両岸から南西内陸部の茶臼山西麓の台地(乃木段丘)一帯へと移動する。大庭鶏塚古墳(42)(一辺44m)、山代二子塚古墳(41)(全長94m)があり、中でも山代二子塚古墳は島根県最大規模の前方後方墳で、それまで在地の首長墓であった全長60m規模の古墳をはるかに上回る規模である。このことからより広域的な首長墓であったとされる。山代二子塚古墳築造後は、前方後円墳である東淵寺古墳(43)(全長62m)や、御崎山古墳(57)(全長40m)、岡田山1号墳(52)(全長24m)といった前方後方墳が引き続き築造される。

7世紀初頭から前半にかけては石棺式石室をもつ団原古墳(49)や向山1号墳(地図外)、山代方墳(40)、山代原古墳(39)が築造され、なかでも山代方墳は墳形や周堤帯を有する点から畿内との関連が指摘されており、律令期の出雲国造に繋がる出雲東部における最高首長墓に想定されている。

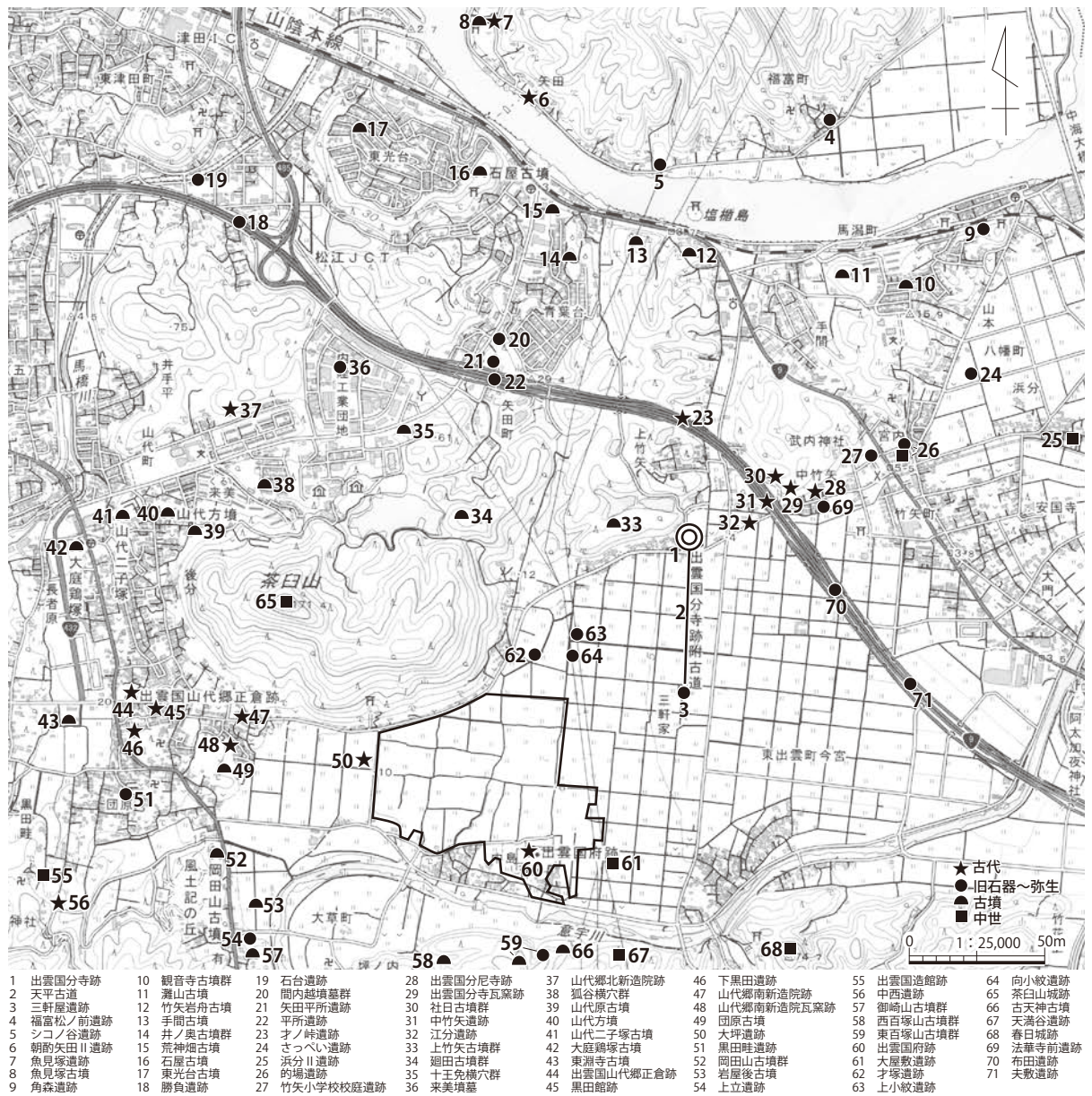


図5 意宇平野周辺の主な遺跡

【古代】 古代出雲国は、『風土記』により詳しく知ることができる。『風土記』は和銅6(713)年のいわゆる「風土記」選進の命により作成された地誌である。『出雲国風土記』は出雲国造であったいづものおみひろしま出雲臣広島によって天平5(733)年に勘造された。意宇平野は出雲国意宇郡の山代郷、大草郷に属する。

奈良時代になると律令制のもと中央から国司が地方に派遣されるが、出雲国の国司としては、いんべのすくねのおびと忌部宿禰子首の存在がまずある。忌部宿禰子首は和銅元(708)年に出雲守に任命された人物である。忌部氏は神祀、祭祀に携わるヤマト王権の中央伴造氏族で、『風土記』には意宇郡に祭祀品としての玉を製作する玉作を担う「忌部神戸」の存在が記されていることから、「忌部氏」との関連性が窺える。

天平7(735)年～天平11(739)年にかけては、いしかわのあそんとしたり石川朝臣年足が出雲守として赴任する。在任中には善政が賞され多くの賜物が与えられている。また、在任中に4度の写経が行われていたことが知られており(註1)、仏教信仰に篤い人物であったことが窺い知れる。

古代出雲国と都の間には、古代官道である山陰道(正西道)が整備されていた。山陰道は意宇平野の中央を東西に通じ、また国府の北方の十字街に隠岐国へ向かう枉北道の起点があったとされる。近年、うおみづか魚見塚遺跡(7)で枉北道と思われる道路遺構が検出され、そのルートが明らかになりつつある。

意宇平野の官衙遺跡としては、出雲国府跡(60)があり、遅くとも7世紀末には成立していたとされる。山代郷正倉跡(44)では大型倉庫群が見つかった。また下黒田遺跡(46)や黒田館跡(45)からは大型掘立柱建物跡や大溝が検出されている。『風土記』には国府周辺に意宇郡家や黒田驛、軍団が置かれていたと記されているが、これらの位置については明確になっていない。

『風土記』の寺院に関する記載には、きょうこうじ教皇寺(安来市)と、10か所の新造院がある。山代郷には2つの新造院があり、山代郷北新造院跡(くるみ)(来美廢寺跡)(37)と山代郷南新造院跡(しわじ)(四王寺跡)(47)に比定される。山代郷北新造院跡(来美廢寺跡)はへきのきみめづら日置君目烈が建立したとあり、発掘調査から7世紀末に建立が始まり9世紀初頭には造営が完了したとされる。この後、11～12世紀に廢絶したと考えられている。山代郷南新造院跡(四王寺跡)はいしぐん飯石郡の少領出雲臣弟山(いづものおみおとやま)が建立した新造院である。創建は720年代とされる。出雲臣弟山は後の天平18(746)年に出雲国造となる人物である。発掘調査では、主要建物の基壇や門跡が検出されており近年その寺域が明らかになりつつある。また字名の「師王寺」から、貞観9(867)年の官符を受けて四天王像を安置した寺とも推測されている。付近にはここに瓦を供給した山代郷南新造院瓦窯跡(小無田Ⅱ遺跡)(48)があり、登窯3基が検出されている。

『風土記』勘造から8年後の天平13(741)年に、聖武天皇による「国分寺建立の詔」が発令される。これを契機に出雲国でも出雲国分寺(1)と出雲国分尼寺(28)の建立が開始された。国分二寺の建設は、事業規模の大きさから迅速に進まず、度々の催促が都からあったことが文献に記されている。先述の石川朝臣年足は天平13(741)年に国分寺地検定のために全国へ派遣されて国分寺造営を督励する役を果たしている。出雲守の任を終えてから僅か2年後の出来事であり、石川朝臣年足が出雲守在任中に、出雲国分寺の建立を始めたとする意見もある。『続日本紀』には天平勝宝8(756)年に聖武天皇が崩じ、出雲国を含む26国(かんじょうぼん)に灌頂幡等を授け一周忌に用いさせてことが記されていることから、760年頃までには出雲国分寺の堂塔は整っていたとされる(大橋2016)。

出雲国分尼寺跡(28)は竹矢町字法華寺、法華寺前、寺屋敷に位置する。国分寺の東にあり国分寺

の伽藍中軸線と国分尼寺の推定伽藍中軸線の距離は418.1mで、約4町の距離をおく。尼寺の立地は南が低い緩やかな傾斜地であり、部分的な発掘調査によって瓦や墨書土器など多数の遺物が出土している。礎石建物の基礎地業の一部が確認されているが、伽藍配置などの詳細については明らかでない。国分寺と国分尼寺に挟まれた丘陵斜面地に出雲国分寺瓦窯跡(29)がある。登窯2基が確認されており、出雲国分寺跡の創建期の瓦を焼成していた瓦窯とされている。また、この瓦窯跡から北西約30mの地点に所在する中竹矢遺跡(31)からは瓦窯跡1基が検出されている。この瓦窯跡は平窯であり、先述の出雲国分寺瓦窯跡とは窯構造に違いがみられるが、共に国分二寺だけではなく出雲国府跡(60)、山代郷南新造院跡(47)、山代郷北新造院跡(37)へも瓦を供給していることから、国衙系瓦屋として注目されている。さらに、中竹矢遺跡では国分寺創建期と、山代郷南新造院跡2類の軒丸瓦が出土している。また、出雲国分寺跡の北約400mの丘陵にあるオノ峠遺跡(23)では窯体の破片が出土しており、周辺には未確認の瓦窯跡が存在する可能性も考えられる。このオノ峠遺跡(23)では丘陵頂部で比較的規模の大きな掘立柱建物1棟が検出され、南斜面からは17か所の加工段が検出され、27棟以上の掘立柱建物跡が存在したと報告されている。瓦や木簡なども出土していることから、国分寺に関連する集落跡との指摘がされている。

古代の墳墓としては、社日古墳(30)で八稜鏡を蓋にした火葬墓の骨壺が見つかった。

【中世・近世】 中世に入っても意宇平野は中世府中として出雲国の政治・文化の中心であった。出雲国府跡(60)では11世紀後半から12世紀前半の貿易陶磁器がまとめて出土しており、何らかの

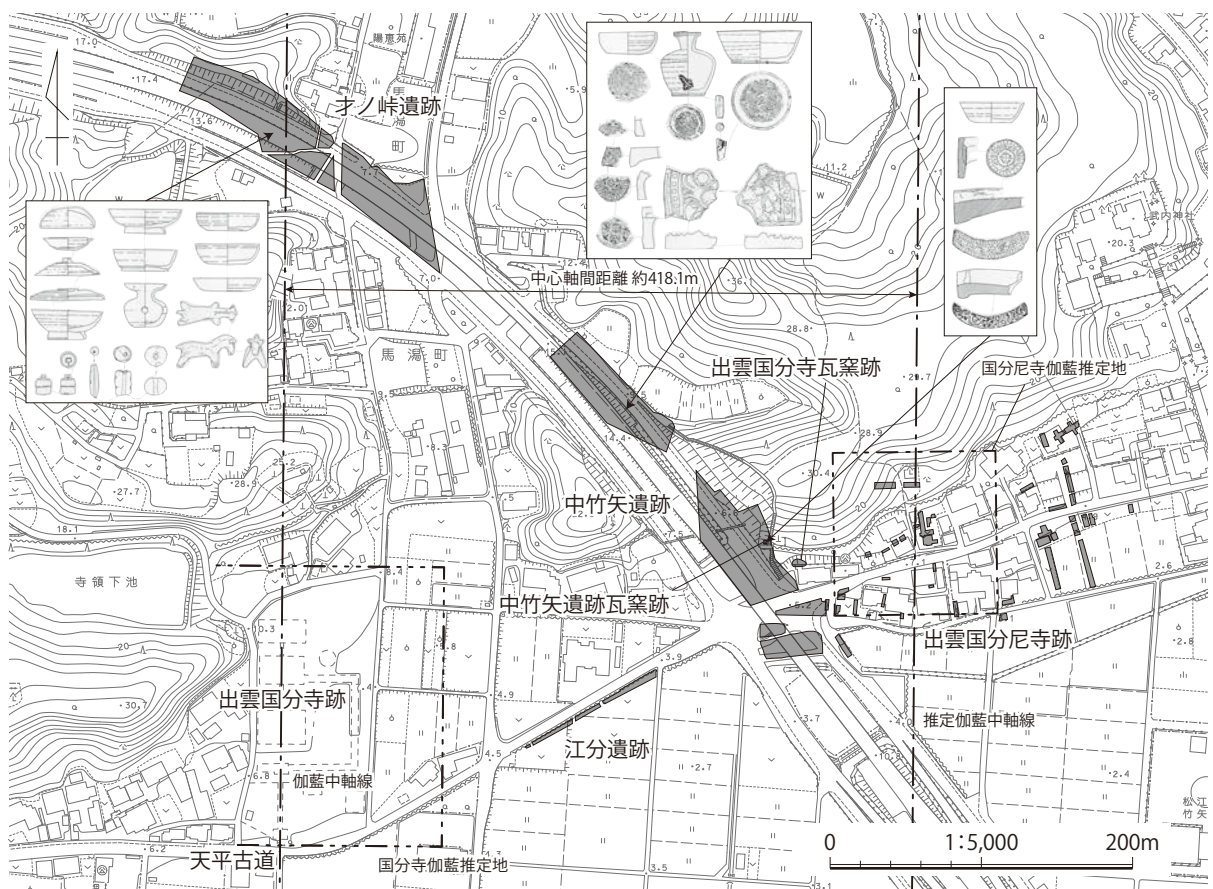


図6 出雲国分寺と出雲国分尼寺の位置関係



公的施設が存在していた可能性が高いとされる。発掘調査では13世紀頃の洪水層が検出されていることから、これを契機として急激に衰退したとみられる。

中世の遺跡は中海沿岸の八幡町周辺や、出雲国府跡周辺、茶臼山西側の段丘（丘陵地Ⅱ）で確認される。八幡町には12世紀初めに平浜別宮（平浜八幡宮）が設置され、当社は国分寺や国分尼寺が衰退した後に、代わって仏事を行うなど国衙の宗教的機能も果たしていたとされる。さらに平浜八幡宮や関連社寺は地域開発の拠点としての役割も担い八幡町付近を中心に八幡荘が設置され、中海沿岸の低湿地や意宇川旧河道部の低湿地帯の開発が進められたと考えられる（島根県立八雲立つ風土記の丘2015）。

また、竹矢町に所在する安国寺（円通寺）は康永4（1345）年に足利尊氏の命により定められた臨濟宗寺院である。境内には康永2（1343）年銘の宝篋印塔があり、室町時代中頃以降の形態とされている。その他、墳墓としては意宇平野の北側丘陵上で確認された的場遺跡（26）と中竹矢遺跡（31）がある。的場遺跡からは中国製褐釉四耳壺を骨蔵器とした火葬骨が検出されており、中竹矢遺跡の丘陵南側平坦面からは長方形土坑状の火葬墓が見つかった。

浜分Ⅱ遺跡（25）は八幡町の湿地にあり中世陶磁器や京都系土師器がまとまって出土している。意宇平野中央の水田中に位置する大屋敷遺跡（61）からは12～13世紀を主体とする遺物と掘立柱建物跡が検出されている。また天満谷遺跡（67）では12～13世紀の遺物を伴う掘立柱建物が検出された。多くの国産・中国産陶磁器が出土しており、意宇平野では国府跡に次ぐ出土量を誇る。大庭町に位置する黒田館跡（45）や出雲国造館跡（55）では掘立柱建物跡や中国産陶磁器がまとまって出土している。

中世府中は南北朝期まで存続したと考えられ、江戸時代に入ると松江城下町が堀尾氏により整備される。政治の中心は松江城周辺に移り、意宇平野は水田地帯の景観が近代まで保たれたと考えられる。安国寺には京極高次供養塔（宝篋印塔）が安置されている。京極氏は堀尾氏に次ぐ松江藩主であり、供養塔は息子の京極忠高によって造立された。越前の笏谷石を加工して造られたものである。

#### 【註釈】

1 第1に天平9年12月8日奥書「灌頂随願往生経」がある。これは次男の逝去を受けて、自ら発願の薬師如来・伏侍（脇侍）観音菩薩・日光菩薩・月光菩薩などの仏像一鋪とともに書写したとされる。第2に天平10年6月29日奥書「観弥勒菩薩上生兜率天経」、第3に、聖武天皇の勅により書写されたとする天平11年3月15日奥書「大般若経」、第4に天平11年7月10日奥書「私願書写大般若経」がある（佐藤2015）。

#### 【参考文献】

池淵俊一 2015 「意宇平野の開発史—5世紀代の評価を中心に—」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター

池淵俊一 2017 「意宇平野における集落の変遷について」『意宇平野の集落遺跡』島根県教育委員会

大橋泰夫 2016 「出雲国分寺の造営」『出雲国誕生』吉川弘文館 pp.188 - 203

佐藤信 2015 「第2節 出雲国造と律令国家・王権」『松江市史 通史編1 自然環境・原始・古代』松江市 pp.534 - 550

島根県教育委員会 2017 『意宇平野の集落遺跡』

島根県立八雲立つ風土記の丘 2015 『平成27年度企画展 古代出雲文化発祥の地 意宇の開発史』

島根県立八雲立つ風土記の丘 2018 『平成30年度企画展 知られざる中世都市 出雲府中』

松江市史編集委員会編 2012 『松江市史 資料編2 考古資料』松江市

松江市史編集委員会編 2016 『松江市史 通史編2 中世』松江市

## 第3章 発掘調査

### 第1節 調査の方法

#### 1. 第19次調査 (T46)

調査区はグリッド KB9I - 28 区、KB9I - 29 区に相当する範囲に設定した。調査規模は東西 5.7 m × 南北 2.9 m で調査面積は 16.53m<sup>2</sup>である。平爪を装着した重機により表土の除去を行った。包含層以下地山までは手掘りでの掘削作業に移行した。国分寺の整地層検出後は平面及び土層の精査を実施し、掘削後は平面図、土層図の記録を作成した。

#### 2. 第20次調査 (T47)

第20次調査(T47)では、東西 3 m × 南北 3 m の調査区を設定し、重機掘削にて表土の除去を行った。調査面積は 9m<sup>2</sup>。包含層上層に到達した時点で手掘りでの掘削作業に移行し、グリッド毎に遺物の取り上げを行った後包含層下層の調査を実施した。下層では瓦が大量に出土しており、瓦の一部については記録を作成した後取り上げを行った。下層を完掘後地山の精査を行い廃棄土坑 SK4701 を検出した。平面図、土層図の記録を作成した。

#### 3. 第21次調査 (T48 ~ T50)

T48 は下水道管、玄関ポーチ敷設予定箇所にて実施した調査である。調査区は東西 1.2m × 南北 8m で面積は 9.8m<sup>2</sup>。調査は平爪を装着した重機より表土の除去を行い、後は手作業で作業を実施した。遺構を完掘後、平面・土層の記録を作成した。

T49 は個人住宅の改築に伴い、公共柵から改築建物間の下水道配管工事に伴い実施した立会調査である。調査区は T48 に直交し東西 10.4m、南北 1.8m で調査面積は 9.26m<sup>2</sup>。工事による掘削深度までを調査範囲としていたため未完掘。

T50 は T48 の南隣に位置する。側溝敷設工事に伴い実施した立会調査である。調査地は側溝部で東西 0.8m、南北 8.0m。T49 と同じく工事による掘削深度までを調査範囲としたため未完掘。

T49、T50 はいずれも包含層の遺物を取り上げ、平面図、土層図の測量、写真撮影を行った。

#### 4. 第22次調査 (T51 ~ T54)

T51 ~ 53 はカーポート支柱設置工事に伴う試掘調査である。それぞれ東西 0.5m × 南北 0.5m の正方形の調査区で各調査面積は 0.25m<sup>2</sup>。調査範囲が狭小であったため全て手作業で調査を行った。掘削深度については、工事により掘削される現況地表面下 0.8 m までの深度の調査を実施した。このため T53 は地山まで調査を行ったが、T51、T52 は地山未検出である。

T54 は T47 で検出した地山の落ち込みに連続する遺構の有無を明らかにするために実施した調査である。調査区は東西 2.8m × 南北 0.8m で面積は 2.24m<sup>2</sup>。

重機による表土掘削の後、包含層を検出したところで手作業の調査に移行した。包含層が非常に水分が多く粘土質であったため、一部にサブトレンチを設け地山の検出を行った。調査の結果、T54においてもT47と同様に2時期の包含層を検出しており、下層の瓦については一部記録を取った後取り上げを行っている。写真撮影、平面・土層の測量を行い調査を終了した。

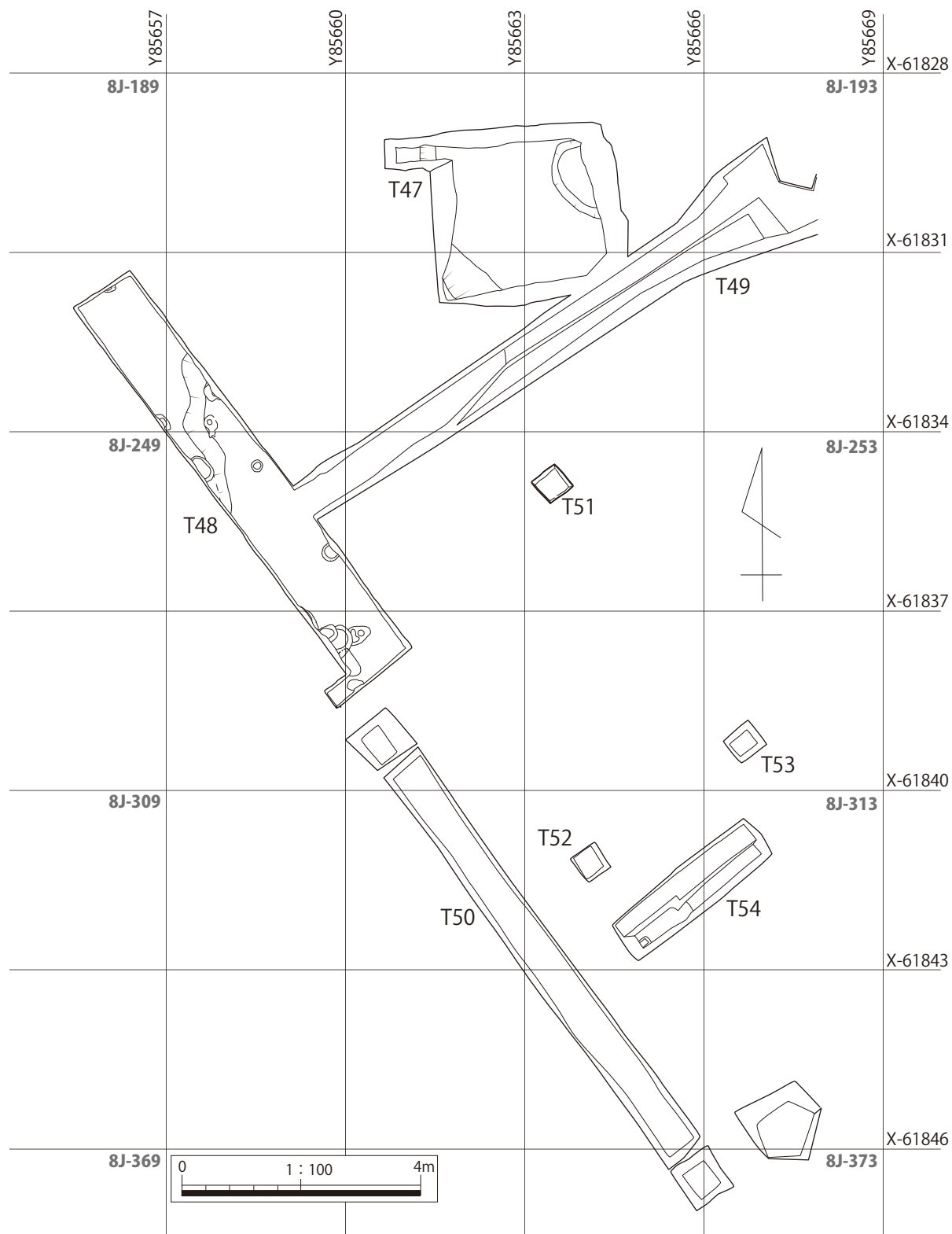


図7 T47～T54調査区グリッド図

## 第2節 伽藍地北東部の調査（第19次調査・T46）

調査区名はT46調査区である。調査地は平成14（2002）年実施の調査（T32）の北隣の水田部に位置する（図8）。T32では伽藍地外周溝と考えられる遺構（SD3220）が検出されており、『総括報告』では伽藍地の北東隅部と位置付けられる。このことからT46は伽藍地外の北東範囲の一部を調査している。以下概要について述べる。

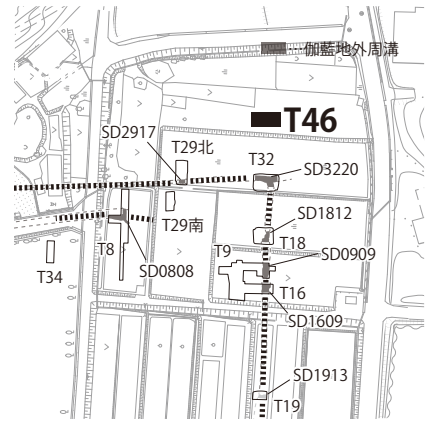


図8 T46位置図

### 1. T46

調査の概要（図9）

表土の客土を掘り下げると耕作土（②層）、床土（③層）を検出した。

更に掘り下げると灰色粘土（④層）を検出し、須恵器片、瓦が出土した。また、標高6.2mにて、にぶい黄褐色粘土層（⑤層）を検出した。⑤層は須恵器、瓦を含むものであった。瓦は総じて小片であり摩耗が著しいものであった。トレンチ西側（9I-28区）に東西のサブトレンチを設定し更に下層まで掘削を行ったところ、⑤層直下に灰色粘土層（⑥層）の堆積が確認された。⑥層は黄灰色粘土を含む斑状の層であり、整地層の可能性が考えられるが、同様の斑層はT32でも検出されている。

⑥層より深い層は無遺物層であった。標高5.88mにて炭化物を含む黒色粘土層（⑧層）を検出し、土層観察から谷部のような湿地帯に見られる土層と考えられる。さらに下層に灰色シルト層（⑨層）を検出し標高5.4mで青灰色粘土の地山（⑩層）を検出した。地山上面は水平な堆積ではなく、緩やかに湾曲した土層状況であったことから当初流路による堆

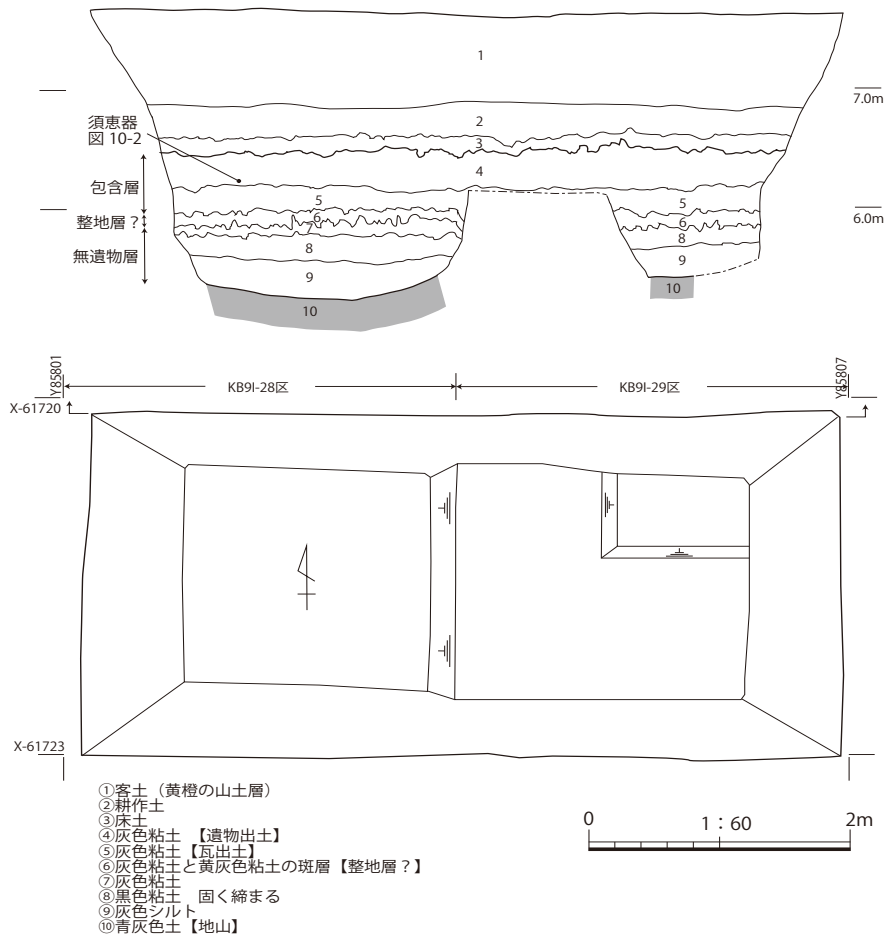


図9 T46平面・土層図

積と考えられた。9I - 29区にてサブトレンチを設定し同様の堆積の有無を確認したが、特に深いものではないことが分かった。

遺物 (図10、11)

図10 - 1, 2は須恵器で無高台の皿と思われる。2は底径8.8cmで、底部外面に回転糸切痕を残す。

④層、⑤層から瓦片6点が出土している。内訳は丸瓦2点、平瓦4点 (46頁表4参照)。3点を掲載した。

図11 - 1は丸瓦、2と3は平瓦である。いずれも焼成が悪く軟質であり、補修期に使用されたと考えられる。

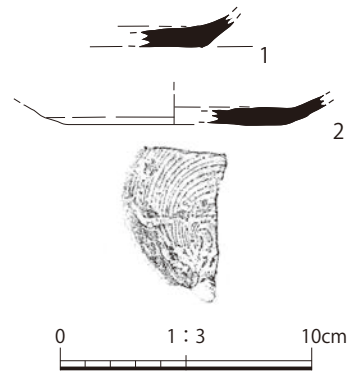


図10 T46出土遺物実測図(1)  
(1:④層 2:⑤層)

2. 小結

平成14年実施のT32調査区では橙褐色粘土層上面にて東西溝(SD3220)を検出している(『周辺報告』)。

『総括報告』では、SD3220は伽藍地を区画する溝の北東角と位置付けられており、これより東および北は伽藍地外と考えられる。

T32の調査成果と今回のT46の土層堆積状況を勘案すると、土質からT46⑥層がSD3220の掘り込み面と連続する層と推定される。

このように考えると、SD3220は国分寺の整地層に掘り込まれていることになり、「SD3220(新) - 国分寺整地層(古)」の関係になる。

改めて、これまでに検出されている国分寺の伽藍地外周溝を見直すと、北東角の伽藍地外周溝として「SD4301 - SD2917 - SD3220 - SD1812 - SD0909 - SD1609 - SD1913」があり、その内側には北辺の溝「SD199303 - SD1306 - SD0506 - SD4308 - SD0808」と東辺の溝「SD200902 - SD2014」「SD0405 - SD0103」がある。中軸線から「SD0405」までは88.61m (300小尺≒250大尺)、中軸線から「SD0909」までは112.6m (380小尺≒317大尺)である。今回は土層や遺物の詳細な検討までは行えていないが、伽藍地外周溝にも新旧が存在する可能性があり、北東角の伽藍地外周溝

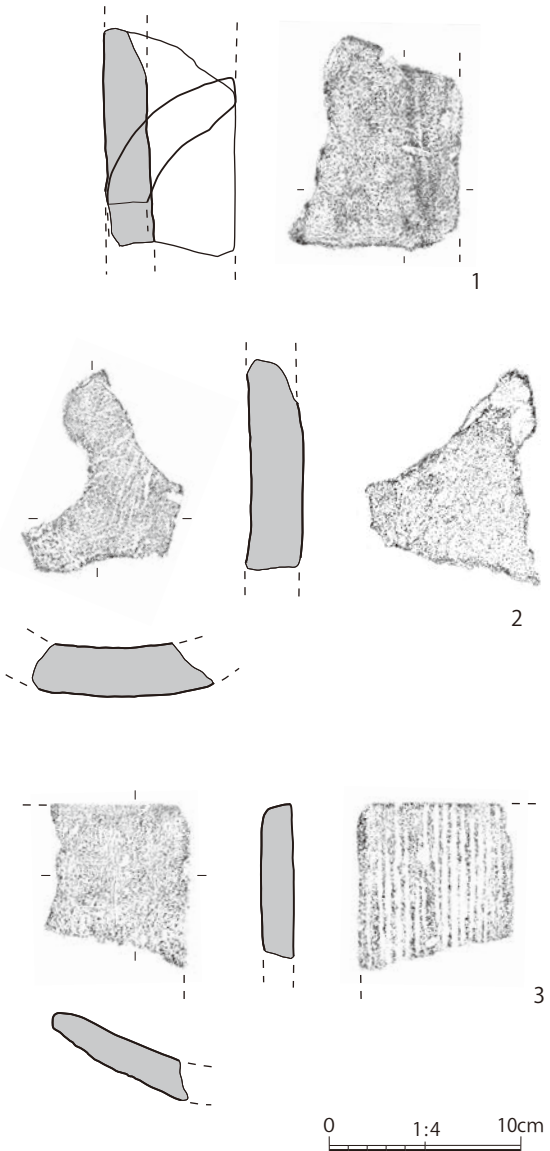


図11 T46出土遺物実測図(2)  
(1:④層 2:⑤層 3:⑥層)

「SD4301 - SD2917 - SD3220 - SD1812 - SD0909 - SD1609 - SD1913」は新しい段階の溝ではないだろうか。整地層についてはT32から22m離れている当地においても確認され、周溝の外側にも平坦面が続いている点は、伽藍地外周溝の外側についても一体的な造成が行われていたことを示唆するものかもしれない。

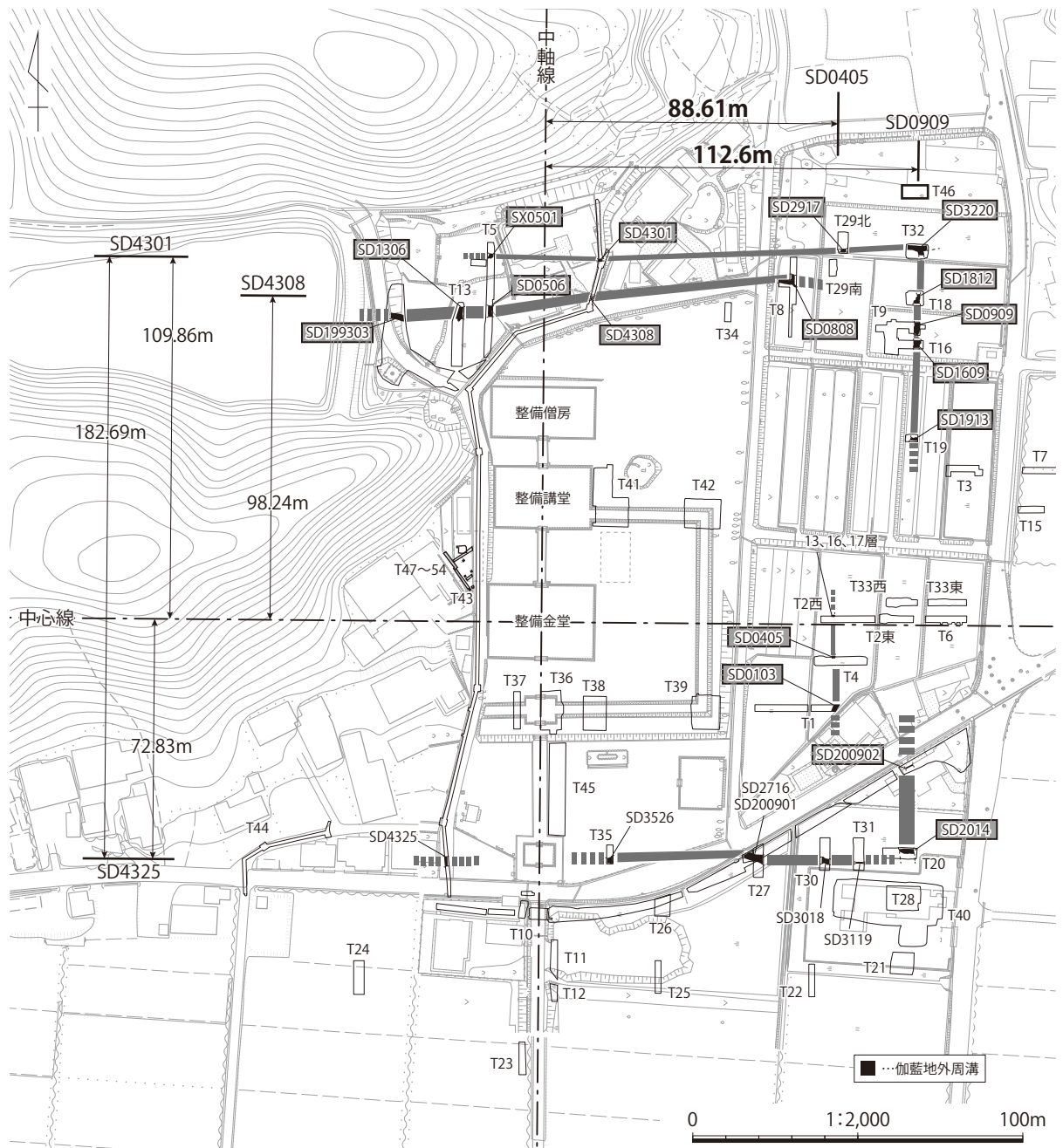


図12 出雲国分寺の伽藍地外周溝

### 第3節 講堂西側の調査（第20～22次調査・T47～T54）

平成30（2018）年～令和元（2019）年にかけて実施した講堂西側での個人住宅新築計画に伴う試掘及び本発掘調査、立会調査である（図13）。調査地は竹矢町字寺領103-2に位置し、現況は畑である。本地は第I期調査において経楼の推定地とされていた。

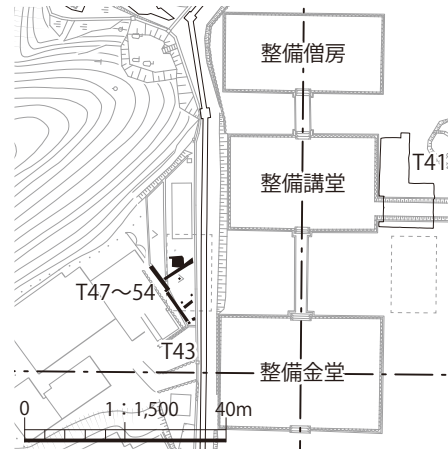


図13 T47～T54位置図

#### 1. T47（試掘調査）

##### 調査の概要（図14）

表土・攪乱土を取り除くと、調査区南西角にて黄褐色土の地山を検出し、地山が東へ段状に落ち込み包含層が堆積している様子が検出された。この段状の落ち込みは調査区北西角の拡張部でも同様にみられた。このことから調査区内と調査区外東にかけては地山の標高が低く平坦面が形成されており、調査区外西は地山の標高が高いことが分かった。

段状の落ち込み上端から東側に暗褐色土の包含層が水平に堆積していた（包含層上層）。この包含層には、軟質の瓦や土師器片が多量に含まれていた。土師器の年代は11世紀後半～12世紀後半頃。

更に掘り下げると上層直下に、多量の瓦と須恵器を含む層を続いて検出した（包含層下層）。この層は灰色の粘土であり、上層とは明らかに土質が異なるものであった。下層を除くと標高7.88mで地山を検出し、北東角にて土坑SK4701を検出した。瓦の廃棄土坑と考えられる。包含層下層出土の須恵器の年代は8世紀後半～9世紀前葉頃。

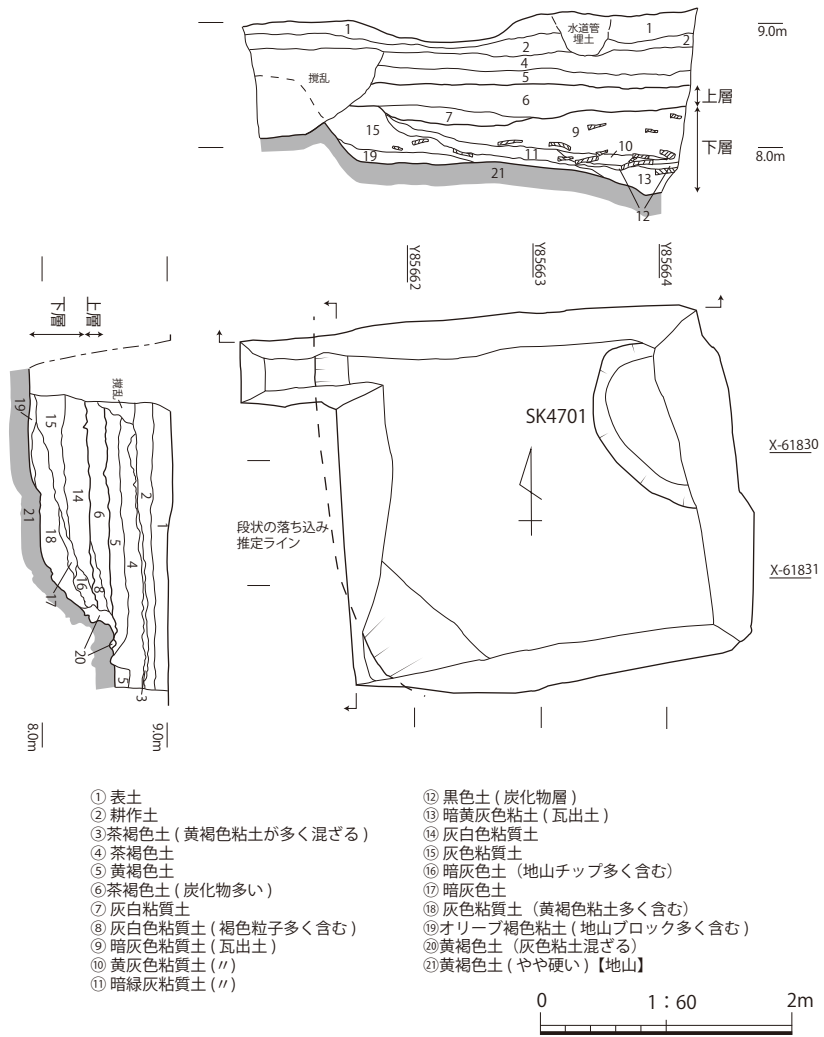


図14 T47平面・土層図

## 包含層（図14）

## 上層

標高 8.5m で検出した厚さ 15～25cmの包含層である（図14－⑥～⑧層）。調査区南西角において検出した落ち込みの上端からほぼ水平に堆積する。検出標高は 8.6m。色調は暗褐色で固く締まる土質であった。層中からコンテナ 4 箱分の遺物が出土しており、瓦と土師器片がその多くを占める。出土した瓦や土師の残存状況は不良で摩耗が著しいものが主体であった。また注目される遺物として図14－⑥層上面にて緑色透明のガラス玉が 1 点出土した（図16－1）。

## 下層

上層直下に堆積する、厚さ 45～65cmの包含層である（図14－⑨～⑱層 / 写真3）。標高 8.3m で検出した。灰色の色調で粘土質の土質であった。瓦、須恵器を多量に含み、上層で見られた磨滅した土師器は見られなかった。層中には炭化物層が薄く堆積している様子が確認できた（図14－⑳層）。調査時は炭化物層を境に上下の層で分けて遺物を取り上げたが、瓦の接合が可能なものが存在しており同時期に堆積した層と考えられる。

瓦は硬質で焼成が良好のものと、赤褐色系の色調を呈する軟質で焼成不良のものが混在する。出土量はコンテナ約 20 箱分に及ぶ。須恵器は坏、皿が出土し特徴的な遺物として灯明皿、多口瓶、須恵器高坏が出土した。



写真3 炭化物層（図14－⑳層）検出状況

## 遺構

## SK4701

包含層下層の直下にて検出した、地山に掘りこまれた土坑で、瓦の廃棄土坑である。瓦が密に堆積していたため、遺構の掘形を確認することは困難であった。最大径 1.4 m。深さ約 35cm。土坑埋土は灰色の粘土で、包含層下層と類似する土質であった。埋土に瓦が大量に含まれていたが、底面付近では出土は見られなかった。底面付近にて土師器が 1 点出土した（図17－10）。時期は不明だが、埋土が包含層下層と類似することから、8 世紀後半～9 世紀前葉頃に埋没したと考えられる。

## 遺物（図15～図28）

## 上層出土遺物

図15－1～9は土師器。総じて磨滅が著しく焼成不良である。調整不明瞭。1は柱状高台付皿。口径 8.6cm、底径 4.8cm、器高 2.9cm。底部に糸切痕が残る。国府編年 9～10 型式に相当する（11 世紀後半～12 世紀後半頃）。2～5は無高台坏の底部。2は底径 5.3cm。底面に回転糸切痕を残す。3は底径 4.2cm。4は底径 5.2cmで、2、3と比較するとやや大型である。5は外面に回転ヨコナデ調整がわずかに認められる。6～9は高台付坏。6は底径 5.4cm。7は脚部先端を欠損しており皿の底部が残存する。器厚が厚い。8、9は脚部がわずかに残存する。



図15-10は須恵器蓋。ボタン状のつまみを有し、体部は口縁にかけて僅かに屈曲する。国府編年第4～5型式（8世紀後半～9世紀前葉）に該当する。図15-11は須恵器の壺または甕胴部。外面に擬格子状のタタキ痕、内面に同心円状当て具痕が残る。

瓦埴類は150点が出土している。内訳は平瓦が破片数124点、重量14.4kg、隅数20点、丸瓦が

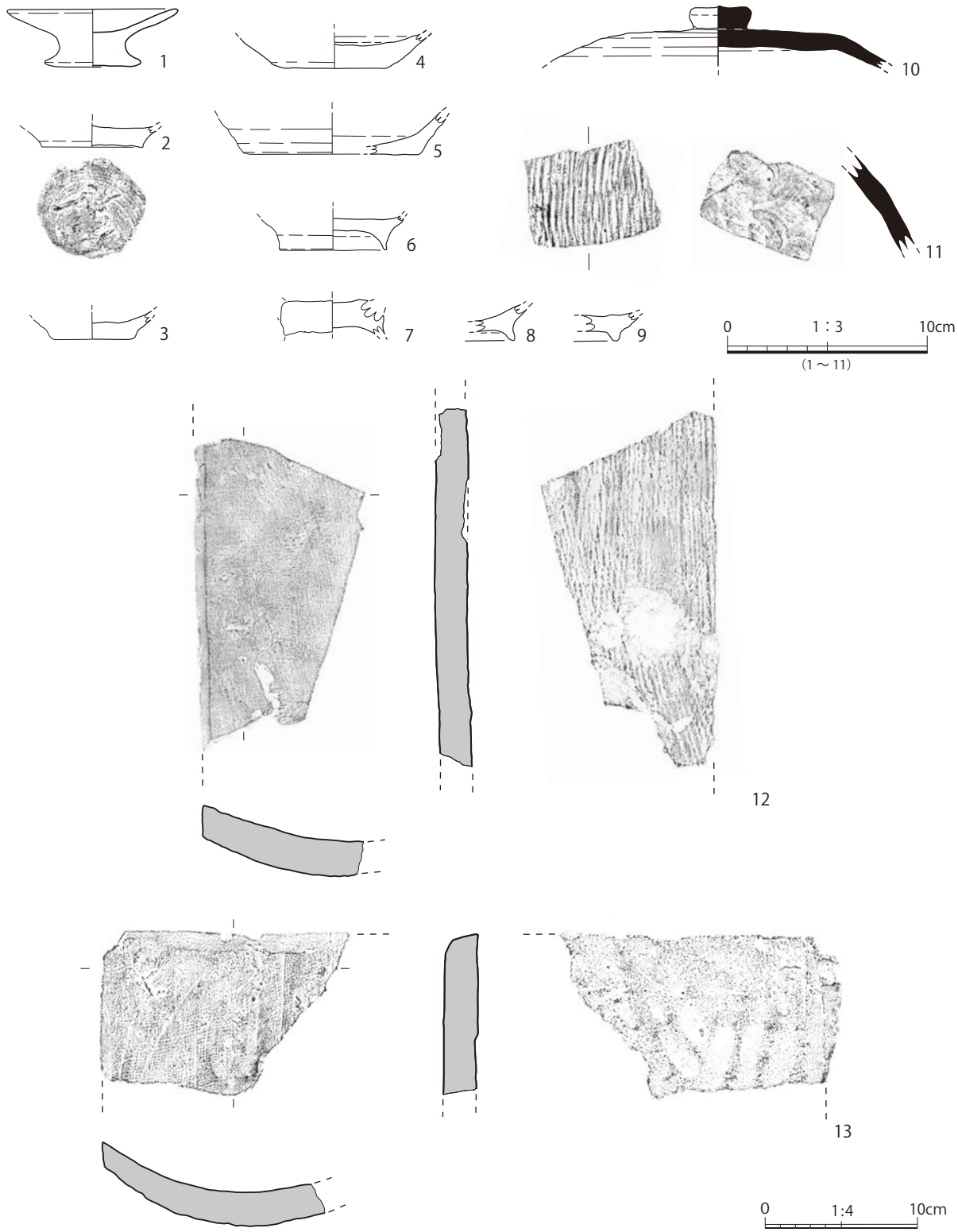


図15 T47 上層出土遺物実測図(1)

破片数 26 点、重量 4.1kg、偶数 4 点である（46 頁、表 4 参照）。軒瓦は出土していない。その多くは小片であったため、実測可能な平瓦 2 点を掲載した。

図 15 - 12 は凸面が縄叩き、凹面は糸切り痕と布目圧痕が残る。焼成は硬質で創建期に使用されたと考えられる。13 は風化のため凸面叩きが不明だが、一部に離れ砂が認められる。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残る。焼成は不良であり、補修期に使用されたと考えられる。

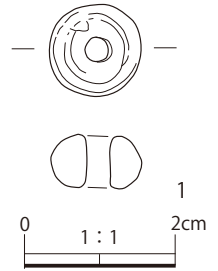


図 16 - 1 はガラス玉である。巻き付け技法で製作されている。カリ鉛ガラス。緑色透明の色調で最大径 1.25cm、厚さ 0.7cm（北宋代 10 世紀末。51 頁田村報告参照）。

図 16 T47 上層出土遺物実測図 (2)

下層出土遺物（図 17～28）

図 17 - 1 は須恵器の蓋。体部のみ残存し天井部に回転ヘラ削り調整を施す。2、3 は無高台皿。2 は口径 12.8cm。口縁端部を丸く収め煤が付着する。灯明皿。3 は口径 13.4cm、底径 7.0cm、器高 2.1cm。底面から体部にかけて回転ナデを施し口縁端部はやや外反する。底部に回転糸切り痕を残す。国府編年 4～5 型式に相当する（8 世紀後半～9 世紀前葉）。4、5 は高台付坏または皿の底部である。4 は底径 12.2cm。貼付高台を付し底面に回転糸切り痕が見られる。5 は底径 12.4cm。4 と同じく貼付高台を付す。底面に回転糸切り痕が残る。6 は坏で底部から体部にかけて残存する。底径 9.2cm で体部は直線的に伸びる。高台は貼付高台である。外面底部に回転糸切り痕が残る。国府編年 4～5 型式に相当する。7 は多口瓶の胴部。外面に上部 2 条 / 単位、下部に 3 条 / 単位の櫛状工具による施文が施される。頸部には突帯が 1 条巡る。内面にはヨコナデ調整、指頭圧痕が見られる。8 は須恵器の高坏。坏部のみ残存する。口径 26.2cm。口縁端部は上部に僅かに突出する。外面の頸部付近はヘラ削り調整が施さ

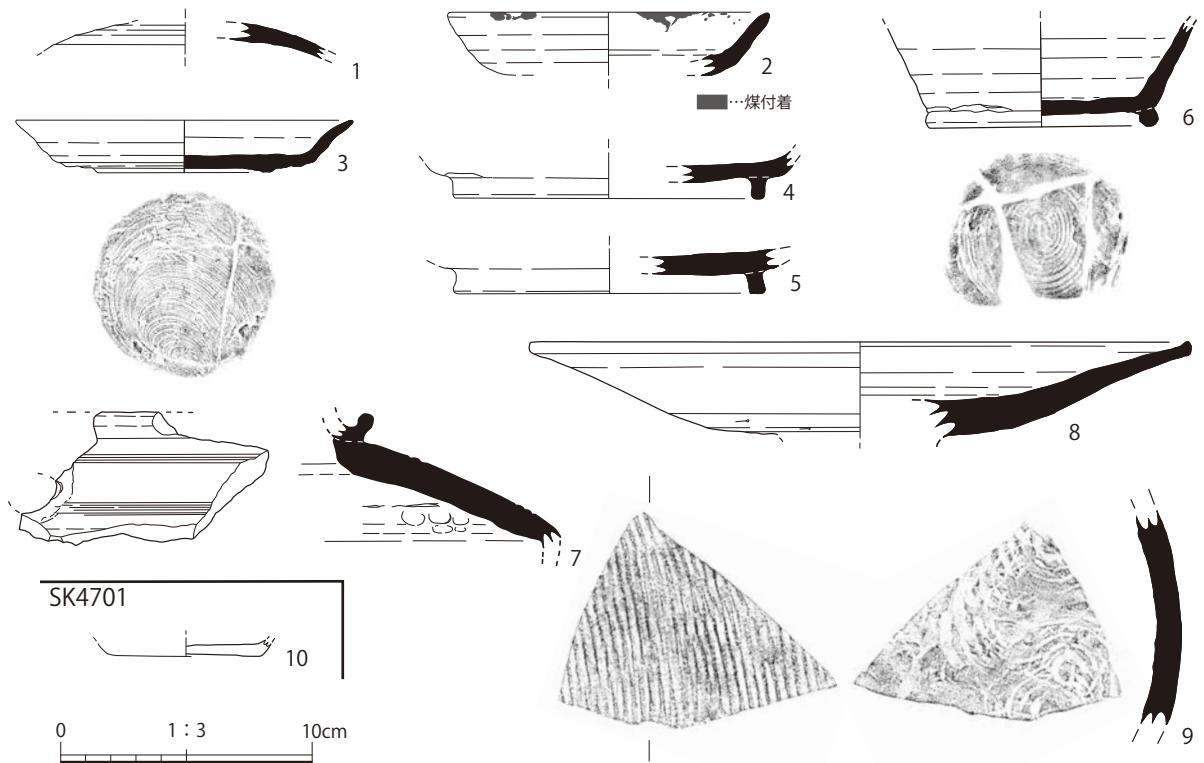


図 17 T47 下層出土遺物実測図 (1)

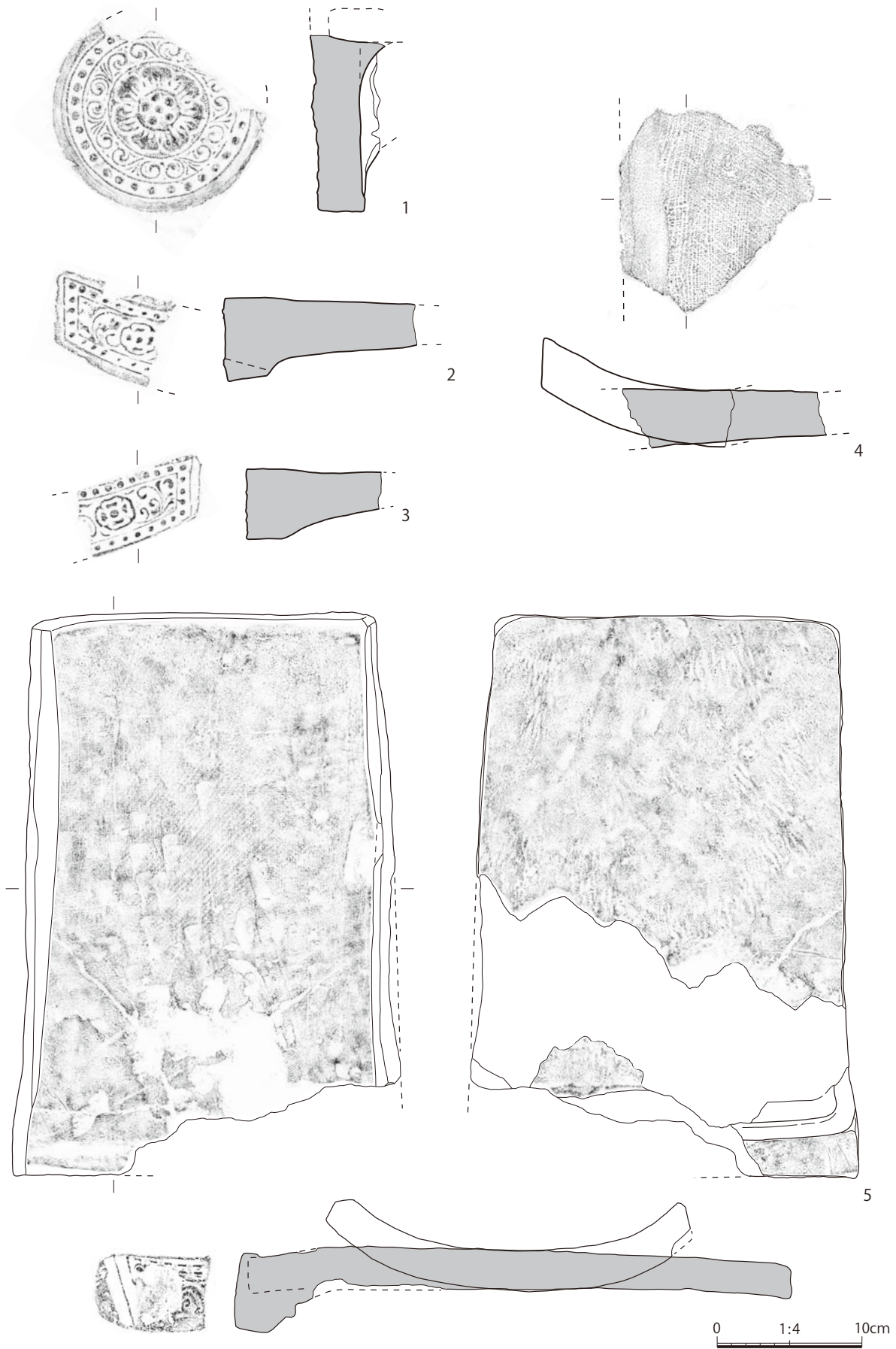


图 18 T47 下層出土遺物実測図 (2)

れ外面から内面にヨコナデ調整が施される。9は壺または甕の胴部。外面に擬格子状タタキ痕、内面に同心円状当て具痕が残る。

図17-10はSK4701より出土した土師器皿または坏の底部である。底径6.0cmで、器壁は0.5cmと薄い。橙色。時期不明。

瓦埴類は780点が出土している。内訳は平瓦が破片数563点、重量138.6kg、隅数132点、丸瓦が破片数151点、重量28.6kg、隅数46点、軒平瓦が破片数13点、重量10.5kg、軒丸瓦が破片数2点、重量1.2kg、埴1点である（46頁表4参照）。軒瓦の型式別内訳は、軒丸瓦1型式が2点、軒平瓦1型式が11点、軒平瓦2型式が2点である。軒瓦の型式分類は図39・40（47頁）を参照。

瓦の多くは小片であったため、残存状況のよい数点を掲載している。

図18-1は軒丸瓦であり、1A型式である。丸瓦部を欠くが、瓦当部は3/4以上が残存している。瓦当側面はナデとケズリによって枷型の合わせ痕が消されているが、枷型の木目は残されている。瓦当裏面の丸瓦剥離部分には長さ3cmほどの縦方向の刻み目が転写されている。瓦当裏面にはケズリとナデが施されている。これらのことから、枷型を瓦範の上に設置して瓦範に粘土を詰め、広端凹凸両面に刻み目を施した丸瓦を瓦当裏面に接着し、接合用の補強粘土を接合面の上下に貼り付けることで接合している。色調は青灰色を呈し、焼成は硬質である。図18-2～5、図19-1は軒平瓦である。図18-2は外縁が平縁で、顎部は段顎状の曲線顎であることから1D型式である。平瓦部は凹面に布目圧痕、瓦当部沿いに幅4cmほど、側縁に幅2cmほどのケズリを施している。凸面、側面にはケズリが施されている。製作手法を復元すると、布を敷いた凸型台に粘土板を載せ、瓦当部付近にはさらに粘土を数回貼り付けることで瓦当面の厚さを作り出す。この面に瓦範を押し付けて瓦当面を成形した後、平瓦部凸面に斜めもしくは縦方向のケズリを施すことで顎部を成形している。この後、平瓦部凹面や側面にケズリやナデを施している。3は右端部の破片で、上下外縁をもたず顎部は高さ1cm

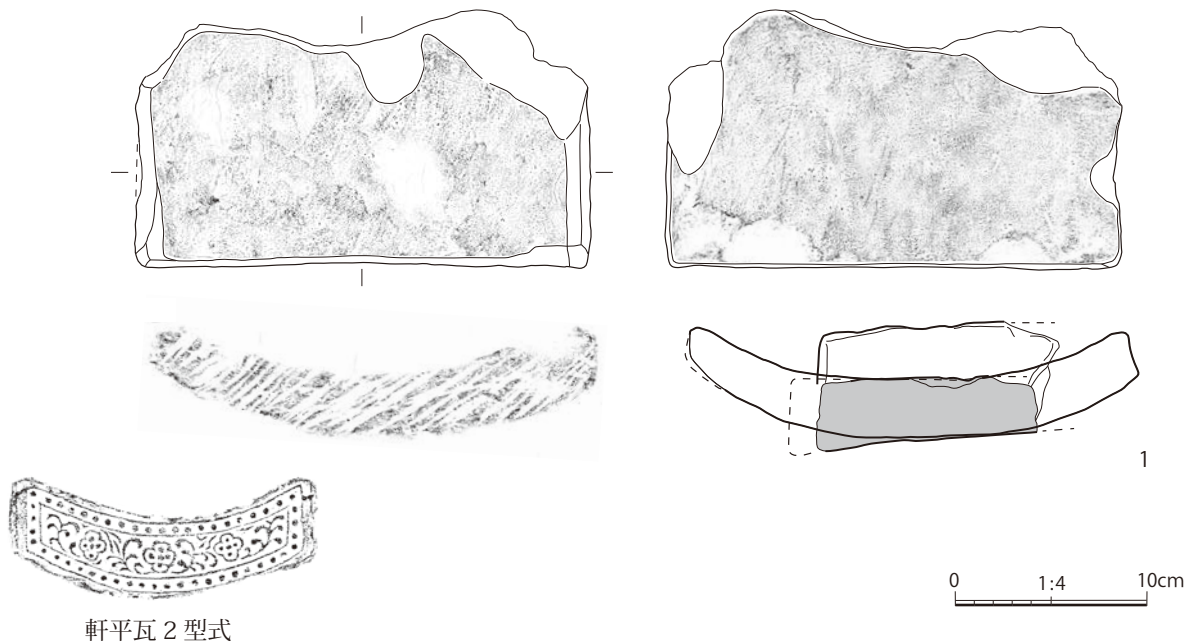


図19 T47下層出土遺物実測図(3)

ほどの浅い段顎状曲線顎であることから 1F 型式である。平瓦部凹面には布目圧痕が残り、瓦当部に沿って幅 1～3cm 程度のケズリが施されている。凸面、側面はいずれもケズリとナデが施されている。製作手法を復元すると、布を敷いた凸型台に粘土板を載せ、瓦当部付近にはさらに粘土を数回貼り付けることで瓦当面の厚さを作り出す。この面に瓦範を押し付けて瓦当面を成形した後、平瓦部凸面に斜めもしくは縦方向のケズリを施すことで顎部を成形している。この後、平瓦部凹面にケズリやナデを施している。4 は軒平瓦の平瓦部である。凸面はケズリによって叩きを消している。凹面には布目圧痕が残り、側縁幅 3cm の縦方向のケズリが施されている。青灰色を呈し焼成は硬質であることから軒平瓦 1 型式と考えられる。5 は文様にズレや欠損があるが、珠文の間隔や唐草文の形状、瓦当部が接合式であることから軒平瓦 2 型式である。平瓦部凹面には布目圧痕、糸切り痕が残り、凸型台への吸着をよくするための内叩きが施されている。凸面は縄叩きが施されている。瓦当顎部裏面には凹型台の痕跡が残る。瓦範に粘土を詰めて作られた瓦当部の裏面に溝を設け、そこに一枚作りで製作された平瓦を差し込むことで接合している。色調は白色を呈し、焼成は軟質である。

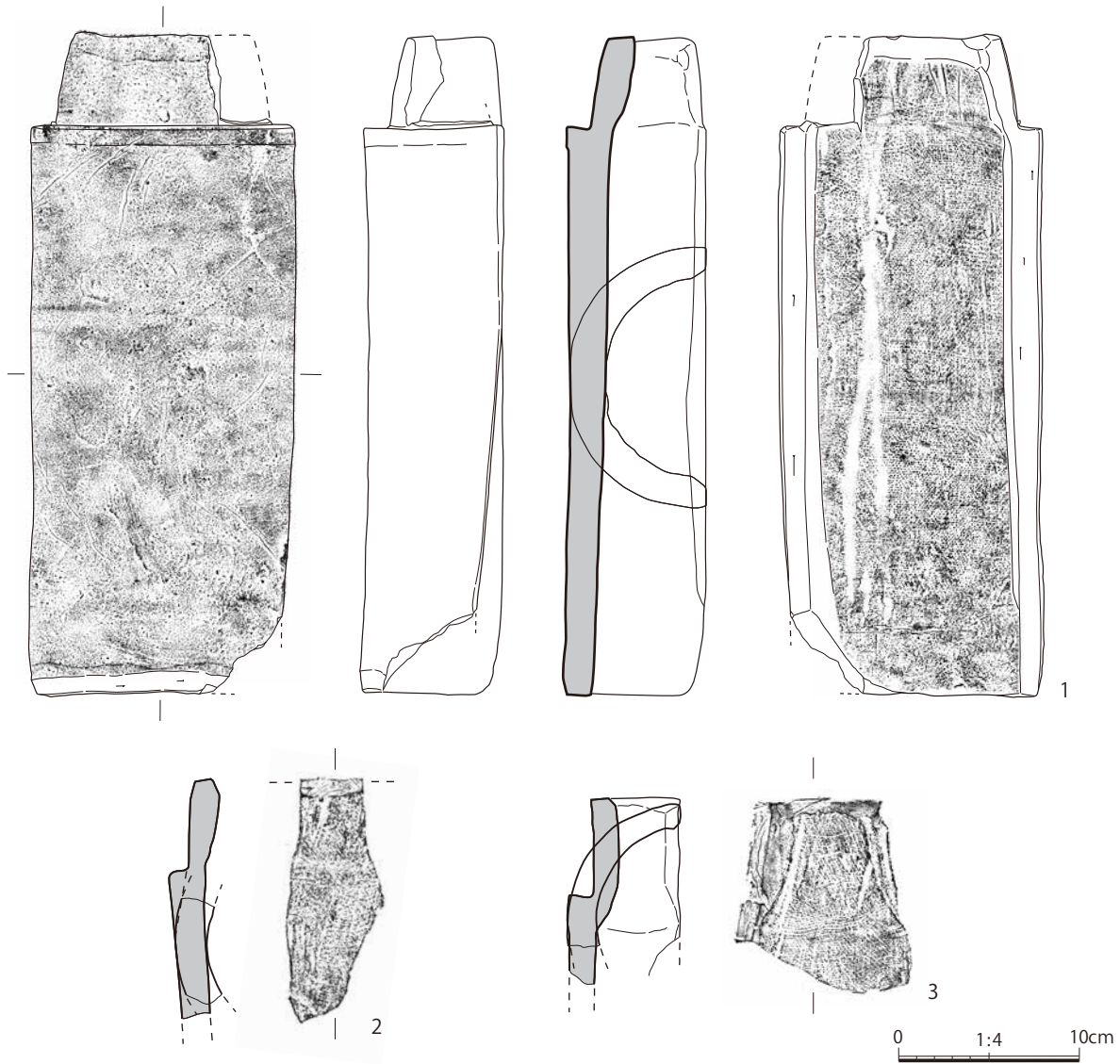


図 20 T47 下層出土遺物実測図 (4)

図19-1は瓦当部を欠くが、凹面の広端付近に瓦当部が剥離した痕跡があるため軒平瓦2型式の平瓦部と考えられる。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残り、凸面には縦方向のケズリが施されている。広端部には斜め方向の刻みを施している。

図20-1～図21-2は丸瓦である。

図20-1～3は有段式丸瓦である。1は広端部と狭端部を一部欠くが、全長37.3cm、玉縁部の長さ5.1cm、段の高さ1.3cm、重さ2.5kg。青灰色を呈し焼成は硬質である。玉縁部凹面側がやや膨らむことから1B類である。凹面には布目圧痕と糸切り痕、布袋の綴じ合わせ痕が残る。凸面には布目圧痕が確認されるがナデ調整で消されている。2は筒部、玉縁部ともに側縁を欠くが、玉縁部端縁凹面側に面取りを施す点から1C類である。3は玉縁部のみ残存しており、玉縁部の長さ5.4cm、段の高さ1.3cmである。玉縁部と筒部の側面には一連のケズリが施されて一直線になる。また、筒部から玉縁部にかけての屈曲はやや大きく、2B類である。

図21-1、2は無段式丸瓦である。1は全長33.1cm、厚さ1.6cm、重さ1.9kgで、凹面には布目圧痕と糸切り痕、内叩きが残る。凸面全体には丁寧なナデが施されており、叩きを消している。浅黄橙色を呈し焼成は軟質である。2は全長33.0cm、厚さ2.3cm、重さ2.0kgで、凹面に糸切り痕と布目圧痕が残る。凸面全体には丁寧なナデが施されており、叩きを消している。にぶい橙色を呈し焼成は軟質である。

図22～図26-2は平瓦である。全て一枚作りによって製作されている。図22～図25は硬質で灰色ないしは青灰色を呈するものであり、創建期に使用されたと考えられる。

図22～図23-1は凸面に縄叩きが施されるものである。図22-1は全長35.2cm、狭端幅24.6cm、

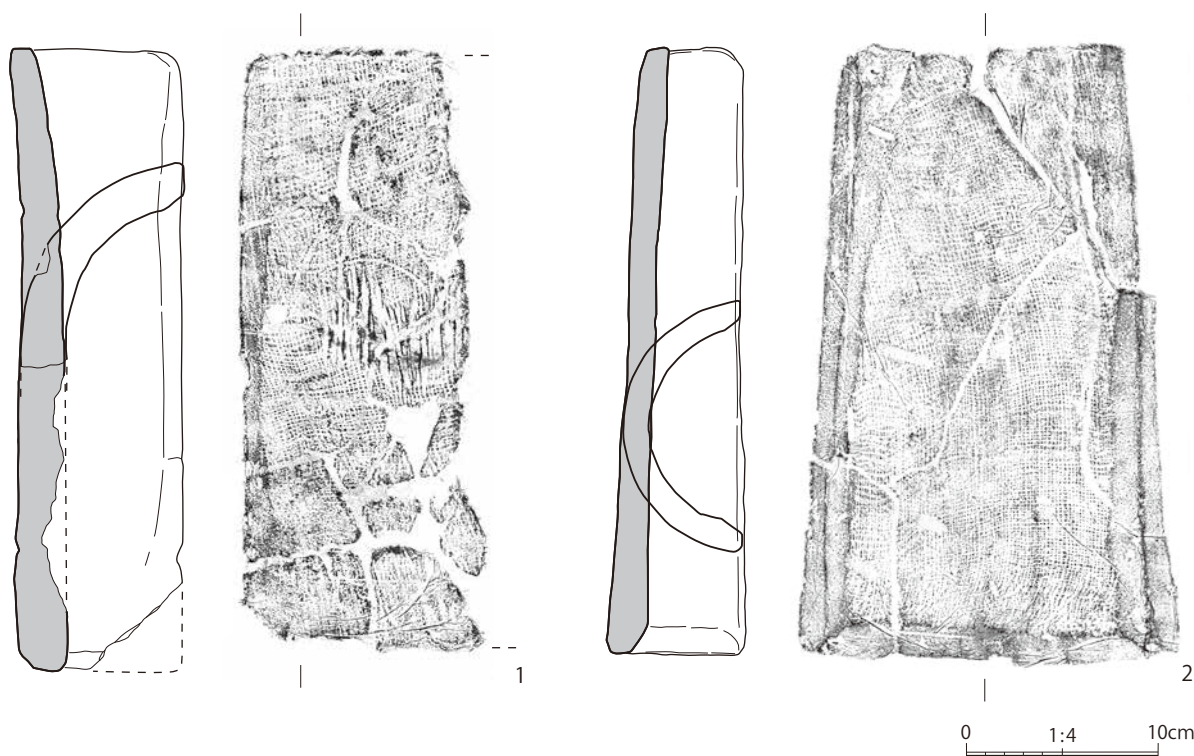


図21 T47下層出土遺物実測図(5)

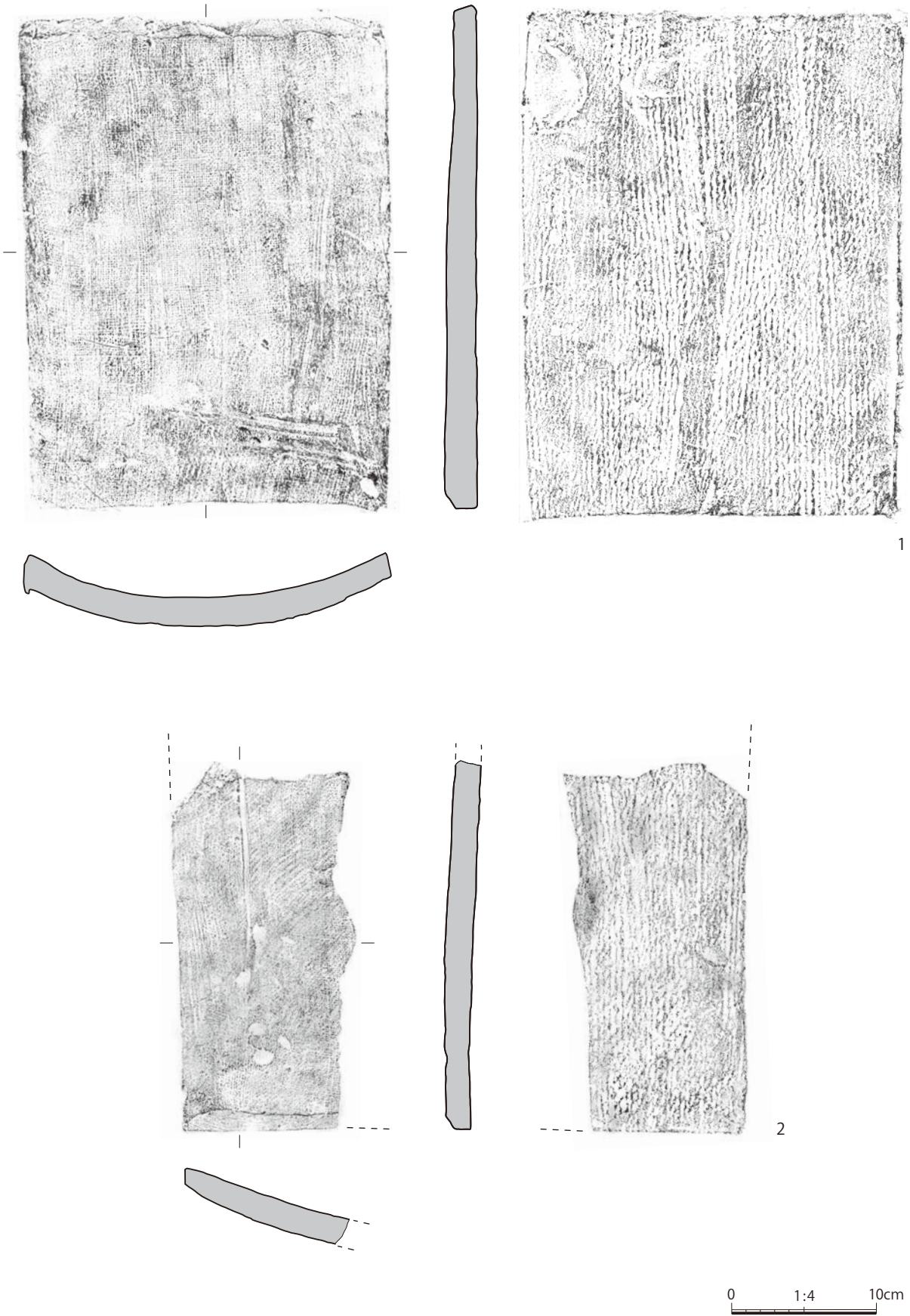


图 22 T47 下層出土遺物実測図 (6)

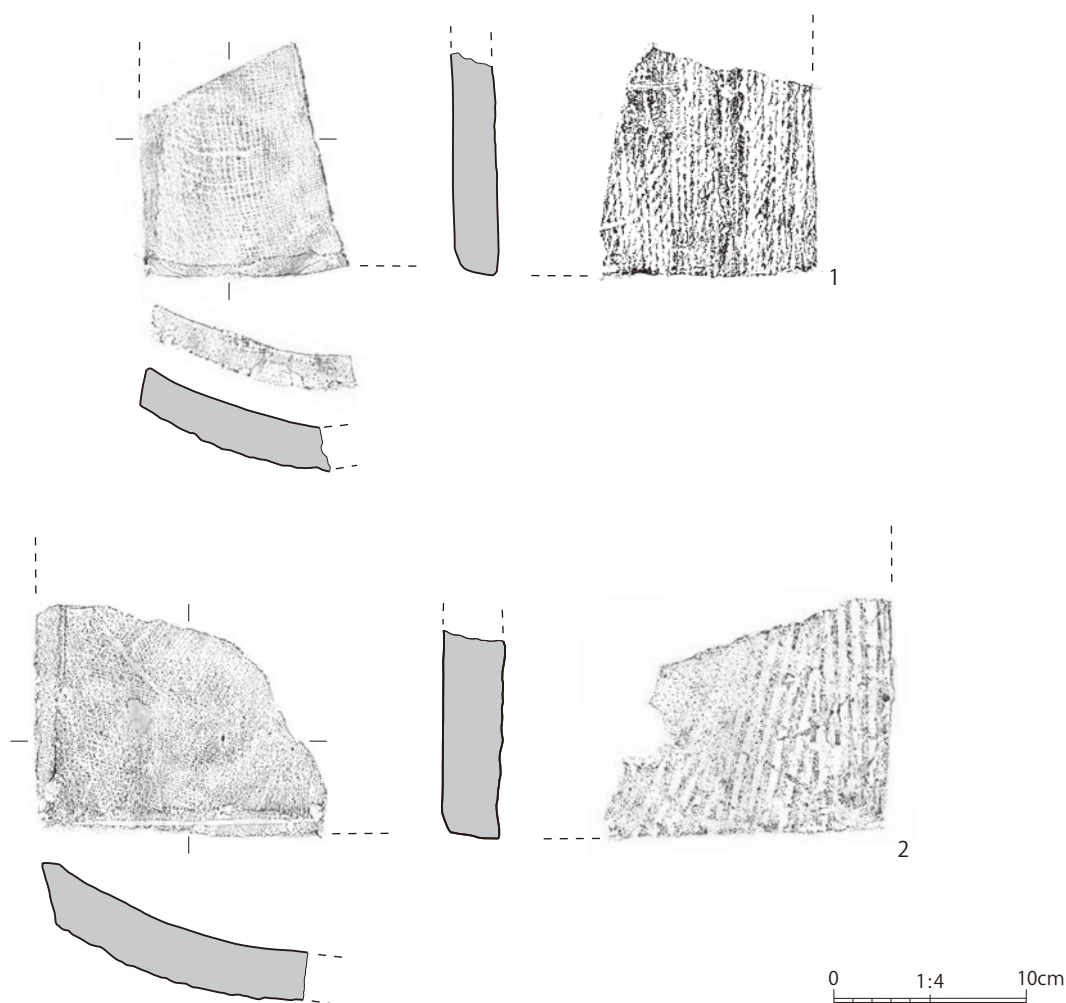


図23 T47 下層出土遺物実測図(7)

広端幅 25.8cm、厚さ 2.1cm、弧深 3.5cm、重さ 3.1kgである。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残る。また、凹面両側縁と広端狭端には面取りが施されている。側面にはケズリが施されているほか、凹型台の痕跡を留める。図22-2は狭端が1隅残存しており、厚さ 1.9cmとやや薄手である。凹面には糸切り痕、布目圧痕、叩き痕が残る。また、凹面両側縁と広端狭端には面取りが施されている。図23-1は狭端が1隅残存しており、厚さ 2.3cmである。凹面には布目圧痕が残る。また、狭端面にも布目が部分的に残存している。

図23-2・図24は凸面に格子叩きが施されるものである。図23-2は格子叩き10（『総括報告』）である。狭端が1隅残存しており、厚さ 2.6cmである。凸面に離れ砂が使用されている。凹面には糸切り痕と布目圧痕残り、凹面両側縁と広端狭端には面取りが施されている。

図24は1・2とも格子3に分類される。図24-1は全長 35.2cm、狭端幅 26.4cm、広端幅 27.0cm、厚さ 2.2cm、弧深 4.2cm、重さ 4.0kgである。凸面には離れ砂が使用されている。凹面には糸切り痕と布目圧痕残り、中央付近に縦方向のケズリが施されている。また、凹面両側縁と広端狭端には面取りが施されている。図24-2は広端と狭端がそれぞれ1隅ずつ残存しており、全長 35.5cm、厚さ 2.5cm、重さ 2.2kgである。凹面には糸切り痕と布目圧痕残り、側縁と広端狭端には面取りが施されている。



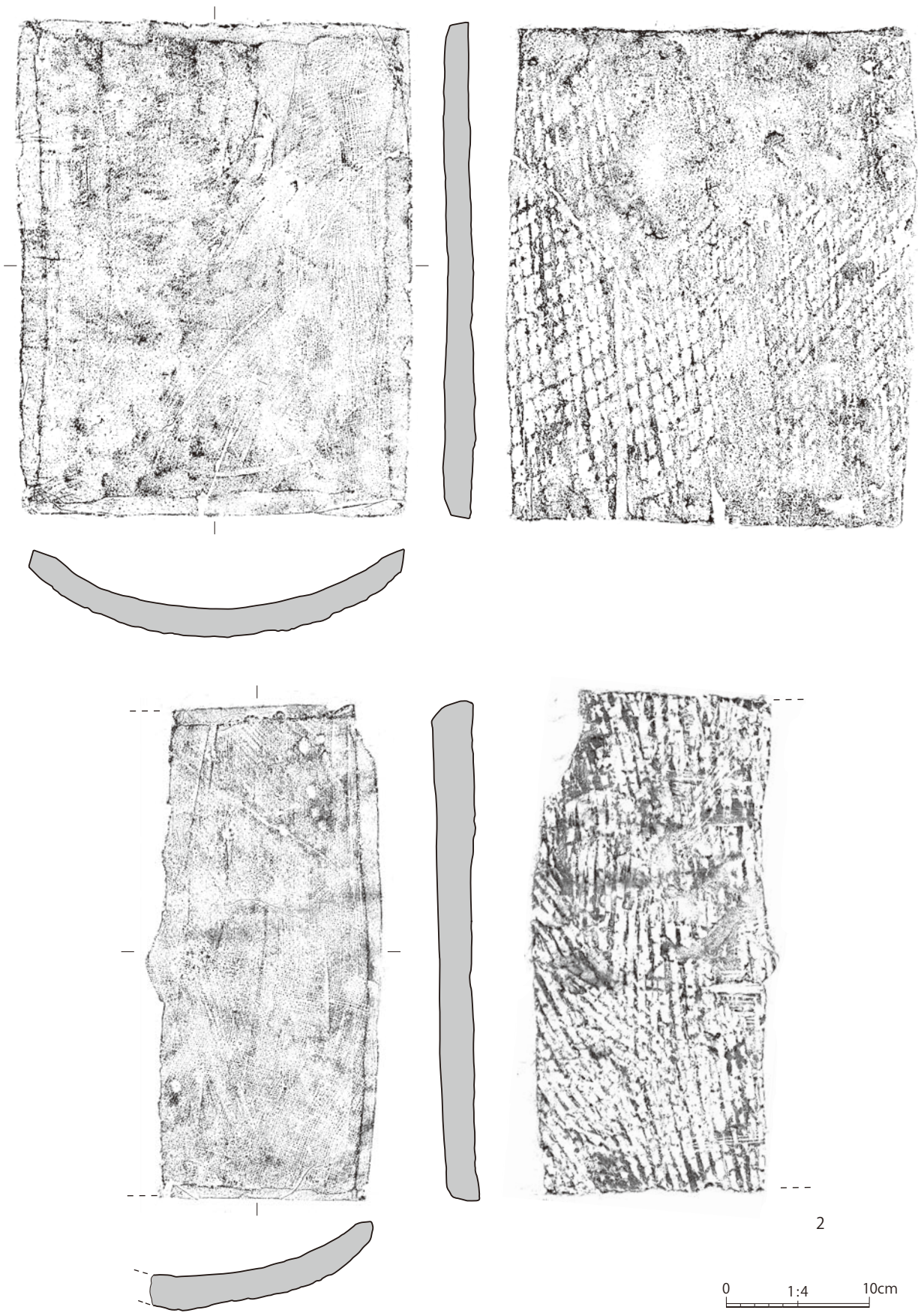


图24 T47 下層出土遺物実測図(8)

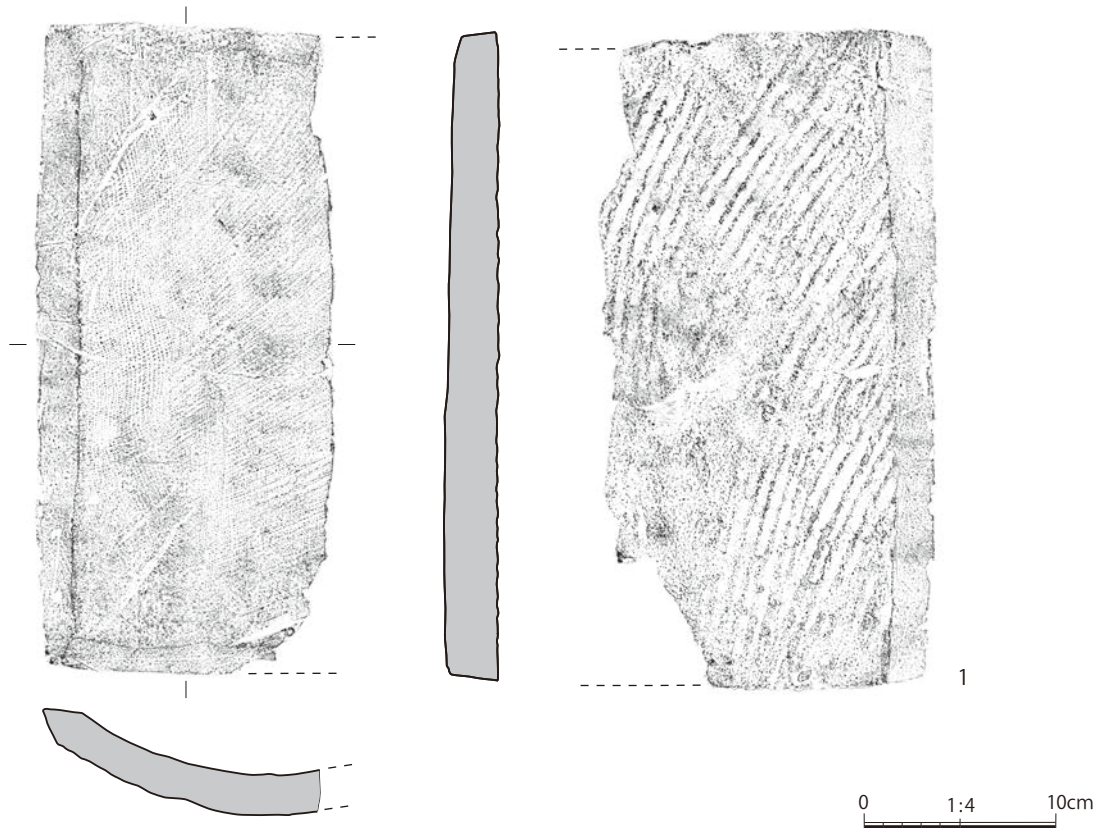


図25 T47 下層出土遺物実測図(9)

図25-1は凸面平行叩きである。広端と狭端がそれぞれ1隅ずつ残存しており、全長34.3cm、厚さ2.6cm、重さ2.9kgである。凸面には離れ砂が使用されている。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残る。また、凹面両側縁と広端狭端には面取りが施されている。

図26～図28-2は軟質で灰白色や黄橙色を呈するもので、補修期に使用されたと考えられる。

図26-1は全長35.1cm、狭端幅24.1cm、広端幅26.5cm、厚さ1.9cm、弧深4.5cm、重さ3.1kgである。凸面は縄叩きであり、凹面には糸切り痕と布目圧痕が残る。また、凹面両側縁と広端狭端には面取りが施されている。2は広端と狭端がそれぞれ1隅ずつ残存しており、全長36.7cm、厚さ2.3cm、重さ2.0kgである。凸面叩きは格子29であり、離れ砂が使用されている。凹面には布目圧痕が残る、両側縁と広端狭端には面取りが施されている。

図27-1は広端と狭端がそれぞれ1隅ずつ残存しており、全長34.5cm、厚さ2.4cm、重さ2.1kgである。凸面は格子叩き38であり、凹面には布目圧痕が残る。側面は凹凸両面をカットして断面を「V」字状に成形している。2は狭端が1隅残存しており、厚さ2.6cmである。凸面は格子叩き29であり、凹面には糸切り痕と布目圧痕が残る。

図28-1は狭端が1隅残存しており、厚さ2.5cmである。凸面は格子叩き25であり、凹面には糸切り痕と布目圧痕が残る。2は広端が1隅残存しており、厚さ2.1cmである。凸面は格子叩き1であり、凹面には布目圧痕が残る。

図28-3は文字瓦であり、上部を欠損するが凸面に「牛」とへら書きされている。

図28-4は塼である。上面と側面にはケズリが施されており、裏面は欠損している。

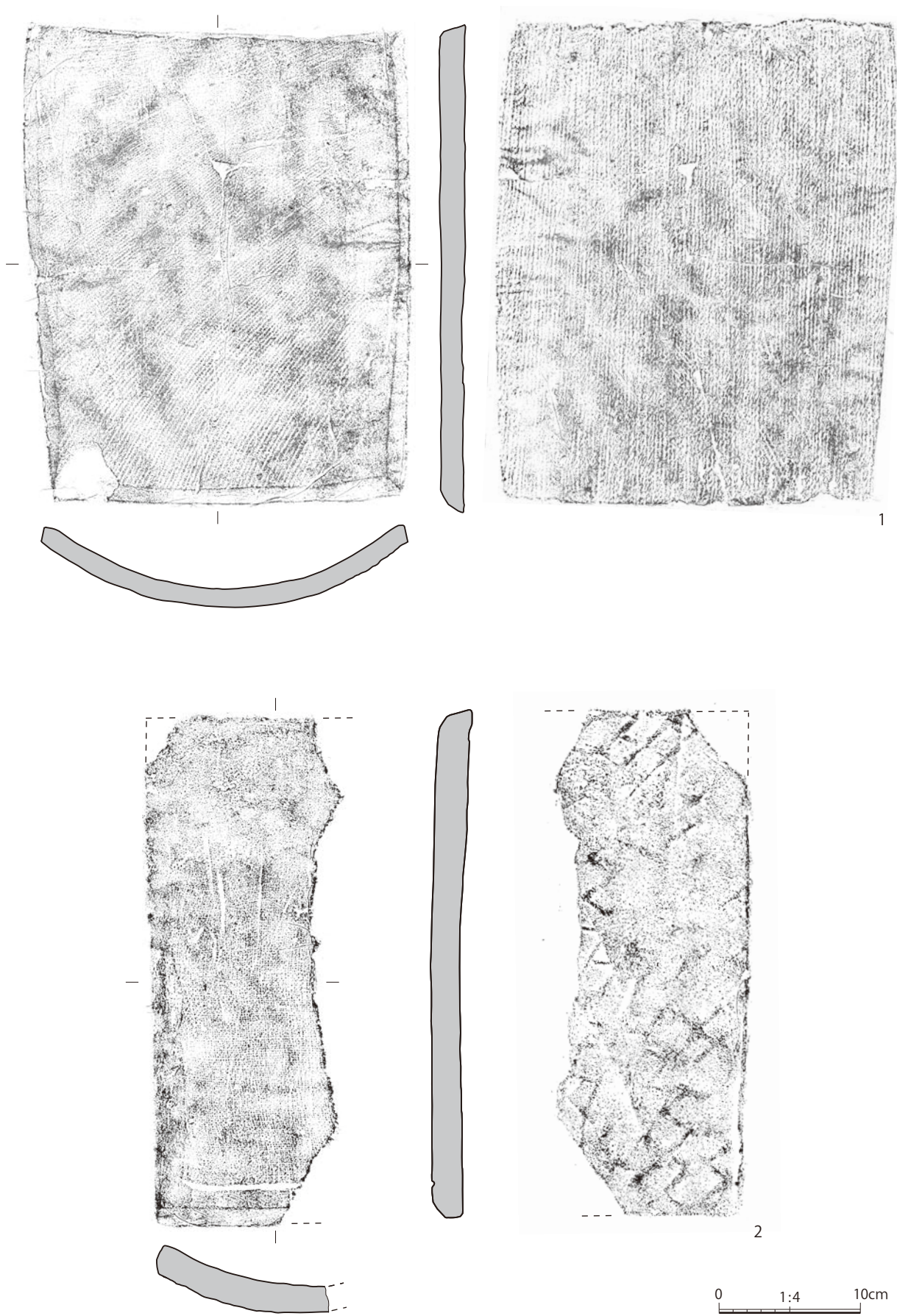


图 26 T47 下層出土遺物実測図 (10)

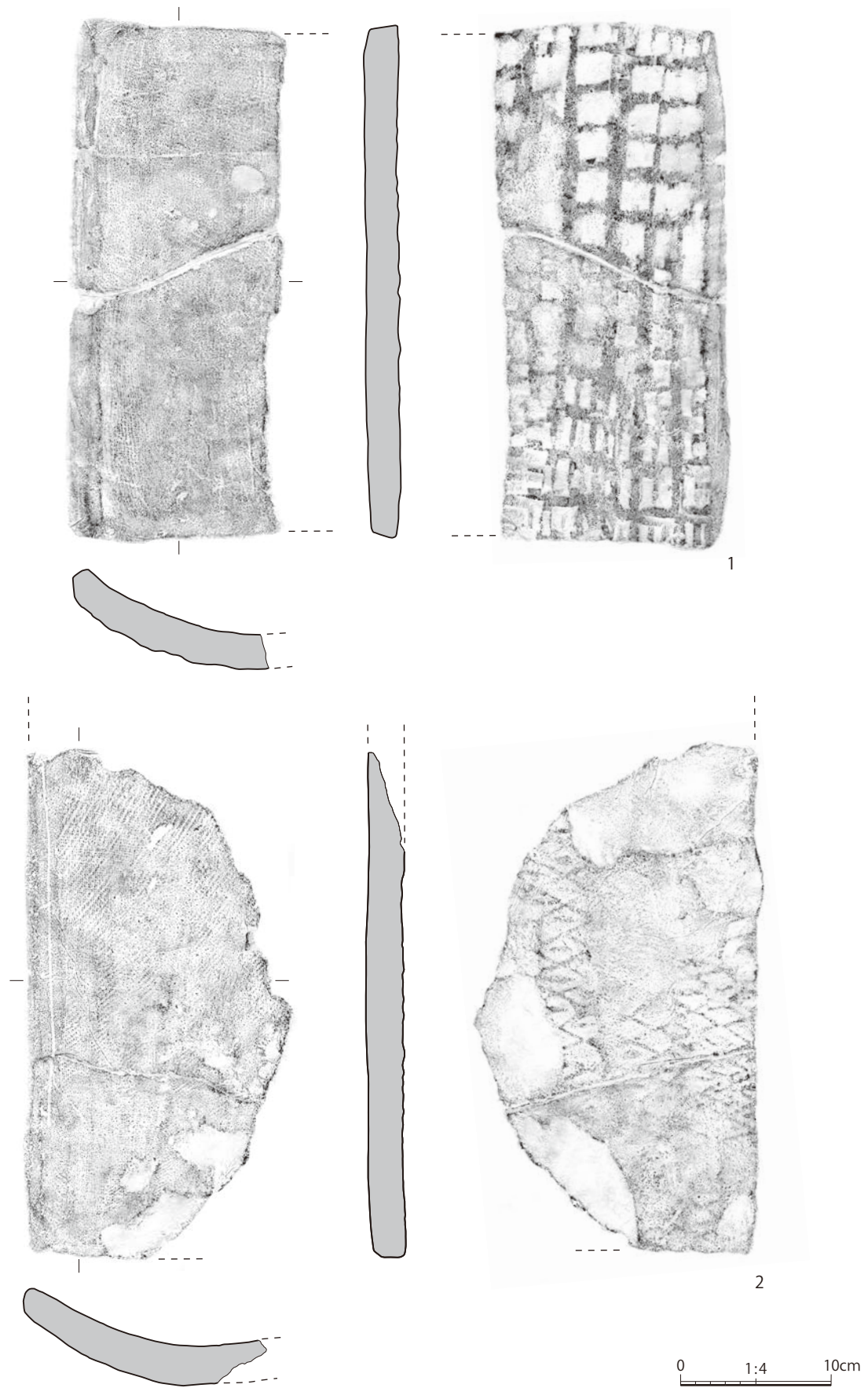


図27 T47 下層出土遺物実測図(11)

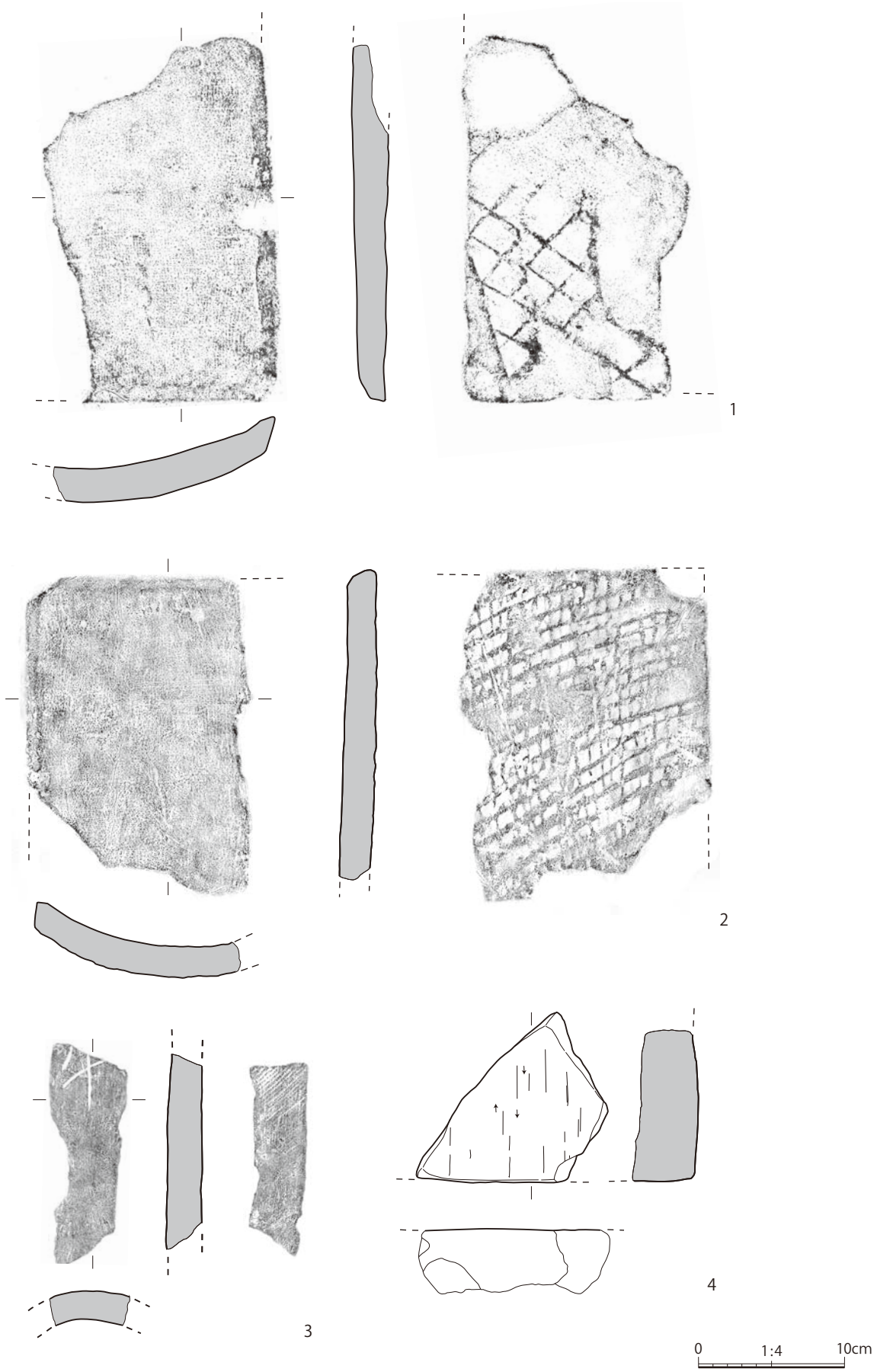


図28 T47 下層出土遺物実測図(12)

## 2. T48（本発掘調査）

### 調査の概要（図29）

表土を掘り下げると、調査区北端より標高 8.9 m の地点で地山を検出し、北端から南へ 1.8 m の地点で、東にむけて地山が段状に加工されている様子が確認された（加工段 SX4814）。深さは 13cm 程度と浅く、土層断面から 2 層の包含層が存在することが確認された（図 29 - ⑭～⑯層）。

加工段の上端から東にかけて遺物包含層の堆積が確認されたが、層中より中国製青磁碗片（14 世紀）が出土しており、中世以降の包含層と思われる（包含層上層）。また、加工段の下端付近で地山直上に黒色土の堆積を確認し、層中から須恵器、土師器片が出土した（包含層下層）。これらの包含層を取り除くと標高 8.7m で地山を検出し、上面にてピットを検出した（SP4802、SP4805、SP4806、SP4809、SP4810、SP4811、SP4813）。

### 包含層（図 29）

#### 上層

標高 8.9m で検出した（図 29 - ⑭⑯層）。SX4814 上面より調査区の南にむかって一帯に堆積していた。色調は褐色で固く締まった土質であった。堆積の厚さは 20～25cm。層中からは土師器の柱状高台付坏や軟質の瓦が出土した。また、中国産青磁碗が 1 点出土しており 14 世紀頃のものと考えられる（図 30 - 1）。

土師器皿が 2 枚、合わせ口の状態で出土した（写真 4）。上の土師器皿を取り上げると、内部に 1.0cm 台の小礫が複数内蔵されている様子が確認された（写真 5）。このような合わせ口の土師器皿は松江城下町遺跡でしばしば見られ、近世以降の地鎮に関係すると思われる。近世以降のものと思われるが、明確な掘形は判断が困難であり、掘り込まれた層位は不明である。

#### 下層

上層直下に堆積していた（図 29 - ⑯層）。黒色の色調で固く締まる土質であった。厚さ 10cm と薄い堆積であり、検出範囲は A - A' 断面周辺と限定的であった。出土遺物は小片のため図化はできないが、層中から須恵器坏または皿の破片が出土している。

### 遺構（図 29）

ピット、柱穴については規模などの詳細を表 3 にまとめて提示する。ここでは調査区中央で検出した加工段 SX4814 について概要を述べる。

加工段 SX4814 は調査区中央でほぼ南北正方位に掘削されていた。埋土は 2 層に分かれ、上層（図



写真4 合わせ口の土師器皿出土状況  
（図 30 - 2）



写真5 土師器皿の内容物検出状況  
（図 30 - 3）

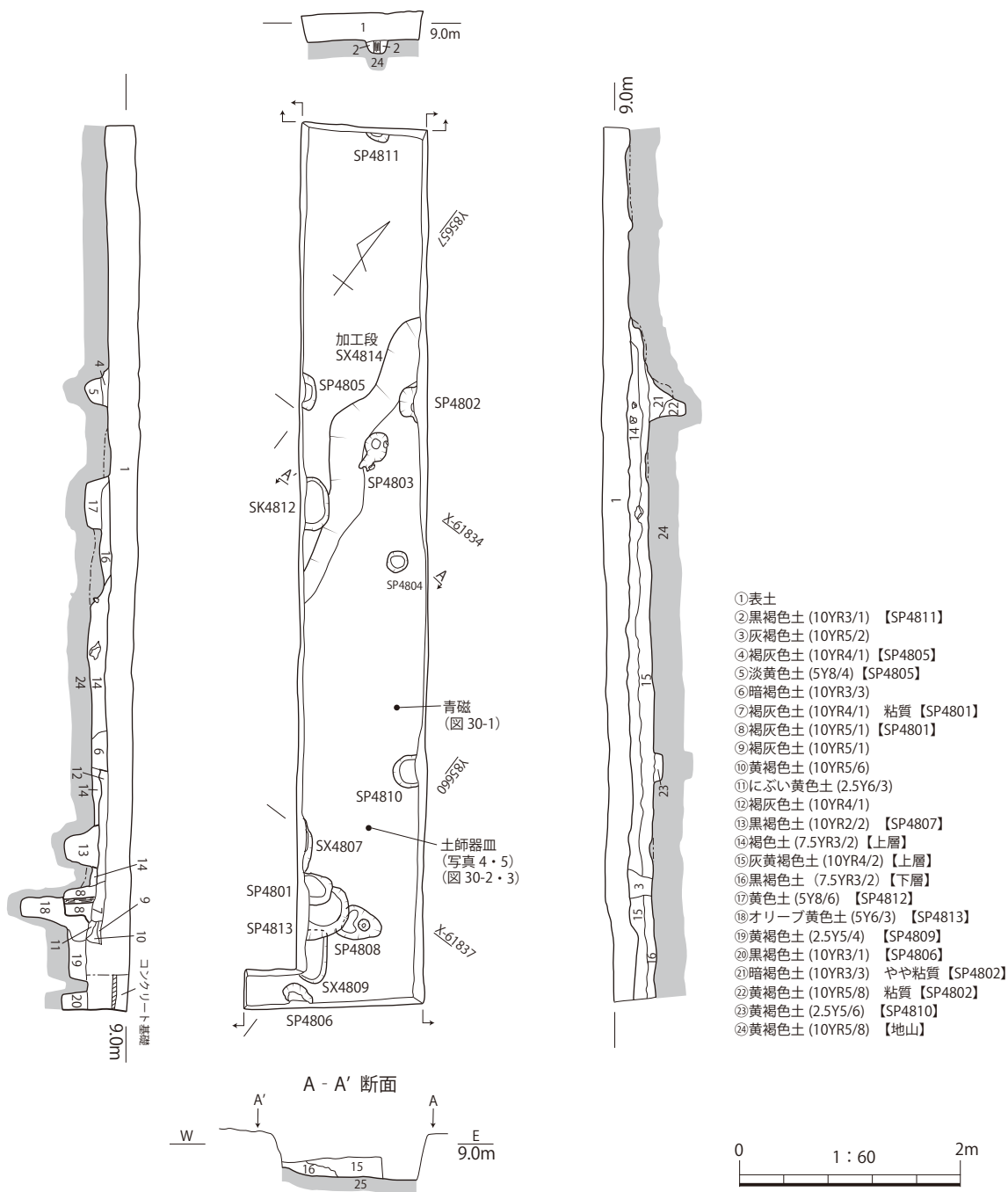


図29 T48平面・土層図

表3 T48検出ピット等一覧

遺構名	最大径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	備考
SP4801	28.0	36.0	—	
SP4802	27.0	35.0	—	
SP4803	36.0	12.7	—	
SP4804	19.0	8.5	—	
SP4805	36.0	20.0	—	
SP4806	29.0	21.3	土師器細片	
SX4807	50.0	30.0	—	

遺構名	最大径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	備考
SP4808	40.0	19.2	—	
SX4809	40.0	15.0	—	
SP4810	27.0	7.0	—	
SP4811	20.0	12.7	—	
SK4812	47.0	8.0	—	
SP4813	48.0	60.0	—	

29-⑭⑮層）は褐色系の色調で固く締まる土質であった。14世紀頃の中国産磁器が出土したため、遺構はこの頃埋没した想定される。下層（図29-⑯層）は黒色の色調であり、上層とは土質が異なる。須恵器坏、土師器、瓦片が出土した。時期差があると想定されるが、遺物の出土数が少なく時期は不明。下層の堆積範囲は加工段の下端付近のみでありきわめて限定的であった。

遺物（図30）

下層出土遺物は小片のため図化できなかった。上層の遺物を示す。

1は中国産青磁碗。口縁を屈曲させるタイプで、大宰府編年小碗Ⅲ類と考えられる（横田・森田1978/14世紀頃）<sup>（註1）</sup>。

2、3は土師器皿。2は口径10.0cm、3は口径9.9cm。いずれも丁寧なナデ調整が内面に見られる。

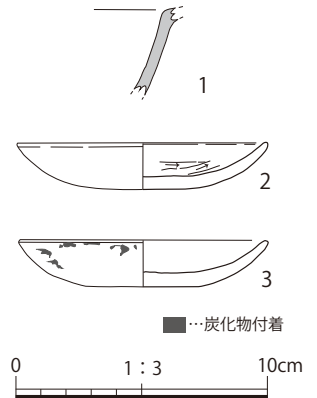


図30 T48上層出土遺物  
実測図

3. T49(立会調査)

調査の概要（図31）

表土（図31-①層）を掘り下げると調査区西半にて地山を検出した。検出標高は8.6m。また、東半では標高8.8mで遺物包含層（図31-②③層）を検出した。層中からは磨滅した土師器片と瓦が出土した。検出した標高から②層はT48上層（14世紀頃）、③層はT47上層（11世紀後半～12世紀後半頃）と同一層と想定される。また調査区で中心で地山が東へ落ち込む様子が確認できた。T47から連続する段状の落ち込みの上端である。

包含層（図31）

標高8.8mで検出した（図31-②③層）。本調査区は下水道管設置に伴う掘削深度までの調査にとどまっているため、包含層の掘削は行っていない。土色は暗褐色で磨滅した土師器片・瓦を含んでおり、検出した標高から②層はT48包含層上層、③層はT47包含層上層と同一層の可能性はある。

遺物はいずれも小片のため図化はできなかった。



写真6 T49地山の落ち込み検出状況  
（西から）

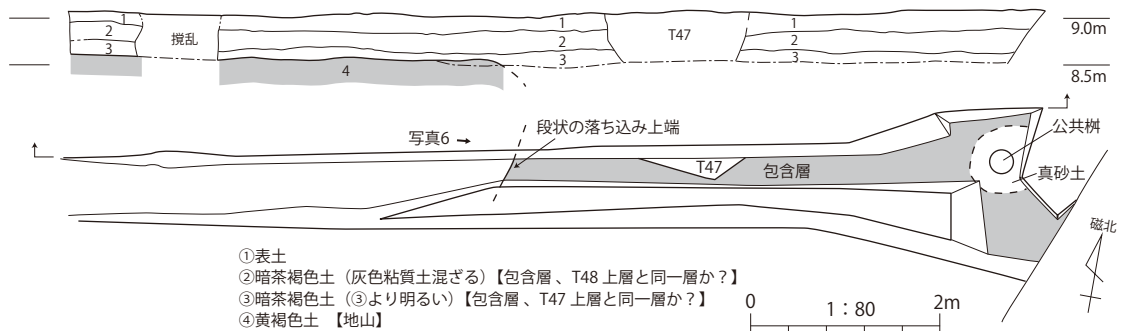


図31 T49平面・土層図



#### 4. T50（立会調査）

##### 調査の概要（図32）

表土、耕作土を掘り下げると標高 8.85m の地点で遺物包含層（図 32 -③層）を検出した。土色は暗褐色で磨滅した土師器片や軟質の瓦を含むものであった。本調査区は工事立会によるものであり、包含層の掘削は行っていない。地山未検出。

##### 包含層（図32）

標高 8.85m で検出した（図 32 -③層）。土質は暗褐色の色調で固く締まる。磨滅した土師器片や軟質の瓦が出土した。北隣の T48 の包含層上層の検出標高は標高 8.87 m であり、本包含層の検出面とおおよそ一致する。このことから同一層と判断される。

出土した遺物はいずれも小片で図化可能なものが抽出できなかったが、T48 包含層上層は 14 世紀頃と比定されるため、本包含層も同時期の層と捉えたい。

#### 5. T51～T53（試掘調査）

##### 調査の概要（図33）

##### T51

表土を掘り下げると、標高 8.85m で褐色系の包含層（③④層）を検出し、土師器の細片が出土した。包含層をさらに掘削すると標高 8.55m で地山（⑦層）を検出した。遺構は検出しなかった。包含層は検出した標高から T48 上層と同一層と考えられる。

##### T52

表土、攪乱層を掘り下げると、標高 8.36m で黒褐色粘質土層（⑥層）を検出し、瓦が多数出土した。さらに掘削すると標高 8.2m で灰色の地山（⑦層）を検出した。遺構は検出しなかった。

##### T53

表土を掘り下げると標高 8.65m で茶褐色の包含層（②～⑤層）を検出し、土師器の細片が出土した。T51 ③④層と同一層である。標高 8.2m まで掘削したが地山は確認されず、包含層が最下層以降も堆積していた。地山は未検出。

##### 包含層（図33）

T51 と T53 で検出した包含層は土質が類似し、標高から同一層である。T52 の包含層は上層を攪乱されており判然としない。T51、T53 の包含層は標高 8.85m（T51）、8.65m（T53）で検出していることから、T48 上層（14 世紀以降）と同一層と考えられる。

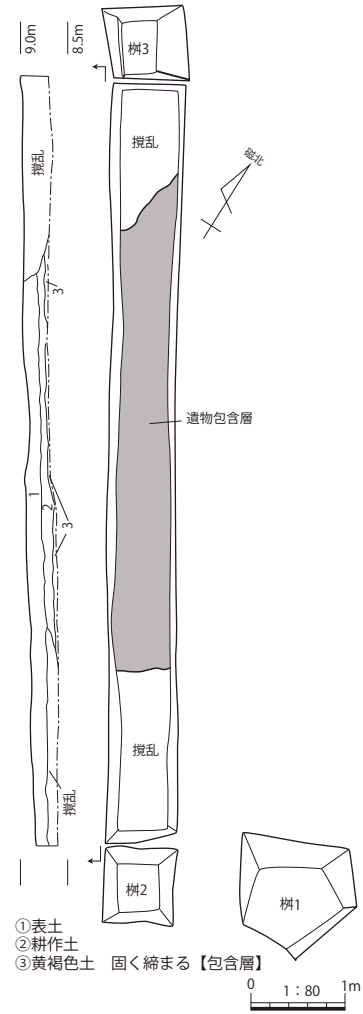


図 32 T50 平面・土層図

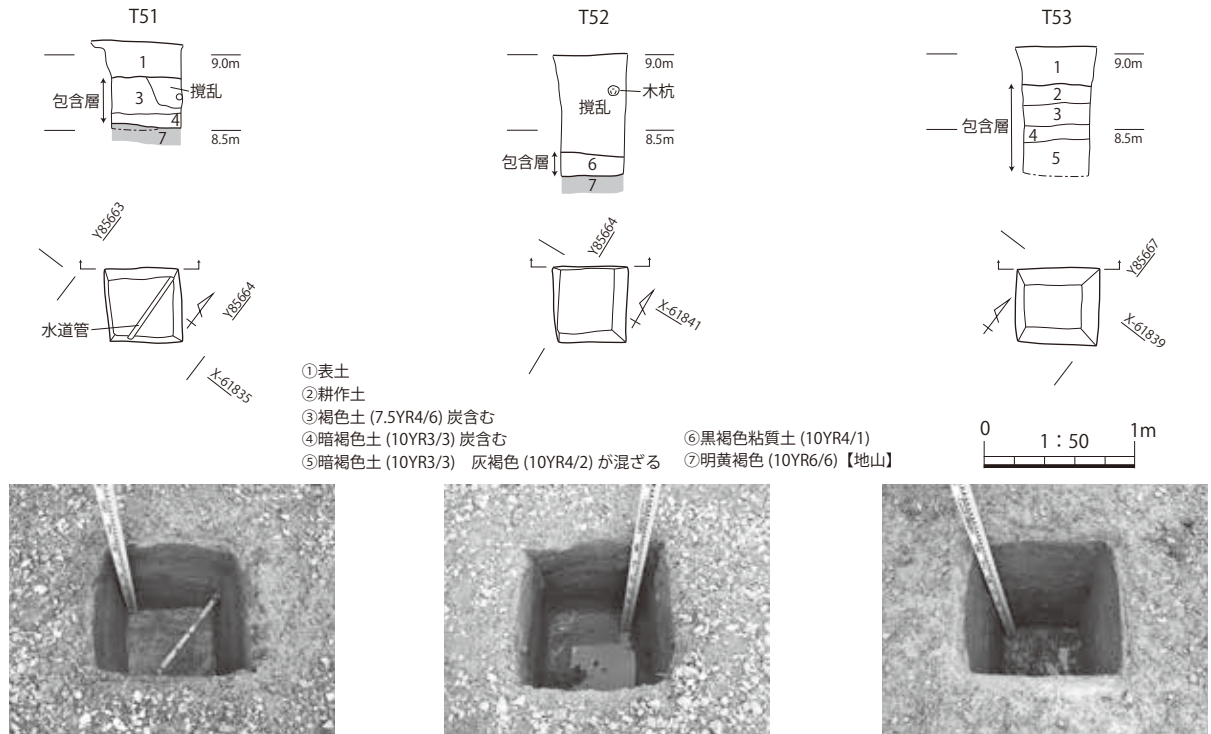


図33 T51・T52・T53 平面・土層図

## 6. T54（保存目的調査）

### 調査の概要（図34）

表土を掘削すると、標高 8.7m で褐色土の包含層を検出した（図34-⑤⑦⑧層）。土師器で柱状高台付皿の破片が多数出土した（包含層上層）。土師器の年代は 11 世紀後半～12 世紀後半頃である。

包含層上層をさらに掘削すると標高 8.25m で灰色粘質土層（図34-⑨層）を検出した。⑨層以下、地山上面まで灰色粘土層が厚く堆積しており、埋土より瓦、須恵器が出土した。これを包含層下層とした（図34-⑨～⑭層）。出土した須恵器の年代は 8 世紀後半～9 世紀前半頃。

包含層下層を掘り下げると、標高 7.42m で青灰色の地山（図34-⑮層）を検出した。地山は調査区西壁でやや立ち上がる様子が観察でき、このことから、段状の落ち込みの下端部を捉えたものと考えられる。

### 包含層（図34）

#### 上層

標高 8.7m で検出した（図34-⑤～⑧層）。土層の厚さは 45cm で、土色は褐色。固く締まる土質であった。炭化物を多く含み、磨滅した土師器、瓦の破片を含んでいた。T47 包含層上層と同一層である。

#### 下層

標高 8.25m で検出した（図34-⑨～⑭層）。厚さは 83cm であり地山直上まで厚く堆積していた。土質は灰白色で、下層にかけて黒色、オリーブ黒色の色調であった。粘土質。

出土遺物は須恵器と瓦があり、1 点赤色顔料が表面に残存する土師器が出土した（図35-1）。T47 の包含層下層と同一層である。

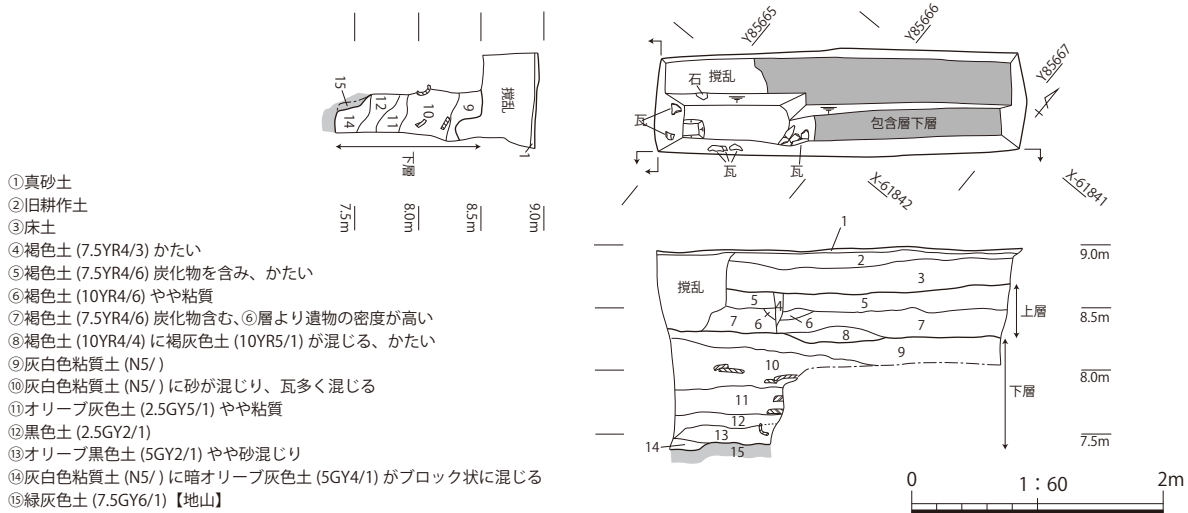


図34 T54 平面・土層図

遺物 (図35)

上層の遺物は小片で磨滅が著しかったため図化ができなかった。ここでは下層出土遺物について述べる。

1は土師器の坏または皿である。外面に炭化物、赤色顔料が付着する。2は須恵器皿の口縁部である。端部を丸く収める。内外面にヨコナデ調整が施される。3は坏または皿の口縁部で器厚0.45cmと薄いつくりである。4は須恵器坏または皿の底部で高台部が残存する。5も須恵器の坏または皿の底部で無高台で底部外面に糸切痕を残す。6は須恵器の鉢である。口縁部が残存しており外面にタタキ痕後ヨコナデ調整が施され、内面には底部から口縁方向にケズリ調整が施される。

瓦埴類は238点出土している。内訳は平瓦が破片数161点、重量30.1kg、隅数20点、丸瓦が破片数68点、重量10kg、隅数10点、軒平瓦が破片数4点、軒丸瓦が破片数5点である(46頁表4参照)。軒瓦の型式別内訳は軒丸瓦1型式が5点、軒平瓦1型式が1点、型式不明の軒平瓦が3点である。丸瓦、平瓦はいずれも小片のため、軒瓦のみ掲載した。

図35-7は軒丸瓦1型式である。瓦当裏面の丸瓦剥離部分には長さ3cmほどの縦方向の刻み目と布目圧痕が転写されている。また、丸瓦部の広端部は両隅を斜めに切り落とされている。瓦当裏面にはケズリとナデが施されているが、指オサエも明瞭に確認できる。8は軒平瓦である。小片であり瓦当文様は判然としないが1B型式である。

7. 小結

講堂西側では、T47、T49、T54の調査結果から南北方向に地山が段状に落ち込み、東へ平坦面が形成されていることが分かった。平坦面は、図36のT47(7.88m)、T53(8.33m以下)、T54(7.45m)の範囲に展開する。T47、T54の標高から、南に緩やかに下る地形である。

段の上端はT47の北西角と南西角、T49の中央で検出した。南では、T52で高さ8.36mの地山を検出し、T53では地山を検出していないから、T52、T53間に段の上端が存在すると想定する。

T54では調査区南西角で高さ7.45mの地山を検出しており、西壁で西方への地山の立ち上がり



図35 T54 下層出土遺物実測図

確認できた。このことから段の上端はT54の西隣にあると考える。よってT47の西寄りで検出した段は、T49、T51でやや東へ湾曲し、ほぼ正方位に南へ展開すると想定する。

検出した段と平坦面は、国分寺の建設に伴い形成された可能性が高い。平坦面の直上に8世紀後半～9世紀前葉頃の包含層が堆積しているからである。このことから国分寺機能時にはすでに段と平坦面は形成されていたことになる。この包含層の直上には、11世紀後半～12世紀後半の包含層が堆積していたので、段はこの頃完全に埋没したと考える。段は高低差0.7mと深く掘りこまれていた。本地の北には頂部に上竹矢古墳群を配置する低丘陵が東へ張り出しており、カットされた地山はこの丘陵から連続する地盤と判断される。

また、T48では加工段SX4814を検出した。この段はほぼ正方位につくられており、包含層上層から埋没時期は14世紀以降で国分寺廃絶後であるが、包含層下層は奈良時代の層である可能性がある。加工段の下端の標高は8.65mで、先述の段の上端の高さとほぼ一致するので、東より一段高い平坦面がT48からT47の西端にかけて存在することになる。

以上の事象から、本地は国分寺建設にあたって、丘陵南斜面の一部を段状に削平し、東の主要堂宇にむかって平坦面が形成された土地であると判断できる。この平坦面は講堂の東隣までほぼ水平に続いており、講堂の建設にあたって地面が平らになるよう整地されていたことがわかる（第4章第1節詳述）。SX4814の性格については不明であるが、段が正方位であることから、本遺構も国分寺に関連して形成されたと考えられよう。

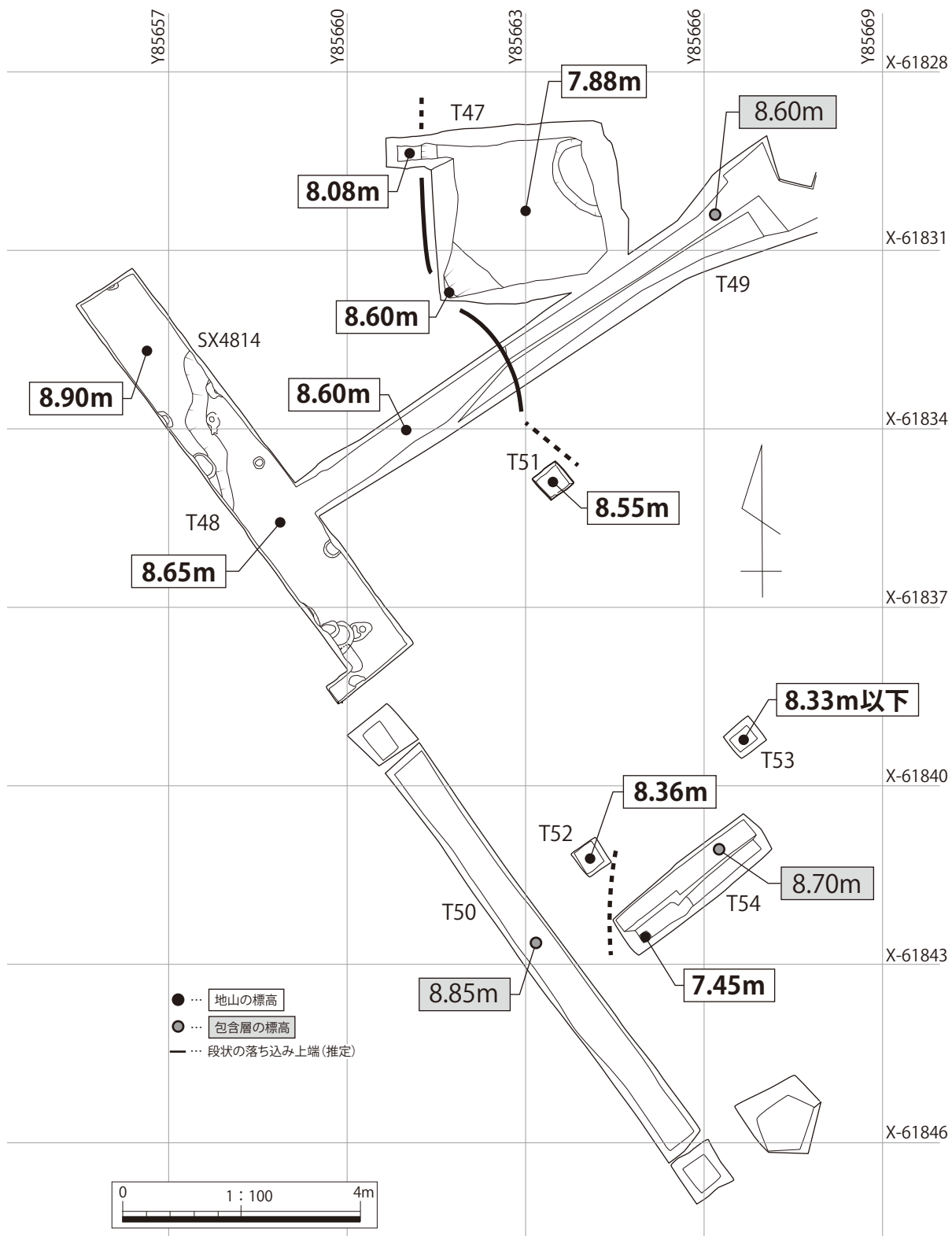


図 36 講堂西側の地山の標高

【註釈】

1 守岡正司氏（島根県立古代出雲歴史博物館）のご教示による。

## 第4章 総括

### 第1節 遺構の検討

#### 1. はじめに

『総括報告』では、第12次、14次調査成果（第Ⅲ期調査）を中心に、出雲国分寺建設に伴う伽藍地及び寺域の造成について検討を行っている。出雲国分寺の調査では、調査区によって地山の粘土と暗灰色系の粘土が混じり合った、いわゆる斑層がしばしば確認されている。『周辺報告』『総括報告』では本層を国分寺建立に伴う土地造成の際に盛られた「整地層」と位置付けている。この整地層は講堂より南や、史跡範囲の東側隣接地水田部で多く検出されている。

出雲国分寺は茶白山から東に連なる低丘陵の先端部分に立地しており、北から南へ下がる緩斜面の地形を呈している。現在想定されている寺域の北端と南端では現況地表面で4.8mの高低差がある。

出雲国分寺の発掘調査はこれまで史跡指定地内と東側の水田部の調査が中心であった。伽藍地の西については宅地の存在から調査の機会に恵まれていなかったが、本報告では石田茂作氏による第Ⅰ期調査以来初めての、講堂西側の調査（T47～T54）を行うことができた。

本報告の調査では、講堂西側にて地山が段状に落ち込み、主要堂宇にかけて平坦面が形成されていることが明らかとなった。平坦面の直上には8世紀後半～9世紀前葉の包含層が堆積していることから、これは国分寺創建期の造成に伴うものの可能性が高い。このことから、これまで検討されてきた伽藍地の造成について、本報告の調査成果を加え、若干の検討を試みたい。

#### 2. 整地層の分布と地山の標高

これまで見つかっている整地層の分布と地山の標高について改めて整理し、図38下表に示す。出雲国分寺跡の範囲を7つのブロックに分け、地区ごとに概観する。

##### ①講堂周辺部

講堂の西隣にて整地層が検出されている（T43）。検出標高は8.0～8.8mであり地山直上に堆積する。本報告のT47～T54はここから南西約15mに位置するが整地層は検出されていない。講堂西側では、整地層は限定的な範囲に分布するようである。

これまで報告したように、T47では調査区西端で地山が段状に落ち込み東へ平坦面が形成されている。落ち込みの上端は標高8.6mであり平坦面とは0.7m程度の高低差がある。この段は、T49とT54で南へ連続することを確認している。T47とT54の落ち込み下端の標高は、7.88m（T47）、7.65m（T54）であることから、平坦面は南へ緩やかに傾斜する。

整備講堂の東隣を調査したT41では、地山直上に整地層の可能性のある層が検出されている。整地層上面の標高は7.9～8.0m、地山上面の標高は7.6mである。整地層上面の高さは先述のT47平坦面の標高値とほぼ一致する（図37）。このことから、講堂周辺部は、東に整地層を盛土し、西は地山を削ることによって平坦に整地されていると判断される。よって、T41の整地層と思われる層は、

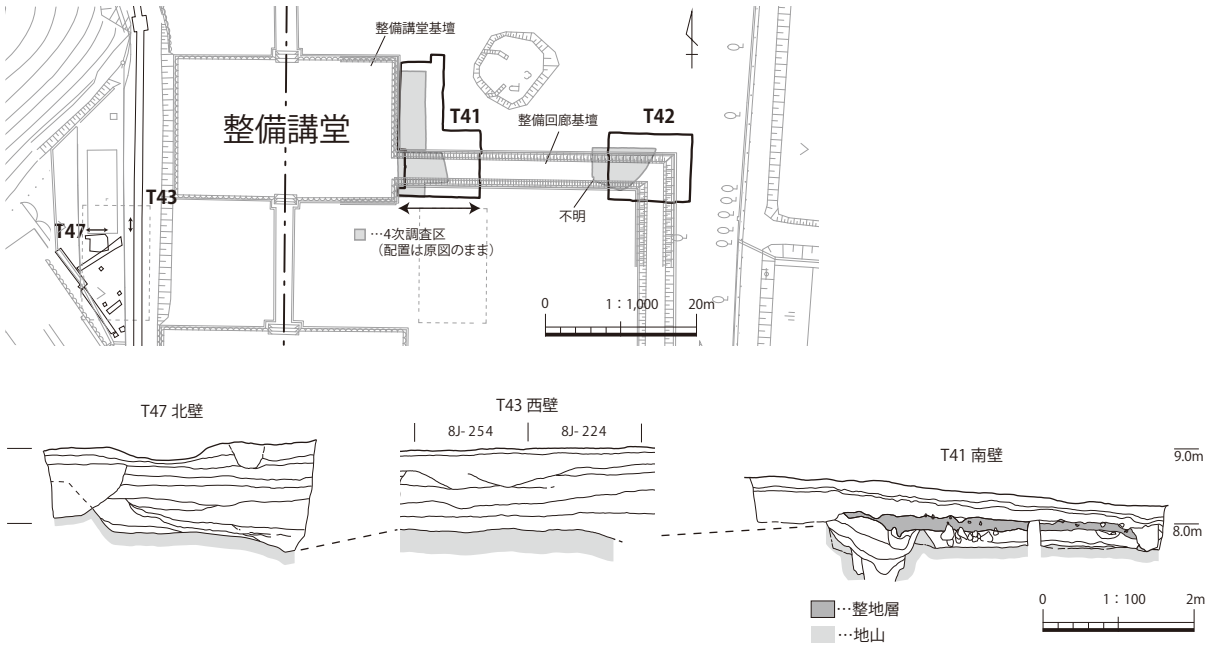


図 37 T47、T43、T41 土層状況

明確に整地層と位置付けてよい。

②伽藍東中央部

伽藍東中央部では、T33 を除くすべての調査区で整地層を検出している。

主要堂宇に近い T1、T2、T4 では地山の標高が 3.75 m (T1)、3.7 ~ 4.0 m (T2 西)、4.0 ~ 4.2 m (T2 東)、3.4 ~ 3.9 m (T4) で、直上に整地層が堆積する。整地層の厚さは 0.7 ~ 1.4 m である。

伽藍地東縁辺部に位置する T3、T6、T7、T14、T17 の地山の標高は、2.5 ~ 2.9 m (T3)、3.8 ~ 4.0 m (T6)、3.2 ~ 3.7 m (T7)、2.5 m (T14)、2.3 m (T17) である。いずれも整地層が堆積しており厚さは 0.3 ~ 1.4 m である。

主要堂宇に近い地点では地山はほぼ平坦であるが、東縁辺部にかけて低くなっていることがわかる。T2 東調査区と T6 の間が伽藍地外周溝の推定地であるので (17 頁図 12 参照)、伽藍地内が水平に整地され、周溝の外側が東へ緩やかに傾斜していると捉える。伽藍地外の調査区 (T3、T6、T7、T14、T17) でも整地層が検出されているので、伽藍地の外側についても伽藍地内と一体的に整地層が盛土されていたようだ。

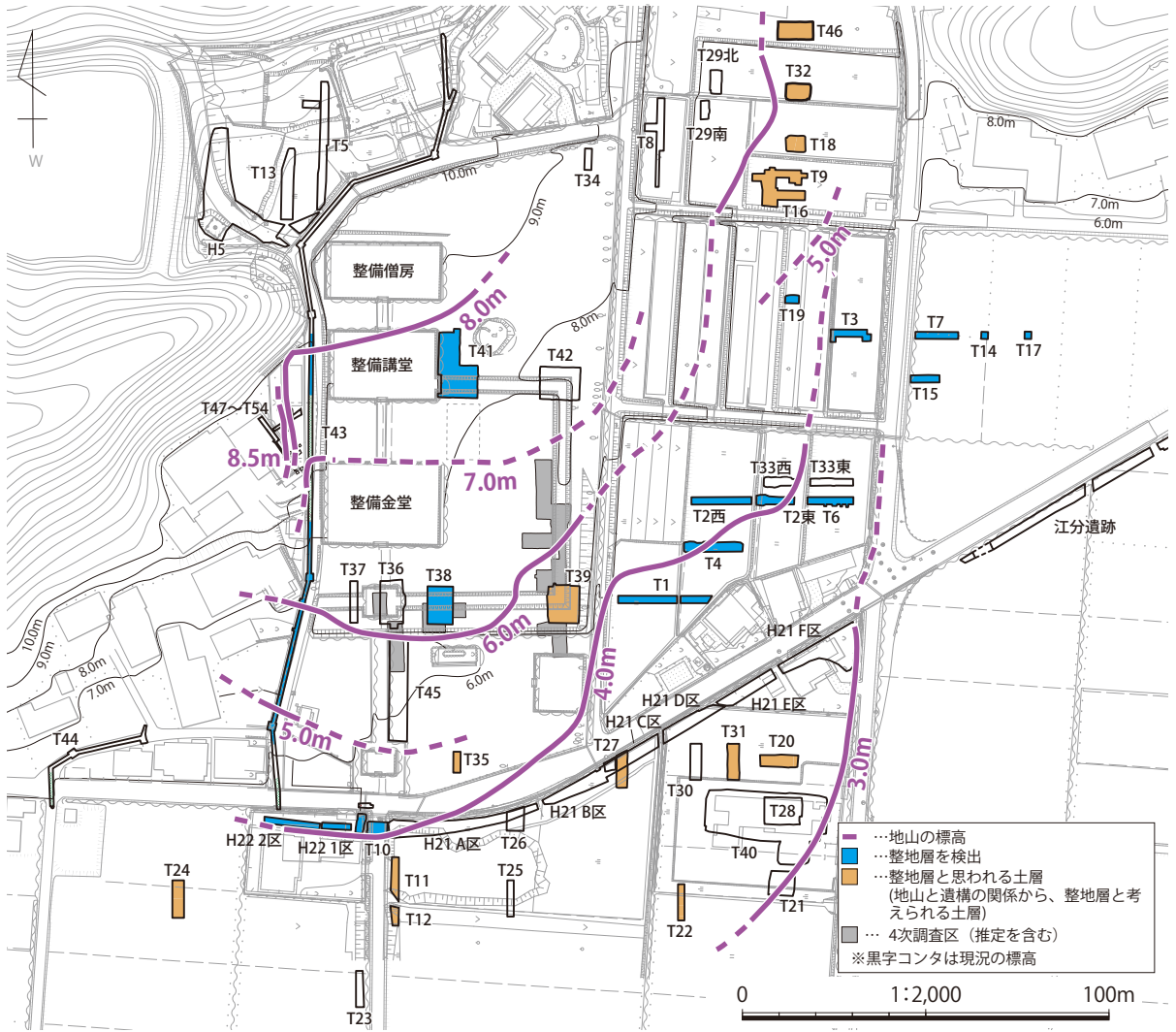
③中門周辺部

T38、T43 で整地層を検出している。T38 の地山の標高は 6.5 m で整地層の厚さは 0.1 m である。

T43 では整備金堂の南西角から南門北西部まで約 60 m にわたり整地層が確認されている。T38 の西側では地山の標高は 6.3 m で、直上に整地層が 0.2 m 堆積する。よって中門周辺は東西ほぼ水平になるよう整地がされていると考える。

④伽藍南東部

明確に整地層と判断できる層は見つかっていない。T20、T22、T27、T31 で整地層の可能性のある層が見つかっており、上面の高さは 3.5 ~ 4.0 m である。T27、T30 で伽藍地外周溝の東西溝が見



各調査区の整地層と地山の標高

調査区	整地層	整地層上面 (m)	地山上面 (m)	備考
T1	A	4.5 ~ 4.7	3.75	
T2 西	A	4.6 ~ 4.9	3.7 ~ 4.0	
T2 東	A	4.7 ~ 4.9	4.0 ~ 4.2	
T3	A	3.5 ~ 4.0	2.5 ~ 2.9	
T4	A	4.8	3.4 ~ 3.9	
T5			10.2 ~ 12.3	
T6	A	3.8 ~ 4.0	3.5	
T7	A	3.2 ~ 3.7	2.8	
T8			削平?	
T9	B	5.7	5.5	
T10	A	4.5 ~ 4.6	4.0 ~ 4.1	
T11	B	4.0 ~ 4.2	3.6	
T12	B	4.2	3.6 ~ 3.7	
T13				
T14	A	3.1	2.5	
T15	A	3.0 ~ 3.3		
T16	B	5.7	5.5	
T17	A	2.8	2.3	
T18	A	5.5 ~ 5.9		
T19	A	4.7		
T20	B	3.5		
T21			3.0 ~ 3.4	
T22	B	3.5	3.2	
T23			削平?	
T24	B	4.3		
T25			削平	
T26			削平?	
T27	B	4.0	3.8	
T28			削平?	
T29 北			6.3 ?	
T29 南			6.1	
T30			2.8	
T31	B	3.8	3.6	
T32	B	5.8		
T33 西			3.2 ~ 4.2	
T33 東				
T34			削平	
T35	B	4.9 ~ 5.0		
T36				
T37				
T38	A	6.6	6.11 ~ 6.41	
T39			6.5	
T40	B	3.5 ~ 3.6	3.0 ~ 3.5	
T41	B	7.9 ~ 8.0	7.6	
T42			削平	
T43	A	4.8 ~ 8.4	4.7 ~ 10.0	整地層は一部で検出 南北約 220 m のトレンチ
T44			4.8	
T45			5.48 ~ 5.78	
T46	B	6.0	5.4	
T47			7.88 ~ 8.6	段状の落ち込み 地山直上に 8 世紀後半 ~ 9 世紀の包含層が堆積
T48			8.6 ~ 8.9	
T49				
T50				
T51			8.5	
T52			8.2	
T53				
T54			7.42	地山直上に 8 世紀後半 ~ 9 世紀の包含層が堆積
H21 A 区			?	
H21 B 区			?	
H21 C 区			?	
H21 D 区			?	
H21 E 区			?	
H21 F 区			?	
H22 1 区	A	4.4 ~ 4.5	4.12	
H22 2 区	A	4.4 ~ 4.5	4.12	

※網掛けは紫色コンタの根拠とした調査区。  
 ※整地層 A：整地層と判断できるもの。B：整地層と思われる層（判断が困難な層を示す。）空欄：検出していない。  
 ※整地層上面 空欄：整地層を検出していない。  
 ※地山上面 空欄は地山未検出。

図 38 出雲国分寺建設時の地形想定図



つかっておりここが寺域の南限と想定される。

⑤伽藍南西部

南門の南側にあるH 22 1・2区、T10で整地層を検出している。地山の標高は4.1 m程度でほぼ水平である。整地層は0.3～0.6 mの厚さで堆積している。よって南門の南側は盛土造成が行われている。

西側のT44では、標高4.98 mで地山を検出している。整地層は見つからないが、地山上面にて礎石や井戸、土坑を確認しており何らかの施設が存在する可能性が高い。T44周辺では盛土造成はされず、地山上面が遺構面と捉える。

⑥伽藍北東部

T9、T16、T18、T32、T46で整地層と思われる層を検出している。ここでは南北溝（伽藍地外周溝）が見つかり、T32では整地層上面に掘りこまれている。T16では標高5.5 mで地山を検出している。

⑦伽藍北部

伽藍の北側では整地層は確認していない。伽藍地外周溝は地山上面に掘りこまれており、地山上面が古代の遺構面である。

### 3. 出雲国分寺の造成過程

出雲国分寺で検出された整地層の分布と地山の標高について概観した。

まず、講堂周辺部だが、過去のT41の調査成果と本報告T47～T54の成果を踏まえると標高7.9 m程度で水平に整地されていることが明らかとなった。これまでT41検出の整地層はその堆積時期が明確に位置づけられていなかったが、T47の平坦面と、T41整地層上面の標高がほぼ一致することから、国分寺建設時に盛土造成された土層と判断してよいと考える。このことから、講堂西側についても、堂宇建設にあたって水平に地盤が整えられた土地と位置付けられる。よって本地は国分寺の伽藍地内である。

講堂西側は地山を段状にカットしており、調査区北隣の、低丘陵斜面を削ることによって形成された段であると考えられる。これまで、出雲国分寺の西伽藍についてはこの張り出した丘陵の存在からその様相が不明であったが、今回の調査成果から、丘陵によって制限された本地において、主要堂宇を建設するスペースを確保するために、丘陵斜面を削り伽藍地を確保する造成が行われたことが明らかとなった。

さらに、講堂周辺部のように東西が水平に整地されている様子は、中門周辺部でも確認することができる。T38とT43の整地層上面の高さが6.5～6.6 mとほぼ同一であることと、地山もほぼ水平に堆積していることによる。講堂の中心と中門の中心は65 mの距離があり、整地層上面の標高差は1.38 mである。『総括報告』では、出雲国分寺の造成過程として、「伽藍地全体を水平な平場として造成したものではなく、同じ伽藍地内においても高低差があり、雛壇状に造成が行われていた」と指摘している。講堂周辺部と中門周辺部の高さを比較しても、やはり南北は雛壇状の造成が行われた可

能性が高いと考える。

整地層の分布についてはこれまで指摘されてきた内容と同じで、伽藍地全体を俯瞰すると、伽藍地東側と、講堂より南側において認められ、比較的標高の低い土地に集中的に盛土されていたことが窺える。伽藍地中央部の在り方から、伽藍地外周溝の内側は水平な地盤を意識して整地された可能性があり、対して周溝外の東にかけては、整地層が盛られながらも東へ傾斜する地形であったと想定する。

以上のように検討した各調査区の整地層と地山の標高は、図38のようにまとめられる。紫色のコンタは整地層に覆われた地山、若しくは国分寺機能時の包含層に覆われた地山の標高値を根拠とし示している<sup>(註1)</sup>。

地形は伽藍地の北西から南東にかけて緩やかな斜面を形成している。本来の自然地形も同様のものであったと考える。これによれば、標高4.0m以下の範囲には広範囲に盛土造成されていたことがわかる。講堂周辺や、金堂から南門の西側にも一部盛土がされていたようだ。伽藍地北部で整地層が見られないことから、『総括報告』のとおり「標高の高い斜面上方を削り、その土砂を斜面下方に積み上げて造成が行われた」と考える。

講堂西側には丘陵斜面を削って形成された南北方向の段差があり、講堂にむかって平坦面が形成されている。整地層は堆積していない。平坦面直上に8世紀後半～9世紀前葉頃の包含層が厚く堆積している点から、段差の形成時期は国分寺創建段階と考える。平坦面はほぼ水平に講堂東側(T41)まで続くことから、本地は国分寺の伽藍地内と位置付けられ、この南北方向の段と平坦面は、国分寺建設の土地を確保するために形成されたと判断される。

以上のことから、出雲国分寺建設に伴う土地造成では、北西から南東にかけて傾斜する自然地形を利用し、西側の丘陵斜面を削り出すことと、標高の低い東側と南側を盛土造成することによって伽藍地を整地したと想定する。さらに、こと主要堂宇の周辺にあたっては、地盤が水平になるよう整え、南北が雛壇状になるよう造成されたと考える。

#### 4. おわりに

出雲国分寺建設に伴う造成過程について、これまでの調査成果に本報告内容を加え検討を試みた。これまで指摘されてきた整地層の分布範囲と、南北雛壇状に整えられた造成の在り方に加え、伽藍地西側の一部は、丘陵を削ることによって主要堂宇建設のための土地を作り出していたことが明らかとなった。

これまで伽藍地西側は調査歴の少なさからその詳細が不明であったが、今回の調査によって国分寺伽藍地がさらに展開していることが明らかとなった。伽藍地の西側は、付属施設の存在がかねてより指摘されており、特に南門西側のT44では礎石が検出されていることから、周辺の調査の実施が待たれる。引き続き、今後の調査の蓄積に期待したい。

## 第2節 出土瓦について

今回の調査で出土した瓦埴類は講堂西側が 266.8kg、伽藍地北東部が 1.2kgである。伽藍地北東部 (T46) では調査範囲が狭小なため瓦類の出土点数も少ない。軒瓦は出土しておらず、風化の著しい丸瓦と平瓦が計 3 点出土したのみであった。講堂西側 (T47～T54) から出土した資料についても小片が多く、全形のわかるものはわずかであった。瓦埴類に対する評価は『総括報告』から大きく変わるものではないが、以下では講堂西側出土の軒瓦、丸・平瓦について整理を行う。

### 1. 軒瓦について

講堂西側 (T47～T54) の遺物包含層から軒丸瓦 19 点、軒平瓦 8 点が出土している。内訳は軒丸瓦 1 型式が 10 点、型式不明が 9 点、軒平瓦 1 型式が 4 点 (1B 型式 1 点、1D 型式 1 点、1F 型式 1 点、不明 1 点)、軒平瓦 2 型式が 2 点、型式不明が 2 点である。すべて包含層出土である。

製作手法についてみてみると、軒平瓦 2 型式 (図 18 - 5) は顎部裏面に凹型台痕跡が残る。既報告資料 (『総括報告』第 134 図 3) でも同様の凹型台痕跡は確認でき、軒平瓦 2 型式のうち段顎状の曲線顎をもつものと相関するようである。軒平瓦 2 型式は範傷の有無により 2 種類に細分されており、顎形態や平瓦接合方法にも複数種類が認められる。これらの組み合わせを整理することも今後の課題といえよう。

### 2. 丸・平瓦について

丸瓦は有段式と無段式の両者とも出土している。出土量が少なく、『総括報告』で課題とされた軒丸瓦 1 型式と無段式丸瓦との組み合わせは今回も確認することができなかった。

表 4 出土瓦集計表

トレンチ	出土位置	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦			平瓦		
		破片数 (点)	破片数 (点)	破片数 (点)	偶数 (点)	重量 (kg)	破片数 (点)	偶数 (点)	重量 (kg)
T46		0	0	2	0	0.3	4	0	0.3
T47	包含層上層	0	2	26	4	4.1	124	20	14.4
	包含層下層	13	2	151	46	28.6	563	132	138.6
T47 合計		13	4	177	50	32.7	687	152	153
T48	包含層上層	0	0	6	0	1.0	21	0	1.3
	包含層下層	0	0	0	0	0	0	0	0
	SP4803	0	0	0	0	0	1	0	0.2
	表土、攪乱など	1	0	10	2	1.0	24	2	3.4
T48 合計		1	0	16	2	2.0	46	2	5.0
T49	包含層	0	0	4	0	0.3	5	0	0.7
T50	包含層	0	0	0	0	0	1	0	0.2
	表土、攪乱など	0	0	3	0	0.5	7	1	1.5
T50 合計		0	0	3	0	0.5	8	1	1.7
T52	包含層	0	0	4	0	1.2	13	1	2.1
T53	包含層	0	0	0	0	0	3	0	0.3
T54	包含層上層	0	1	3	0	0.1	3	0	0.4
	包含層下層	5	3	58	8	8.6	149	20	29.2
	表土、攪乱など	0	0	7	2	1.3	9	0	0.4
T54 合計		5	4	68	10	10	161	20	30.1
総計		19	8	274	62	46.9	927	176	193.2

平瓦に関しては、硬質のものと軟質のものがほぼ同数出土している。成形方法はすべて凸型台を使用した一枚作りであり、桶巻作りのものは認められなかった<sup>(註2)</sup>。全形の判明する資料はいずれも『総括報告』で示された寸法(全長35.2cm、狭端幅25.2cm、広端幅30.4cm、厚さ2.4cm)に準ずる。叩き文様と色調や焼成、離れ砂の有無との組み合わせについても『総括報告』第30表とほぼ矛盾はなく、新たな叩き文様も確認していない。ただし、厚さについては2.4cm前後のものを中心としながらも、1.9cmほどのやや薄手のものも一定数認められた。また、製作手法では凹型台痕跡をもつものや凹面補足叩きをもつもの、端面に布目痕跡を留めるものを新たに確認した。製作工程を復元すると以下のようになろう。まず、粘土角材から粘土板を切り出し、布を敷いた













細分	瓦当面(外縁)	顎断面の形状
1A型式	 外縁の幅が狭く、上面は無調整	 直線顎
1B型式	 外縁は幅広で高く、上面はケズリ	 曲線顎
1C型式	 外縁は幅狭で低く、上面はケズリ	 段顎
1D型式	 外縁は平縁	 段顎状曲線顎
1E型式	 上下外縁がやや狭い	 極端に浅く幅の広い段顎
1F型式	 上下外縁無し	 幅広の段顎ほか

図39 軒平瓦1型式の細分

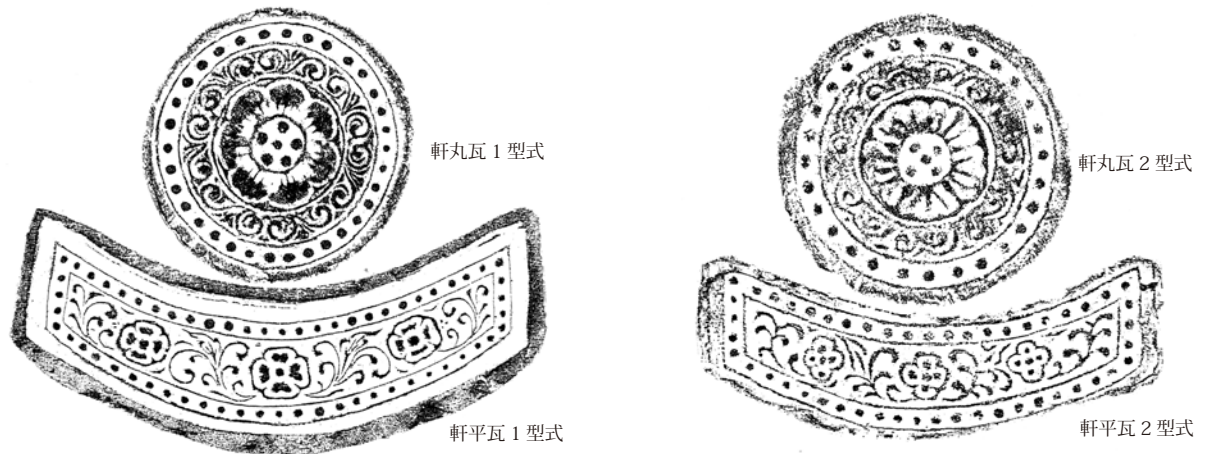


図40 軒瓦のセット関係

凸型台に設置する。つづいて凸面叩き成形を行うが、この時に離れ砂を使用するものもある。その後、平瓦を凹型台に載せ、凹面両側縁と広端挟端にケズリ調整を施す。さらに一部の個体では、乾燥後に平瓦の曲率を調整するための補足叩きを行っている。

### 3. 小結

ここまで見てきたように、今回の調査で出土した瓦類は創建期から補修期まで時期の違う資料が混在している。T47 下層では同一包含層から軒平瓦 1 型式と 2 型式が出土していることから、補修期以降に廃棄された瓦が混在して堆積していたようである。また、比較的近い位置にある建物としては講堂と金堂があるが、磨滅の状況から二次的な移動を受けていたことは間違いなく、どの建物に使用されたものかも特定できない。実際に屋根に葺かれていた瓦の廃棄状況とは考えにくく、当該地における瓦の使用状況については更なる資料の蓄積を待ちたい。

なお、『総括報告』第 123 図 2 に掲載している 2 型式軒丸瓦は『総括報告』第 33 表において出土地点不明としていたが、その後、花谷委員から出雲国分寺瓦窯跡出土資料であるとの指摘を受けた。『八雲立つ風土記の丘 No.35』に収録された岡崎雄二郎氏による出雲国分寺瓦窯跡の概要報告には『総括報告』第 123 図 2 と同様の軒丸瓦拓影が掲載されている。当該資料を八雲立つ風土記の丘資料館にて実見し、『総括報告』掲載の写真と照合した結果、両者は同一個体と判断した。よって、『総括報告』第 123 図 2 は国分寺瓦窯跡出土資料である旨訂正したい。

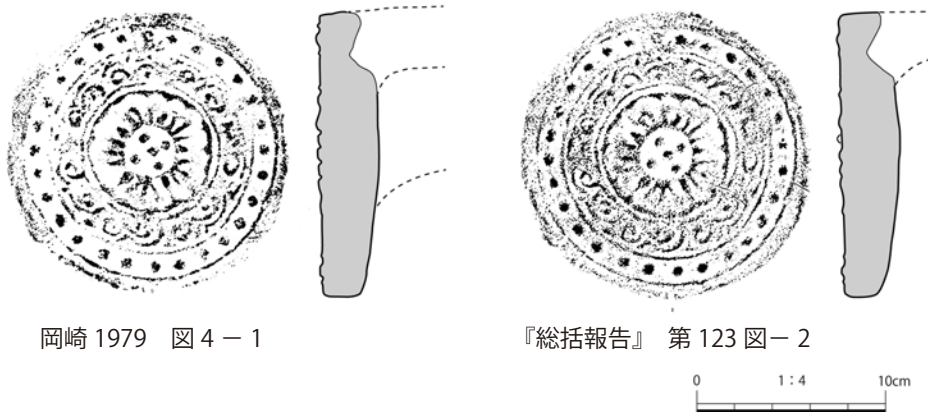


図 41 出雲国分寺瓦窯跡出土 軒丸瓦 2 型式 (岡崎 1979・『総括報告』を再トレース、転載)

### 第3節 調査成果のまとめと今後の課題

国分寺は天平13(741)年の聖武天皇による「国分寺建立の詔」を契機に建設がすすめられた。各国の国分寺の成立過程については、詔が発せられた後、度々国からの建設の催促があったことが分かっており、その建設工事は順調に進まなかったことが窺える。考古学的成果からも天平13(741)年以降各国で国分寺の建設が始まったとされているが、出雲国については天平9(737)年には先駆けて造営が始まったとする指摘もある(森田2015)<sup>(註3)</sup>。『続日本紀』には天平勝宝8(756)年に聖武天皇が崩じ、出雲国を含む26国に灌頂幡<sup>かんじょうぼん</sup>等を授け一周忌に用いさせたことが記されており<sup>(註4)</sup>、また『日本三代実録』には、神護景雲2(768)年に政府の命令に従って吉祥天画像を作り安置していたことが記録されている<sup>(註5)</sup>。このことから造営の開始年代については天平9(737)年か天平13(741)年とするか、現段階の考古学的資料から明らかにすることはできないが、760年頃までには出雲国分寺の堂塔は整っていたとされる(大橋2016)。

本報告では国分寺の伽藍地北東部の調査と、講堂西側の調査の報告を行った。以下調査成果のまとめと今後の課題について整理し、総括としたい。

#### 1. 調査成果のまとめ

本報告の伽藍地北東部の調査(T46)では、国分寺の整地層と思われる層が検出された。これまでの調査で、伽藍地の東側では整地層が広い範囲で堆積していることが確認されており、T46周辺も整地層による盛土造成がされていた可能性が考えられる。出雲国分寺では寺の運営施設の配置については不明であり、そういった施設を伽藍地外周溝の外側に想定することも可能かもしれない。

また、講堂西側の調査では、土坑と2層の包含層を検出し、最下層の土坑と下層の包含層からは多量の瓦が出土した。更に上層には11世紀後半～12世紀後半の包含層を検出しており、これまで指摘されてきたとおりこの頃が国分寺の廃絶期と考えられる。

今回の調査で最も注目されるのは、講堂西側で検出された南北方向の段状の落ち込みである。これは講堂の西側で南北に続いており、整備講堂西端から約13mの距離にある。落ち込みより東は整備講堂の東端まで水平に地山が続いていることが明らかとなった。落ち込みの直上を8世紀後半～9世紀前葉の包含層が覆っていることから、この平坦面は国分寺建設時に形成されたとみてよい。このことから当該地も国分寺の伽藍地内と考えられる。

今回、これまでの調査で検出された地山や整地層の様相を改めて整理したところ、国分寺建設にあたっては講堂西側の土地を段状に削り、南北に雛壇状、東西におよそ地盤が水平になるよう整地されたと想定する。講堂西側は本来、現況よりも更に丘陵が東へ迫っていた可能性も考えられ、丘陵を一部段状に削ることによって主要堂宇を建設するための伽藍地を確保していたことが今回新たに明らかとなった。

#### 2. 今後の課題

今回の調査はいずれも調査範囲が狭く部分的な調査であったため、当該地の性格については課題が

残る。西側施設の可能性としては経楼、付属施設、築地塀や区画溝などの存在があげられる。南門西側の集落部における T44 の調査では礎石が見つかっており、関連施設の存在を示す手がかりである。出雲国分寺跡のこれまでの調査では西側の伽藍地境が明らかになっていないため、今回検出した落ち込みより西や南方については上述の施設の有無を明らかにすることを目的とした調査が今後も必要であろう。

これまで伽藍地西側の調査については宅地が現在も存在していることから他の範囲より調査が実施されていない箇所であった。今回の調査によって上述のような成果が得られたことは国分寺の寺域と造成過程を明らかにするうえで重要な成果であったと考える。出雲国分寺については、全国に先駆けて発掘調査、史跡指定が進められてきており、史跡指定地は整備され市民に広く活用されている。今後も史跡の適切な保存・活用を推進していくため引き続き調査を続けていくことが必要であり、継続的な保存目的調査と保存活用計画の策定を含めた計画的な活用施策が必要である。令和3(2021)年3月3日には最初の史跡指定から100年を迎え、1世紀守られた史跡であり、今後も地域の誇りとして将来に継承されていく取り組みが求められる。

#### 【註釈】

- 1 整地層上面の標高値は後世に削平を受けている可能性があるため今回の分析には加えていない。
- 2 『総括報告』では一部の平瓦凹面に模骨状らしき痕跡が認められるとされているが、これは凹面補足叩きの痕跡と考えられる。
- 3 この説は天平9(737)年3月に、国ごとに釈迦仏像1軀、脇侍菩薩像2軀、大般若経1部を书写するよう命じられたものが、後の国分寺建立の詔に引用されていることに拠っている。このことから国分寺建立の詔の前史として天平9年3月の命令があり、国分寺創建自体が天平13(741)年より遡る可能性があるとする。出雲国には天平7(735)年～11(739)年に石川朝臣年足が国司として赴任しており、在任中多くの写経を行っている。このことから仏教に対する帰依が厚い人物であったと考えられ、出雲国分寺の建立においてもその影響があった可能性が考えられている。
- 4 十二月己亥条(以下読下し)「越後・丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・美作・備前・備中・備後・安芸・周防・長門・紀伊・阿波・讃岐・伊予・土左・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後・日向等二十六国、国別に灌頂幡一具・道場幡四十九首・緋綱二条を頒ち下し、以て周忌御齋の荘飾に充てしむ。用ひ了らば金光明寺に取め置き、永く寺物とし、事に随ひてこれを出し用ゐしむ。」(松江市史編集委員会 2013)
- 5 元慶元年八月二十二日条(以下読下し)「出雲国言さく、神護景雲二年正月二十四日の官符を奉るに、吉祥天像一鋪を画き、国分寺に安置し、毎年正月、其法を薰修せよ、と。年序やや久しくして丹青銷落つ。」(松江市史編集委員会 2013)

#### 【参考文献】

- 大橋泰夫 2016 「出雲国分寺の造営」『出雲国誕生』吉川弘文館 pp.188 - 203  
岡崎雄二郎 1979 「出雲国分寺瓦窯跡について」『八雲立つ風土記の丘』No.35 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館  
松江市史編集委員会編 2013 『松江市史 史料編3 古代・中世』松江市  
森田喜久男 2015 「神仏の祈りと神話の世界」『松江市史 通史編1』松江市

## 付論 出雲国分寺 T47 出土ガラス玉の分析

田村 朋美（奈良文化財研究所）

### 1. はじめに

出雲国分寺 T47 出土のガラス玉について、観察および分析化学的手法により製作技法および基礎ガラスの種類、着色因子の調査を実施し、時期的な検討を加えた。以下、その結果について報告する。

### 2. 資料と方法

調査対象とした資料は、出雲国分寺 T47 から出土したガラス玉 1 点である。緑色透明を呈する。保存状態は比較的良好であり、一部にはガラス光沢も認められる（図 42）。

本ガラス玉について、顕微鏡観察による製作技法の推定と、蛍光 X 線分析による化学組成の調査を実施した。蛍光 X 線分析にあたっては、顕微鏡下で風化の影響ができるだけ少ない場所を測定箇所を選定し、超音波およびエチルアルコールを用いて洗浄したうえで実施した。測定結果



図 42 出雲国分寺 T47 出土ガラス玉の顕微鏡写真

は、測定試料と近似する濃度既知のガラス標準試料を用いて補正した理論補正法（Fundamental Parameter Method：FP 法）により、検出した元素の酸化物の合計が 100%になるように規格化した。測定に用いた装置は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（エダックス社製 EAGLE III）である。励起用 X 線源はロジウム（Rh）管球、管電圧は 20 kV、管電流は 200  $\mu$ A、X 線照射径は 50  $\mu$ m、計数時間は 300 秒とし、真空中で測定した。

### 3. 結果と考察

顕微鏡観察において、孔と直交方向にめぐる触像が確認された。これは、軟化したガラスを芯棒に巻き付けた痕跡であると考えられる。すなわち、本ガラス玉は巻き付け法で製作されたものである。

蛍光 X 線分析の結果を表 5 に示す。本資料は、酸化カリウム（ $K_2O$ ）を 8.3%、酸化鉛（ $PbO$ ）を 31.8%含有するカリ鉛ガラス製であることが判明した。ガラスの色調に関与する成分に着目すると、酸化銅（ $CuO$ ）を 0.60%含むことから、銅イオンが緑色の発色に関与していると考えられる。

以上の結果から、本ガラス玉の帰属時期について若干の検討を加える。本資料がカリ鉛ガラス製であることから、上限はある程度限定できる。カリ鉛ガラスは、北宋時代の中国で初めて生産されたと考えられている（Brill, et al. 1979）。日本列島におけるカリ鉛ガラスの初現は、中国からの舶載品で、985 年に製造されたとされる京都府清凉寺の釈迦如来像胎内に納められたガラス瓶である（山崎 1987）。その後しばらくは中国産のカリ鉛ガラスが流入したが、11 世紀後半には対馬産（対州鉾山）の鉛鉾石を使ったカリ鉛ガラスの生産が始まったことが鉛同位体比分析から明らかになっている（Koezuka and Yamazaki 1998）。近年の調査で、対州鉾山の鉛を用いたカリ鉛ガラスについては、後



続する時期のものに比べてPbOの含有量が多い傾向があることが指摘されるのに対し(田村・高橋2020)、本資料はPbOの含有量がやや少ない(図43)。また、管見の限り、対州鉱山の鉛を用いた日本列島産のかり鉛ガラスは淡緑色や淡青色、褐色透明などの色調が多く、本資料のような濃い緑色は少ない。一方、15-16世紀に類似の化学組成や色調のかり鉛ガラスが北海道(高橋・田村2021)や一乗谷朝倉氏遺跡(田村2018)

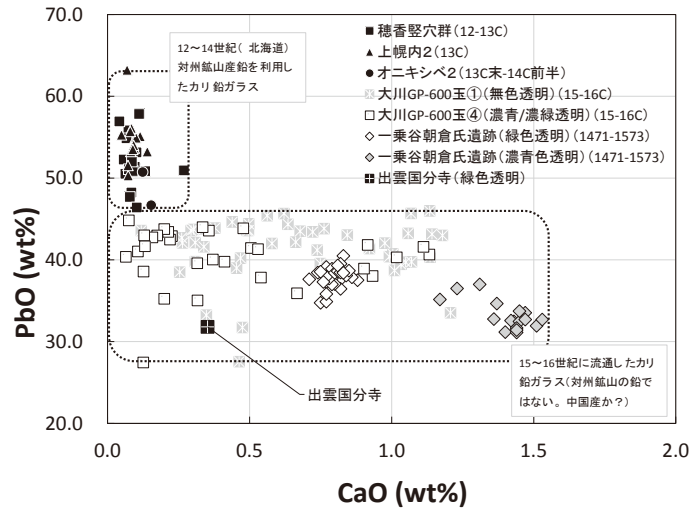


図43 かり鉛ガラスの材質的特性

で流通している。ただし、対州鉱山の鉛を用いたかり鉛ガラスに先行して流入した中国産のかり鉛ガラスについては分析事例が少なく、化学組成の特徴が明らかでないため、現状では本資料の帰属時期についてこれ以上限定することはできない。今後の分析データの蓄積がまつれる。

表5 蛍光X線分析結果

製作技法	色調/透明度	重量濃度(%)											
		Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CuO	ZnO	PbO
巻き付け	緑色透明	1.2	0.2	1.6	55.1	8.3	0.4	0.03	0.07	0.64	0.60	0.03	31.8

【引用・参考文献】

高橋美鈴・田村朋美 2021 「アイヌ文化期におけるガラス玉の時期変遷に関する考古科学研究—化学組成と鉛同位体比分析—」『日本文化財科学会第38回大会発表要旨集』

田村朋美 2018 「一乗谷朝倉氏遺跡出土ガラス製遺物の自然科学的調査」『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告16』

田村朋美・高橋美鈴 2020 「擦文末期～アイヌ文化期初期におけるガラス玉の起源と流入経路」『北海道考古学』56

山崎一雄 1987 「日本出土のガラスの化学的研究」『古文化財の科学』

Brill, R.H., Yamasaki, K., Barnes, I. L., Rosman, K. J., Diaz, M. 1979 *Ars Orientalis* vol.11.

Koezuka, T., Yamasaki, K. 1998 Investigation of Some K<sub>2</sub>O - PbO - SiO<sub>2</sub> Glasses Excavated in Japan. Proceedings of 18th International Congress on Glass. The American Ceramic Society.

## 土器

挿図 番号	種類	器種	出土位置	法量 (cm)			調整	焼成	色調	備考
				口径	底径	器高				
10-1	須恵器	無高台皿	T46 4層	-	-	-	-	不良	灰色	-
10-2	須恵器	無高台皿	T46 5層	-	(8.8)	-	底部糸切痕	良好	灰色	-
15-1	土師器	柱状高台付皿	T47 上層	(8.6)	(4.8)	2.9	底部糸切痕	良好	橙	-
15-2	土師器	無高台杯	T47 上層	-	5.3	-	-	良好	灰白	-
15-3	土師器	無高台杯	T47 上層	-	4.2	-	-	良好	にぶい橙	-
15-4	土師器	無高台杯	T47 上層	-	5.2	-	-	やや不良	橙	-
15-5	土師器	無高台杯	T47 上層	-	(9.2)	-	-	良好	外:黄灰 内:灰白	-
15-6	土師器	高台付杯	T47 上層	-	(5.4)	-	-	良好	橙	-
15-7	土師器	高台付杯	T47 上層	-	-	-	-	良好	灰白	国府9~10型式(11C 後半~12C後半)
15-8	土師器	高台付杯	T47 上層	-	-	-	-	良好	にぶい黄橙	-
15-9	土師器	高台付杯	T47 上層	-	-	-	-	良好	にぶい黄橙	-
15-10	須恵器	蓋	T47 上層	-	-	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ後ナデ	不良	灰白	-
15-11	須恵器	壺 or 甕	T47 上層	-	-	-	外:擬格子状タタキ 内:同心円状当て具痕	良好	灰	-
17-1	須恵器	蓋	T47 下層	-	-	-	外:ケズリ 内:ヨコナデ	良好	灰	-
17-2	須恵器	無高台皿	T47 下層	(12.8)	-	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	良好	灰	灯明皿
17-3	須恵器	無高台皿	T47 下層	(13.4)	7.0	2.1	外:回転ナデ、底部糸切痕 内:回転ナデ	良好	灰白	国府4~5型式(8C後 半~9C前葉)
17-4	須恵器	高台付杯 or 皿	T47 下層	-	(12.2)	-	内:回転ナデ 底部糸切痕後ナデ	良好	灰	-
17-5	須恵器	高台付杯 or 皿	T47 下層	-	(12.4)	-	内:回転ナデ 底部糸切痕	良好	灰	-
17-6	須恵器	高台付杯	T47 下層	-	4.2	-	外:回転ナデ、底部糸切痕 内:回転ナデ	不良	灰	国府4~5型式
17-7	須恵器	多口瓶	T47 下層	-	-	-	外:櫛状工具2条/単位 内:ヨコナデ、指頭圧痕	良好	赤灰	-
17-8	須恵器	高杯	T47 下層	(26.2)	(3.8)	-	外:回転ナデ、ヘラ削り 内:回転ナデ	良好	灰	-
17-9	須恵器	壺 or 甕	T47 下層	-	-	-	外:擬格子状タタキ 内:同心円状当て具痕	良好	黄灰	-
17-10	土師器	無高台杯 or 皿	SK4701	-	6.0	-	底部糸切痕?	不良	橙	-
30-1	青磁	小碗	T48 上層	-	-	-	-	良好	黄褐	大宰府小碗Ⅲ類? (14C頃)
30-2	土師器	皿	T48 上層	10.0	2.8	1.85	内:ヨコナデ	良好	橙	近世以降
30-3	土師器	皿	T48 上層	9.9	4.5	1.85	内:ヨコナデ	良好	橙	近世以降
35-1	土師器	無高台杯	T54 下層	-	(8.0)	-	内外面に赤色顔料付着	良好	外:明黄褐 内にぶい黄橙	-
35-2	須恵器	皿	T54 下層	(16.4)	-	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ	良好	オリーブ灰	-
35-3	須恵器	杯 or 皿	T54 下層	-	-	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ	良好	褐灰	-
35-4	須恵器	高台付杯 or 皿	T54 下層	-	-	-	底部糸切痕?	良好	灰	-
35-5	須恵器	無高台杯 or 皿	T54 下層	-	-	-	底部糸切痕	良好	灰	-
35-6	須恵器	鉢	T54 下層	-	-	-	外:タタキ後ナデ 内:ケズリ	良好	灰	-

遺物観察表

瓦

挿図番号	器種	出土位置	法量 (cm)	色調・焼成	調整	備考
11-1	丸瓦	T46 4層	残存長 12.1 厚 2.4、重量 0.4kg	黄灰色 軟質	摩耗著しい	—
11-2	平瓦	T46 5層	残存長 11.0 厚 2.5、重量 0.3kg	黄灰色 軟質	凸面：離れ砂	—
11-3	平瓦	T46 5層	残存長 8.2 厚 1.9、重量 0.2kg	黄灰色 軟質	凸面：縄叩き	—
15-12	平瓦	T47 上層	残存長 14.4 重量 0.7kg	にぶい黄褐色 軟質	凸面：縄叩き 凹面：布目、糸切り痕	—
15-13	平瓦	T47 上層	残存長 10.3 厚 2.3、重量 0.5kg	灰色 硬質	凸面：叩き不明、離れ砂 凹面：布目、糸切り痕	—
18-1	軒丸瓦	T47 下層	瓦当径約 14.9、重量 0.9kg	青灰色 硬質	丸瓦部広端に平行キザミ	軒丸瓦 1A 型式
18-2	軒平瓦	T47 下層	残存瓦当幅 9.8、重量 1.0kg	褐色 硬質	平瓦部凹面：布目	軒平瓦 1D 型式
18-3	軒平瓦	T47 下層	残存瓦当幅 8.6、重量 0.7kg	灰色 硬質	平瓦部凸面：ケズリ、ナデ 平瓦部凹面：布目	軒平瓦 1F 型式
18-4	軒平瓦	T47 下層	厚 4.2、重量 1.0kg	灰色 硬質	平瓦部凸面：ケズリ 平瓦部凹面：布目	平瓦部のみ残存 軒平瓦 1 型式？
18-5	軒平瓦	T47 下層	全長 39.0 平瓦部厚 2.9、狭端幅 23.5 残存瓦当幅 6.5、重量 4.1kg	白色 軟質	平瓦部凸面：縄叩き 平瓦部凹面：布目、内叩き	軒平瓦 2 型式
19-1	軒平瓦	T47 下層	残存長 11.8 広端幅 24.2、重量 1.9kg	白灰色 軟質	平瓦部広端面：キザミ	平瓦部のみ残存 軒平瓦 2 型式？
20-1	丸瓦	T47 下層	全長 37.3、筒部厚 2.2 玉縁長 5.1、段高 1.3 重量 2.5kg	灰色 硬質	凸面：ナデ 凹面：布目	有段式 1B 類
20-2	丸瓦	T47 下層	残存長 13.5、筒部厚 1.7 玉縁長 4.8、段高 1.1 重量 0.2kg	灰色 軟質	凸面：ケズリ 凹面：布目	有段式 1C 類
20-3	丸瓦	T47 下層	残存長 10.5 筒部厚 1.9、重量 0.3kg	黄灰色 硬質	凸面：ケズリ 凹面：布目	有段式 2B 類
21-1	丸瓦	T47 下層	全長 33.1 厚 1.6、重量 1.9kg	浅黄褐色 軟質	凸面：ナデ 凹面：布目	無段式
21-2	丸瓦	T47 下層	全長 33.0 厚 2.3、重量 2.0kg	にぶい橙色 軟質	凸面：ナデ 凹面：布目	無段式
22-1	平瓦	T47 下層	全長 35.2 狭端幅 24.6、広端幅 25.8 厚 2.1、重量 3.1kg	黄灰色 硬質	凸面：縄叩き 凹面：布目、糸切り痕	—
22-2	平瓦	T47 下層	残存長 25.5、厚 1.9 重量 1.2kg	灰色 硬質	凸面：縄叩き 凹面：布目、糸切り痕	—
23-1	平瓦	T47 下層	残存長 11.0 厚 2.6、重量 0.8kg	青灰色 硬質	凸面：縄叩き 凹面：布目、糸切り痕 端面：布目	—
23-2	平瓦	T47 下層	残存長 12.7 厚 2.3、重量 1.1kg	灰色 硬質	凸面：格子 10 凹面：布目	—
24-1	平瓦	T47 下層	全長 35.2 狭端幅 26.4、広端幅 27.0 厚 2.2、重量 4.0kg	灰色 硬質	凸面：格子 3、離れ砂 凹面：布目、糸切り痕	—
24-2	平瓦	T47 下層	全長 35.5 厚 2.5、重量 2.2kg	灰色 硬質	凸面：格子 3 凹面：布目、糸切り痕	—
25-1	平瓦	T47 下層	全長 34.3 厚 2.6、重量 2.9kg	灰色 硬質	凸面：平行叩き、離れ砂 凹面：布目、糸切り痕	—
26-1	平瓦	T47 下層	全長 35.1 狭端幅 24.1、広端幅 26.5 厚 1.9、重量 3.1kg	灰黄色 軟質	凸面：縄叩き 凹面：布目、糸切り痕	—
26-2	平瓦	T47 下層	全長 36.7 厚 2.3、重量 2.0kg	灰白色 軟質	凸面：格子 29、離れ砂 凹面：布目、糸切り痕	—
27-1	平瓦	T47 下層	全長 34.5、厚 2.4 重量 2.1kg	灰～灰白色 軟質	凸面：格子 38 凹面：布目、糸切り痕 側面：断面「V」字状カット	—
27-2	平瓦	T47 下層	残存長 34.0 厚 2.6、重量 1.9kg	灰白色 軟質	凸面：格子 29 凹面：布目、糸切り痕	—
28-1	平瓦	T47 下層	残存長 24.7 厚 2.5、重量 1.7kg	灰白色 軟質	凸面：格子 25 凹面：布目、糸切り痕	—
28-2	平瓦	T47 下層	残存長 21.4 厚 2.1、重量 1.4kg	灰白色 軟質	凸面：格子 1 凹面：布目、糸切り痕、補足叩き	—
28-3	文字瓦	T47 下層	厚 2.5、重量 0.5kg	にぶい黄褐色 軟質	凸面：縄叩き 凹面：布目、糸切り痕	「牛」へラ描き
28-4	埴	T47 下層	残存厚 4.3、重量 1.0kg	灰白色 軟質	外面：ケズリ	—
35-7	軒丸瓦	T54 下層	瓦当径約 14.7、重量 0.7kg	灰色 瓦質	丸瓦部広端に平行キザミ	軒丸瓦 1 型式
35-8	軒平瓦	T54 下層	残存瓦当幅 5.5、重量 0.04kg	青黒色 瓦質	摩耗著しい	軒平瓦 1B 型式？

玉

挿図番号	器種	出土位置	法量 (cm)	色調	調整	備考
16-1	ガラス玉	T47 上層	最大径 1.25、厚 0.7	緑色透明	巻き付け技法	北宋代 10 世紀末。

# 写真図版





講堂西側調査地 (T47 ~ T54) 遠景 (北東から)



T47 瓦出土状況 (南から)



T47 瓦出土状況 (南西から)



T47 西壁土層状況



T47 完掘状況 (南東から)



T47 北壁土層状況



図版 4



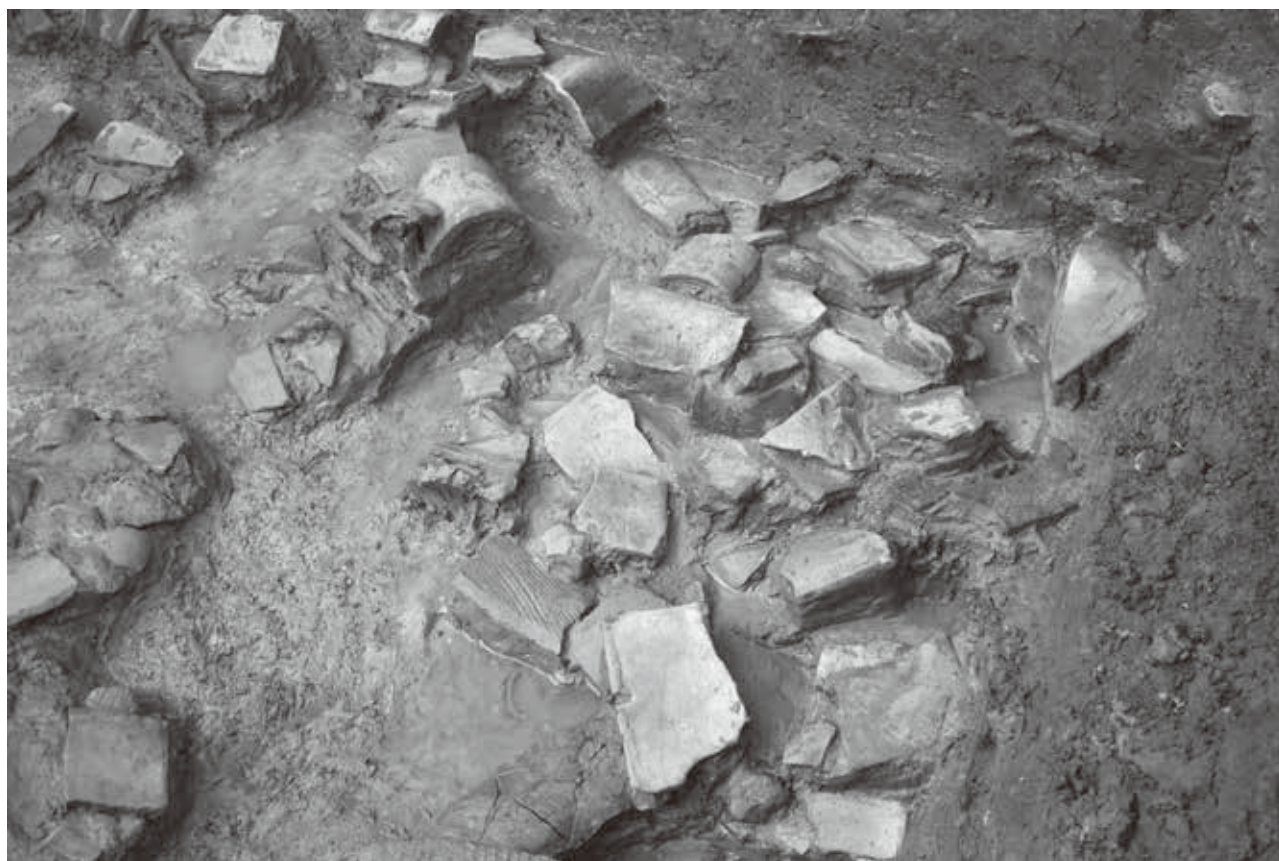
T47 北西角の地山検出状況



T47 SK4701 (南西から)



T47SK4701 瓦出土状况近景



T47SK4701 上面瓦出土状况

图版 6



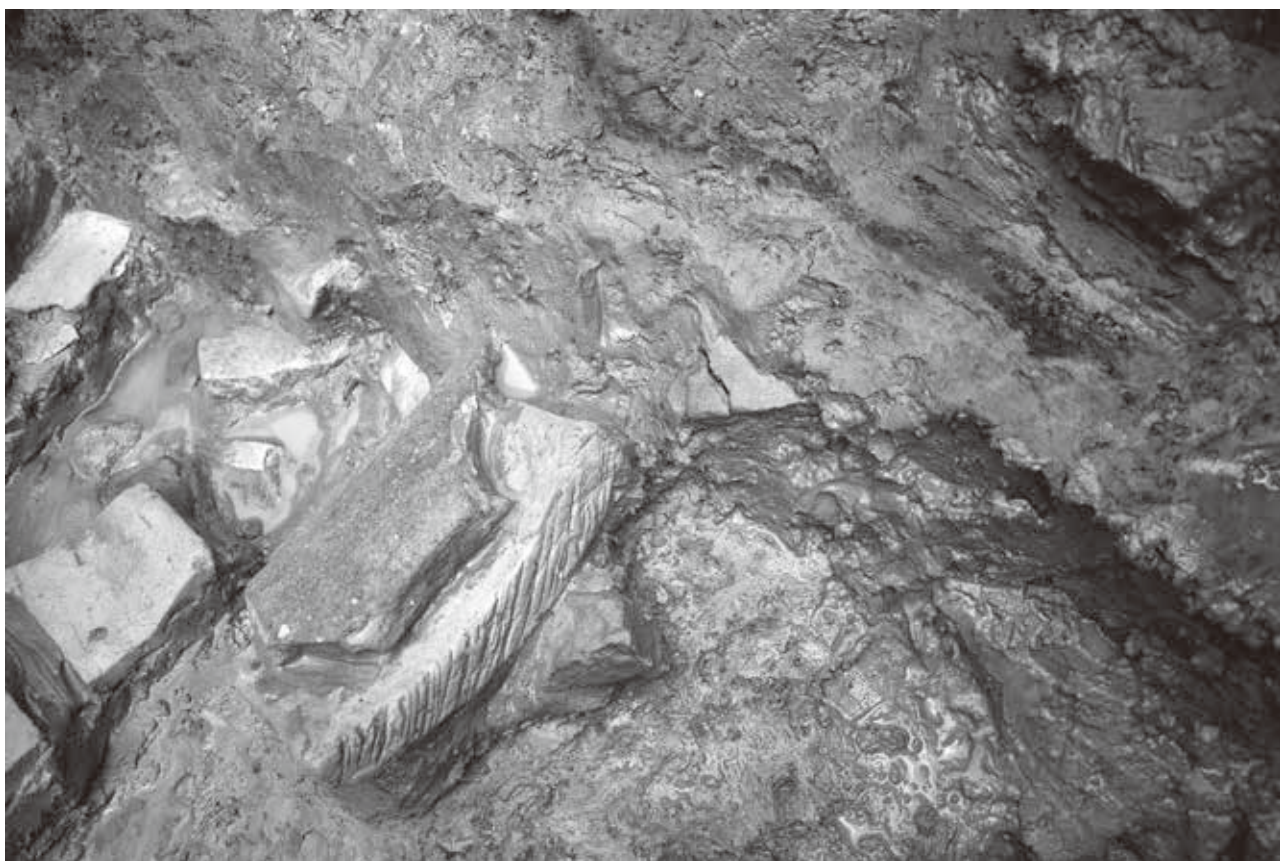
T47 有段式丸瓦 (图 20 - 1) 出土状况



T47 平瓦格子 3 (图 24 - 2) 出土状况



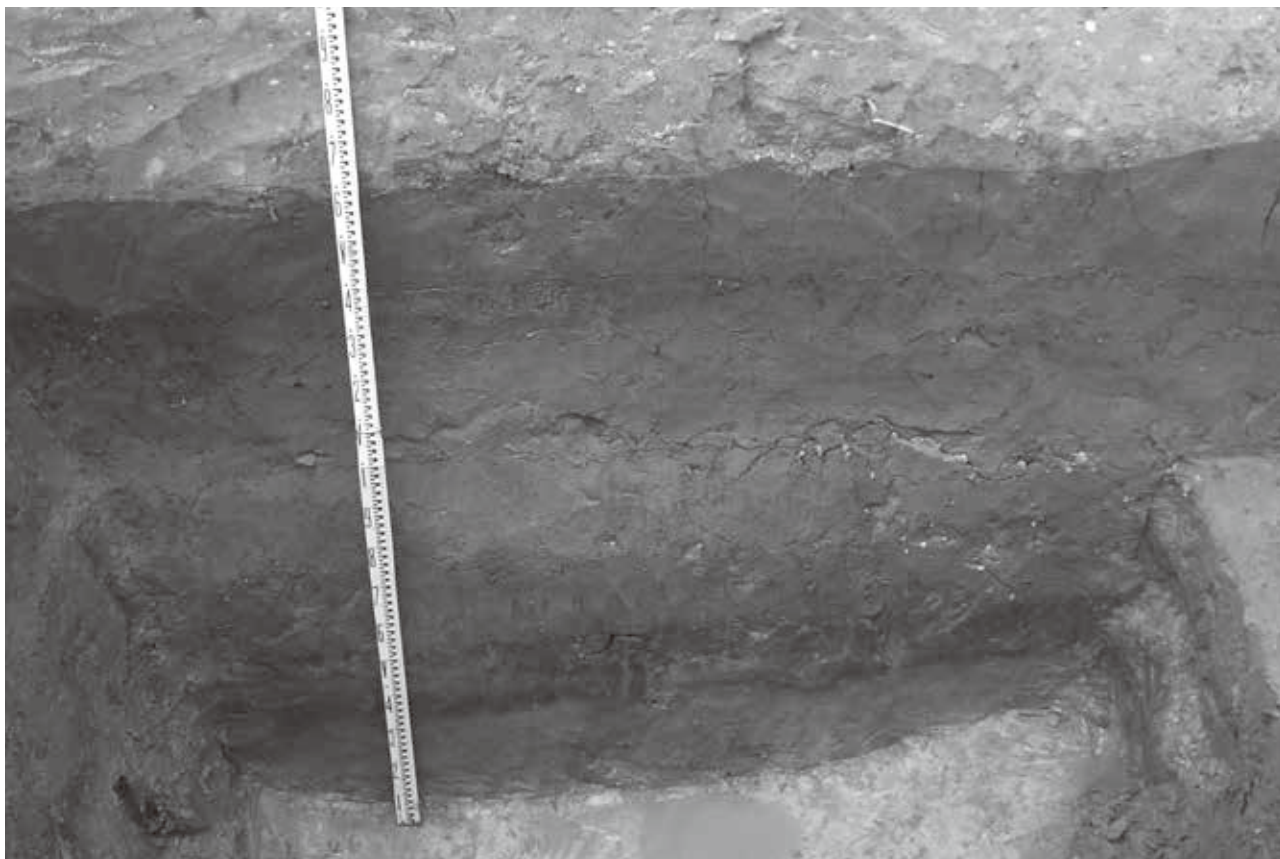
T47 須恵器坏 (図 17 - 6) 出土状況



T47 炭化物層土層状況 (写真右壁面の黑色層)



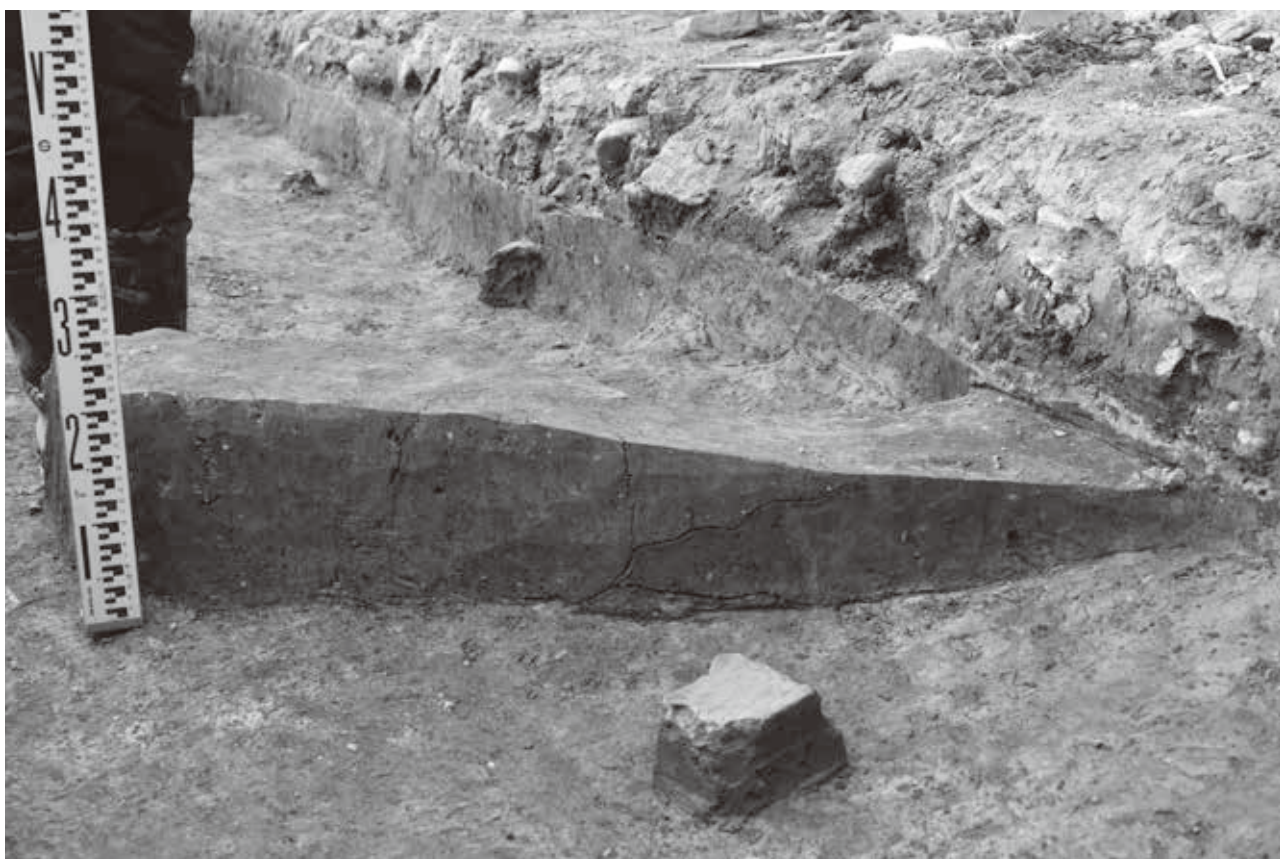
T46 調査後 (南東から)



T46 北壁 (9I - 28区) 土層状況



T48 加工段 SX4814 検出状況 (北から)



T48 包含層土層状況 (図 29 A - A' 断面)



T54 調査後（東から）



T54 南壁土層状況



15-1



15-10



17-3



17-6



30-2

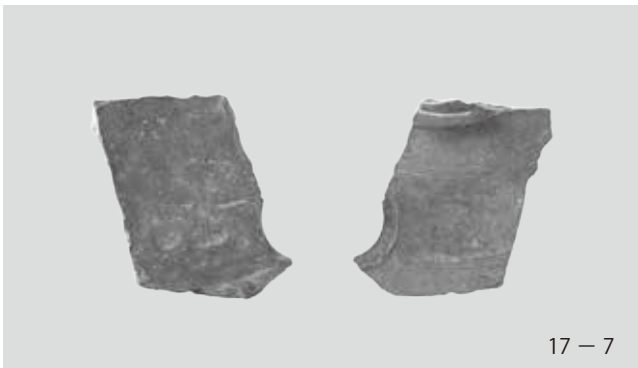


30-3

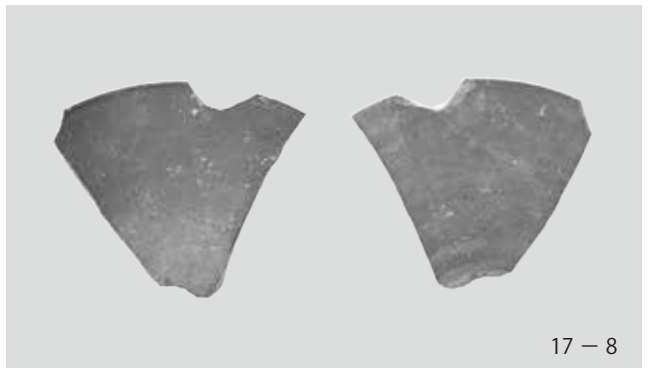


30-3

30-2



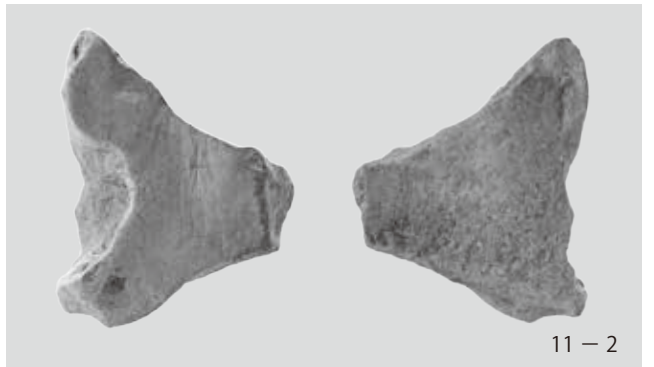
17-7



17-8



11-1



11-2

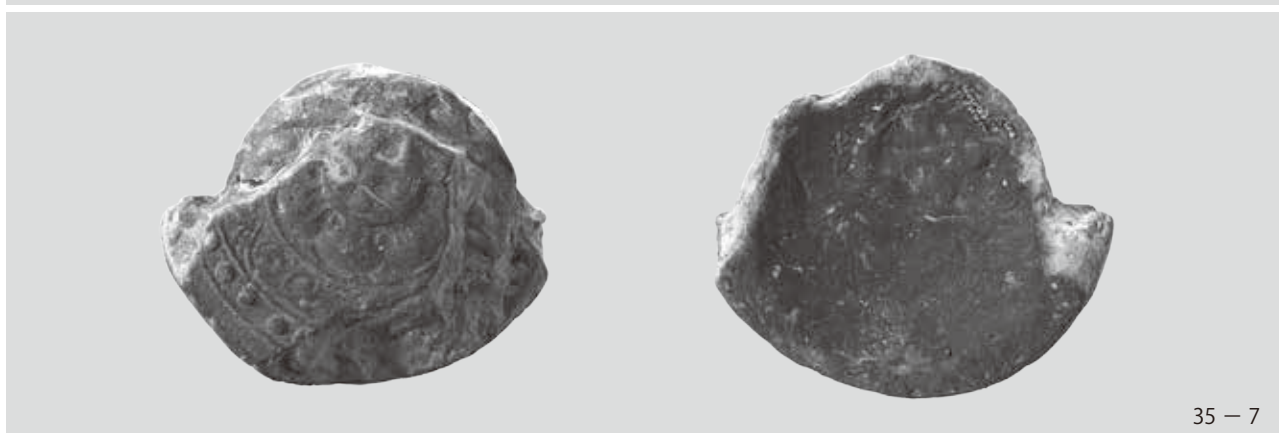


15-13





18-1

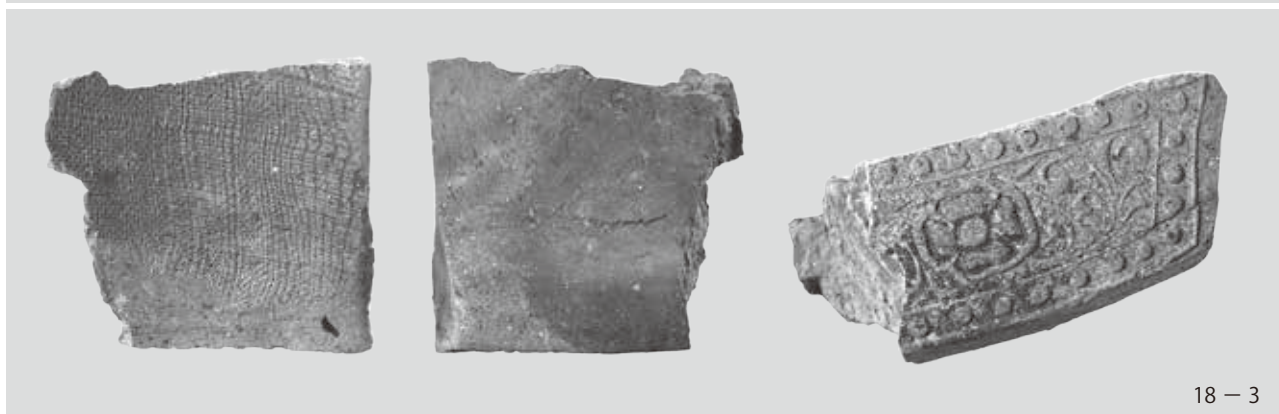


35-7

軒丸瓦 1 型式



18-2



18-3

軒平瓦 1 型式



18 - 5



19 - 1



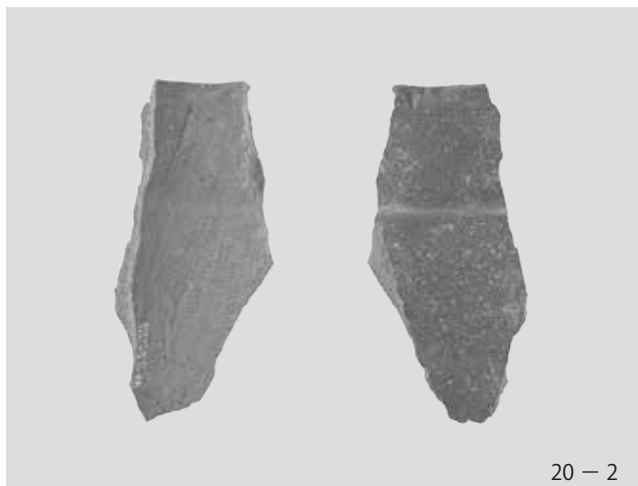
35 - 8

軒平瓦 2 型式 (19 - 1 は平瓦部のみ残存)

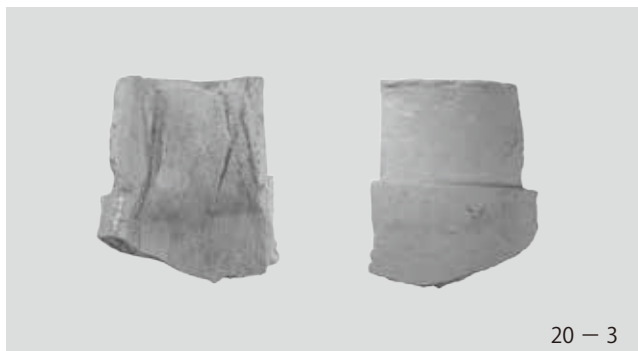
軒平瓦 5 型式?



20 - 1



20 - 2



20 - 3

有段式丸瓦

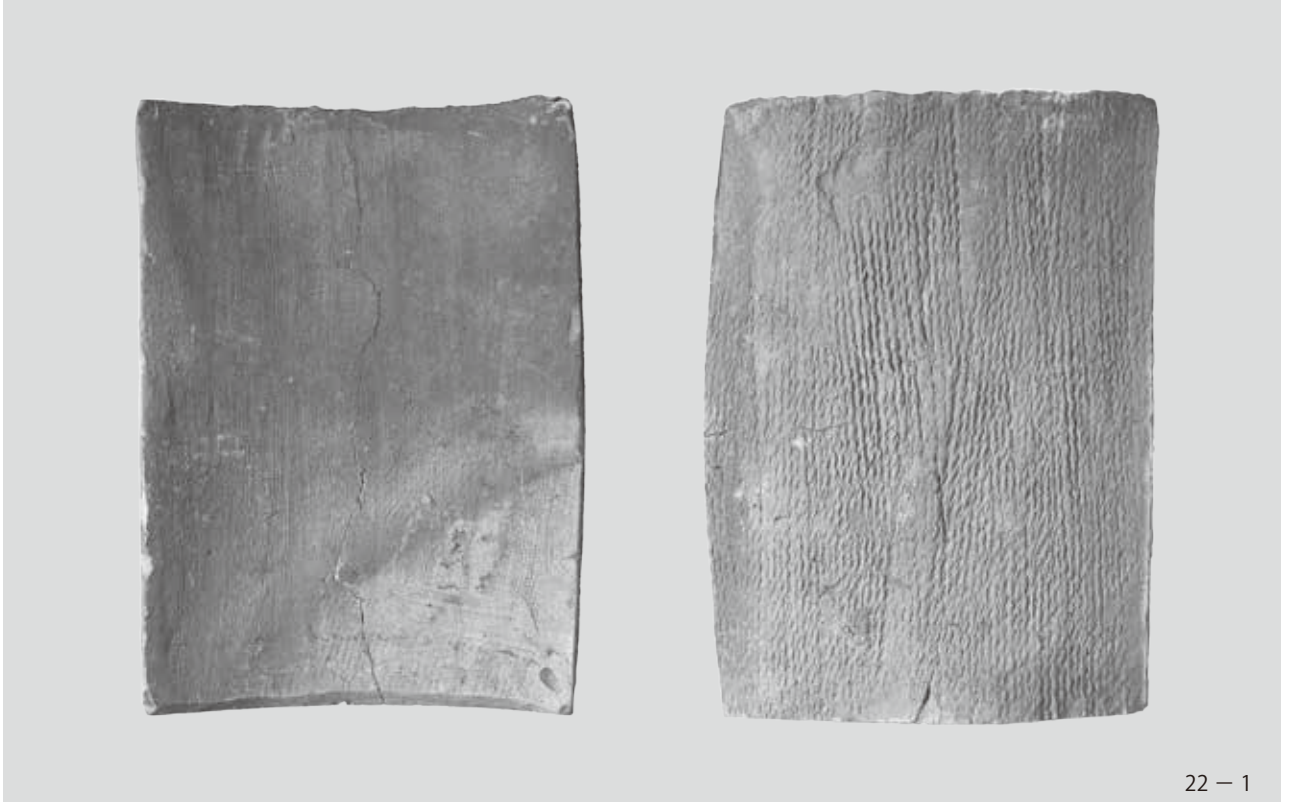


21 - 1



21 - 2

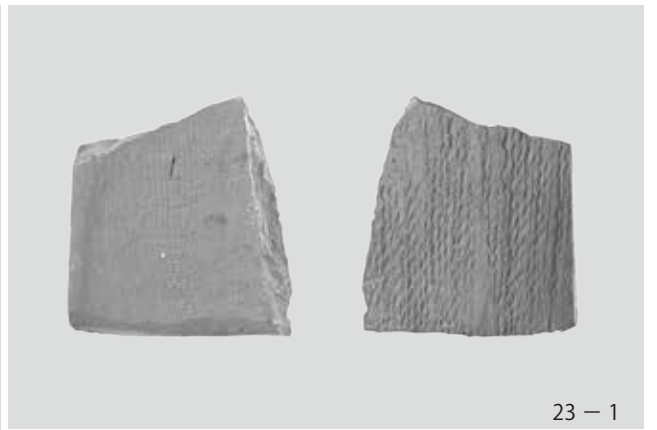
無段式丸瓦



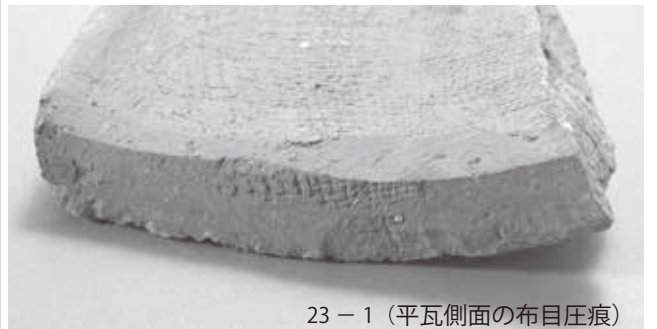
22 - 1



22 - 2

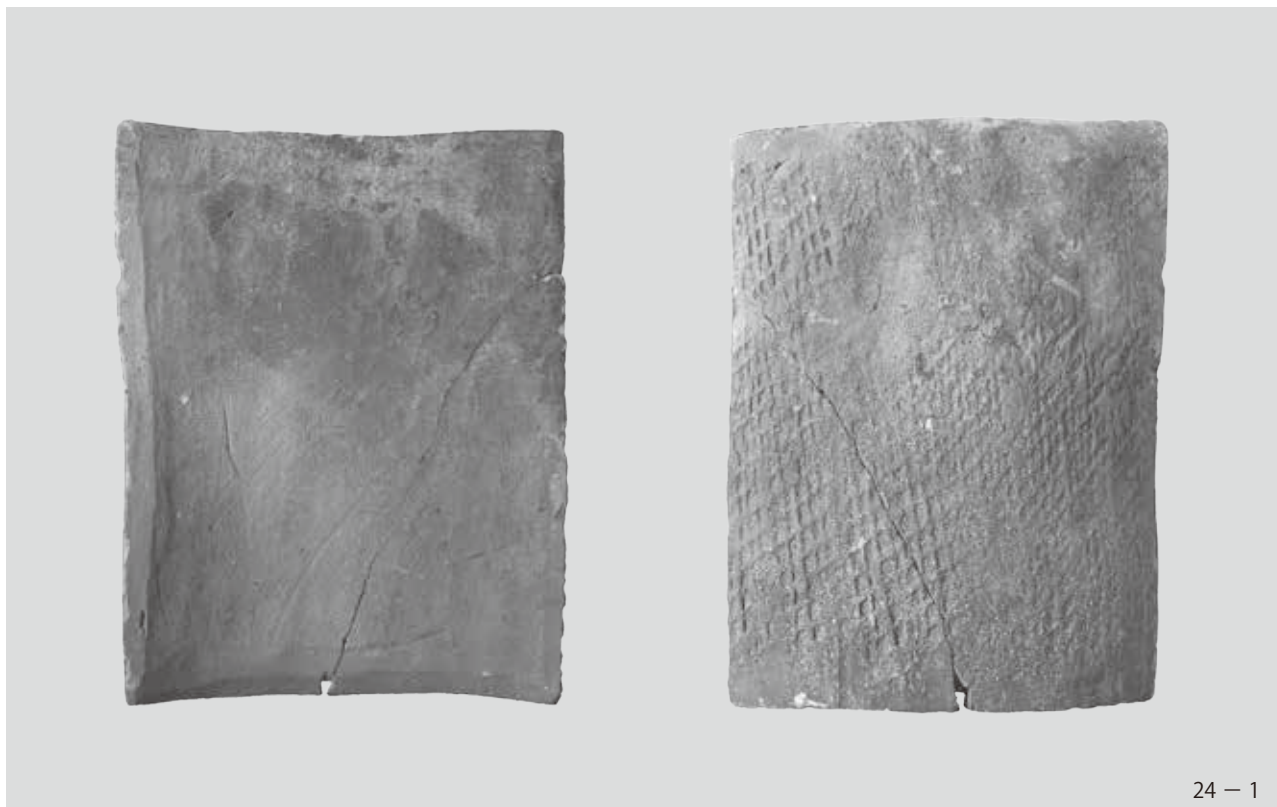


23 - 1

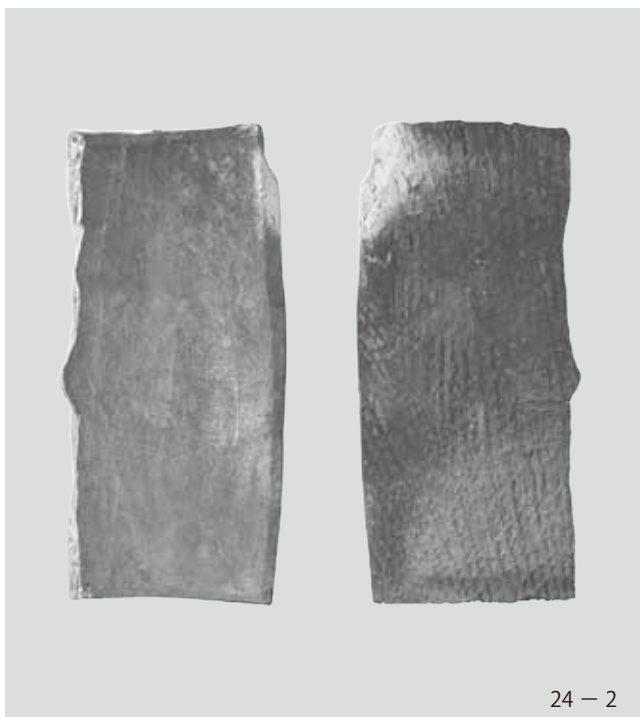


23 - 1 (平瓦側面の布目圧痕)

平瓦 (須恵質、凸面縄叩き)



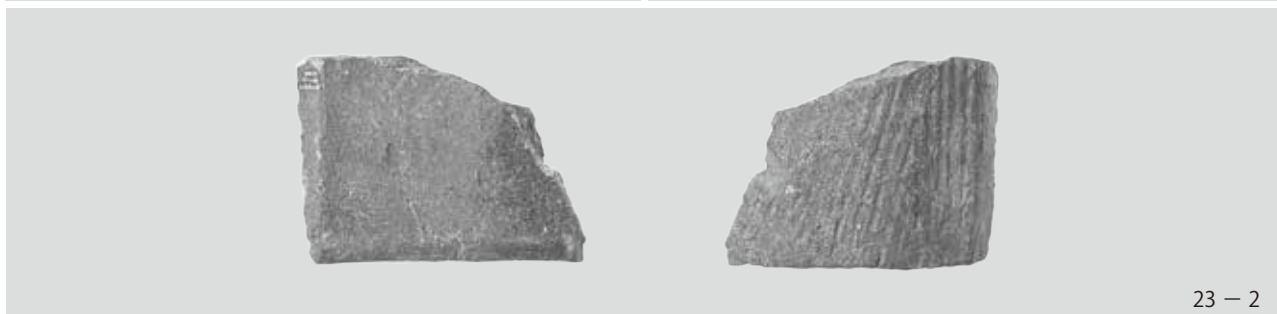
24 - 1



24 - 2



25 - 1



23 - 2

平瓦 (須恵質、凸面格子叩き)



26 - 1



15 - 12



11 - 3

平瓦（軟質、凸面縄叩き）



平瓦（軟質、凸面格子叩き）



28 - 3

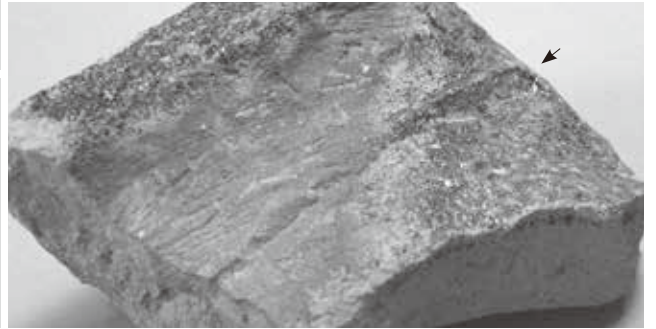


文字瓦「牛」



18 - 5

軒平瓦 2 型式の凹型台痕跡①

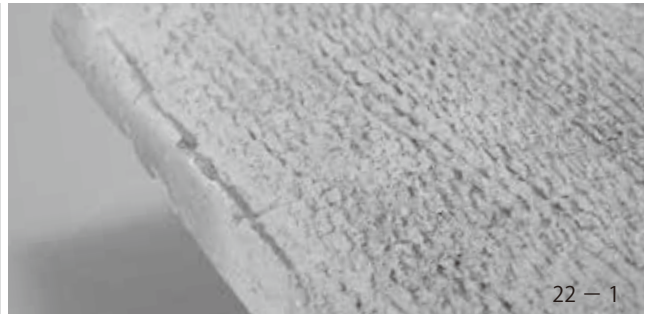


軒平瓦 2 型式の凹型台痕跡② (『総括報告』第 123 図 2)



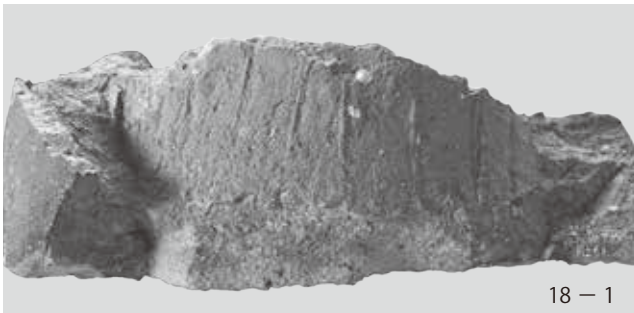
28 - 4

塙



22 - 1

平瓦側面に残る凹型台痕跡



18 - 1

軒丸瓦 1 型式 丸瓦接合状況



18 - 5

軒平瓦 (平瓦部) 凹面叩き痕跡



20 - 1

丸瓦凹面布袋綴じ合わせ



21 - 1

丸瓦凹面布袋の破れ





# 報告書抄録

ふりがな	しせきいずもこくぶんじあとはくつちようさほうこくしょ						
書名	史跡出雲国分寺跡発掘調査報告書						
副書名	第 19 次～第 22 次発掘調査						
巻次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 206 集						
編著者名	田村朋美、永野智朗、三宅和子						
編集機関 所在地	松江市役所 歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室 〒 690 - 8540 鳥根県松江市末次町 86 TEL : 0852 - 55 - 5284						
発行年月日	令和 4 (2022) 年 3 月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
いづもこくぶんじあ 出雲国分寺跡 第 19 次調査	まつえしちくやちようあざじりよう 松江市竹矢町字寺領 500 - 1	32201	D229	35° 26' 18"	20170817	16.53㎡	保存目的調査
				133° 6' 38"	20170823		
いづもこくぶんじあ 出雲国分寺跡 第 20 次調査	まつえしちくやちようあざじりよう 松江市竹矢町字寺領 103 - 2	"	"	"	20181213	9.44㎡	試掘調査
				"	20181225		
いづもこくぶんじあ 出雲国分寺跡 第 21 次調査	"	"	"	"	20190513	27.4㎡	記録保存調査
				"	20190523 20190617 20190619 20190702		
いづもこくぶんじあ 出雲国分寺跡 第 22 次調査	"	"	"	"	20200225	2.99㎡	試掘調査 保存目的調査
				"	20200228		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
いづもこくぶんじあ 出雲国分寺跡 第 19 次調査	寺院跡	奈良～平安時代	包含層	須恵器 瓦	国分寺の整地層と思われる層を検出		
いづもこくぶんじあ 出雲国分寺跡 第 20 次調査	"	"	包含層 瓦廃棄土坑	土師器 須恵器 瓦 ガラス玉	8 世紀後半～9 世紀前葉、11 世紀後半～12 世紀後半の包含層と、地山が段状に削平された平坦面を検出		
いづもこくぶんじあ 出雲国分寺跡 第 21 次調査	"	"	包含層 加工段	土師器 須恵器 瓦	14 世紀頃の包含層と加工段、ピットを検出		
いづもこくぶんじあ 出雲国分寺跡 第 22 次調査	"	"	包含層	土師器 須恵器 瓦	8 世紀後半～9 世紀前葉、11 世紀後半～12 世紀後半の包含層と、段状の落ち込みを検出		
要約	出雲国分寺跡は松江市竹矢町に所在する。平成 29 年～令和元年にかけて、伽藍地北東部と講堂西側の発掘調査を実施した。伽藍地北東部の調査では、国分寺建設に伴う整地層と思われる層が検出された。講堂西側の調査では、丘陵を削平して形成した平坦面を検出した。この平坦面は直上を、瓦を多量に含む 8 世紀後半～9 世紀前葉頃の包含層が覆っており、国分寺の建設に伴い形成された可能性が高い。この平坦面は講堂周辺で一定した高さであり、国分寺建設にあたって東西に水平に整地されたことが明らかとなった。						

松江市文化財調査報告書 第 206 集

## 史跡出雲国分寺跡発掘調査報告書

第 19 次～第 22 次発掘調査

令和 4 (2022) 年 3 月発行

編集・発行 松江市

印刷 有限会社 黒潮社

島根県松江市向島町 182 - 3